

新 町 遺 跡

—福岡県糸島郡志摩町所在縄文遺跡の調査—

V

志摩町文化財調査報告書

第 16 集

1 9 9 2

志摩町教育委員会



新 町 遺 跡

—福岡県糸島郡志摩町所在縄文遺跡の調査—

V

志摩町文化財調査報告書

第 16 集

1 9 9 2

志摩町教育委員会

序

昭和61年に始められた新町遺跡の調査も、今年で5年目を迎えることとなりました。

第1次調査では、弥生早期の支石墓を含む57基の墓が、第2次調査ではその墓域の広がり、第3次調査では古墳時代前期の箱式石棺墓が、第4次調査では中世人骨と縄文遺構と、それぞれの年度において貴重な資料が次々と出土しています。

今回の調査は第4次調査で検出された縄文貝塚の存在を明確にすることを目的として進められました。

今までの調査の結果が、それぞれ素晴らしいものだけに、この第5次調査の成果も期待されます。新町という狭い地域に、縄文時代から中世までの遺跡が所せましと存在しているという事実は、後世に末永く残されるべきものであると思います。

この新町遺跡がその全貌を現す日が一日も早く訪れることを願ってやみません。そして、この遺跡を保存し、公開していくことこそ私たちの義務であると考えます。

また、新町遺跡が文化財の研究と文化財愛護思想の啓発の場となりますよう今後も努力していく次第であります。

最後に、調査に関して指導、助言していただいた諸先生方、雨が多い中発掘調査に従事していただいた地元の作業員の方々を含め、多方面にわたりご協力をいただいたことを簡単ですがこの場を借りて感謝申し上げ、序とさせていただきます。

平成4年3月31日

志摩町教育委員会

教育長 牧 園 照 和

例 言

1. この報告書は志摩町教育委員会が平成3年度に国庫補助を受けて実施した同町所在新町遺跡の重要遺跡確認調査の記録である。
2. 出土人骨検出については九州大学医学部解剖学教室の中橋孝博先生にご協力いただいた。
3. 貝塚調査の際は福岡県教育委員会の小池史哲氏、福岡教育事務所の中間研志氏に指導・助言をいただいた。
4. 遺構の実測・製図・写真撮影、遺物の実測・拓本・製図は河村が行った。また、空中写真は「空中写真企画」に委託した。
5. 本文内、図版中の北は磁北である。
6. 本書の編集は河村が行った。

本文目次

	頁
I. はじめに	1
1. 調査の経過	1
2. 遺跡の位置と環境	3
II. 調査の内容	6
1. はじめに	6
2. 遺構	10
1) 貝塚の調査	10
2) 貝塚の層位	12
1. C-1区の層位	12
2. C-2区の層位	13
3. C-3区の層位	13
4. C-4区の層位	14
5. D-3区の層位	14
6. サブトレンチの調査	14
第10図拡張区土層実測図の説明	折込
3) 土壌墓の調査	18
1. 縄文土壌墓	18
a. 縄文人骨装着の貝製腕輪	20
b. 縄文人骨副葬土器	22

2. その他の土墳墓	23
a. 土墳墓 2	23
b. 土墳墓 3	24
3. 出土遺物	27
1) 土器	27
1. IV-02トレンチ 1 号人骨副葬土器	27
2. B-0 区、B-1 区、C-0 区、C-1 区出土土器	28
3. 1 号土墳墓掘形内出土土器	30
4. C-1 区出土土器	31
5. C-2 区出土土器	33
6. C-3 区、D-3 区出土土器	36
7. C-4 区出土土器	38
8. D-1 区、D-2 区出土土器	41
9. D-3 区出土土器	42
10. D-4 区、D-5 区出土土器	47
11. B-3 区、B-4 区、C-5 区、C-6 区出土土器	49
12. E-3 区、E-5 区出土土器	51
13. 包含層出土土器	51
14. 土製品	52
2) 石器	53
1. 打製石鏃Ⅰ	53
2. 打製石鏃Ⅱ	53
3. 打製石鏃Ⅲ	56
4. 打製石鏃Ⅳ	56
5. 打製石鏃Ⅴ、剥片鏃	59
6. 搔器、石銛等	59
7. 石銛、石鋸等	61
3) 貝製品、骨角器	62
1. 貝製品	62
2. 骨角器	64
Ⅲ. 結語	71

挿図目次

第1図	遺跡位置図（縮尺1/100,000）	3
第2図	矢田溜池表採石匙実測図（縮尺1/2）	4
第3図	縄文時代内湾推定図（縮尺1/30,000）	5
第4図	遺跡付近地形図（縮尺1/5,000）	7
第5図	遺跡地形図（縮尺1/800）	8
第6図	第5次調査位置図（1/100）	9
第7図	新町遺跡第5次調査遺構配置図（縮尺1/100）	11
第8図	グリッド割り付け及び貝層検出箇所（縮尺1/100）	12
第9図	貝塚土層断面実測図（縮尺1/30）	折込
第10図	貝塚土層断面実測図（縮尺1/30）	15
第10-2図	拡張区土層実測図（縮尺1/40）	16
第10-3図	拡張区南壁土層実測図（縮尺1/30）	17
第11図	土壌墓位置図（縮尺1/100）	17
第12図	縄文人骨出土状況実測図（縮尺1/10）	19
第13図	貝製腕輪出土状況実測図（縮尺1/3）	20
第14図	縄文人骨装着貝輪実測図（縮尺1/2）	21
第15図	縄文人骨副葬土器実測図及び拓影（縮尺1/2）	23
第16図	土壌墓2実測図（縮尺1/10）	24
第17図	土壌墓3実測図（縮尺1/10）	25
第18図	IV-02トレンチ1号人骨副葬土器実測図（縮尺1/3）	27
第19図	B-0区、B-1区、C-0区、C-1区出土土器拓影（縮尺1/3）	29
第20図	1号土壌墓掘形内出土土器拓影、実測図（縮尺1/3）	30
第21図	C-1区出土土器拓影（縮尺1/3）	32
第22図	C-2区出土土器拓影（縮尺1/3）	34
第23図	C-2区出土土器拓影（縮尺1/3）	35
第24図	C-2区出土土器拓影（縮尺1/3）	36
第25図	C-3区、D-3区出土土器拓影（縮尺1/3）	37
第26図	C-3区出土土器実測図（縮尺1/3）	38
第27図	C-4区出土土器拓影（縮尺1/3）	39
第28図	C-4区出土土器拓影、実測図（縮尺1/3）	40
第29図	D-1区、D-2区出土土器拓影、実測図（縮尺1/3）	41
第30図	D-3区出土土器拓影、実測図（縮尺1/3）	43

第31図	D-3区出土土器拓影、実測図（縮尺1/3）	44
第32図	D-3区出土土器拓影拓影（縮尺1/3）	45
第33図	D-4区、D-5区出土土器拓影、実測図（縮尺1/3）	48
第34図	B-3区、B-4区、C-5区、C-6区 出土土器拓影、実測図（縮尺1/3）	50
第35図	E-3区、E-5区出土土器拓影（縮尺1/3）	51
第36図	包含層出土土器拓影、実測図（縮尺1/3）	52
第37図	土製品実測図（縮尺1/2）	52
第38図	打製石鏃Ⅰ実測図（縮尺1/1）	54
第39図	打製石鏃Ⅱ実測図（縮尺1/1）	55
第40図	打製石鏃Ⅲ実測図（縮尺1/1）	57
第41図	打製石鏃Ⅳ実測図（縮尺1/1）	58
第42図	打製石鏃Ⅴ、剥片鏃実測図（縮尺1/1）	60
第43図	搔器、石銛等実測図（縮尺1/1）	61
第44図	石銛、石鋸等実測図（縮尺1/1）	63
第45図	貝製品、骨角器実測図（縮尺1/2）	64

表目次

新町遺跡出土縄文土器観察表	65
新町遺跡出土縄文石器観察表	69

図版目次

図版 1	a. 1号縄文人骨検出状況（東から） b. 1号縄文人骨検出状況（北から）
図版 2	a. 1号縄文人骨貝輪装着状況（北東から） b. 1号縄文人骨除去後の貝輪（北から）
図版 3	a. 土墳墓2検出状況（東から） b. 土墳墓3検出状況（北から）
図版 4	a. 貝層上面検出状況（北西から） b. C-3区、D-3区貝堆積状況（北東から） c. C-3区土坑断面（南から）

d. C-2区貝堆積状況（南西から）

e. C-1区東側調査状況（西から）

f. C-1区西側調査状況（南から）

図版 5

a. 縄文人骨副葬土器

b. 縄文人骨副葬土器底部木葉痕

c. IV-02トレンチ中世人骨副葬土器

d. 縄文人骨装着貝製腕輪

図版 6

a. B-0区、B-1区、C-1区出土土器

b. C-2区、C-3区出土土器

図版 7

a. C-4区、D-1区、D-2区出土土器

b. D-3区、D-4区、D-5区、B-3区、B-4区、C-5区、C-6区出土土器

図版 8

a. 包含層出土土器・土製品

b. 打製石鏃・剥片鏃

図版 9

a. 搔器・石鈎・石鋸

b. 貝製品・骨角器

I. はじめに

1. 調査の経過

新町遺跡は昭和61年に志摩町教育委員会が国庫補助を受けて重要遺跡確認調査を実施したのを皮切りに、現在まで4回の調査を行っている。

新町遺跡の調査までの経過は、志摩町文化財調査報告書第7集「新町遺跡」に詳しいので、ここでは割愛するが、この第1次調査で明らかにされた弥生早・前期の墳墓群が投げかけた意義は学史の上でも重要である。

その後第2次調査で弥生中期までの墓域の広がり確認され、新町遺跡における墓域の時期的変遷を把握する事ができた。

第3次調査では古墳時代前期の石棺墓群も検出され、遺跡の年代幅も徐々に増す傾向が見えてきた。

以上の3次にわたる調査は、第1次調査区を設定したギ丁原を中心とした海岸よりの砂丘上に集中していたが、新町遺跡が時期・位置的に当初考えられていた以上に広がりを見せ始め、また、隣接する御床松原遺跡との関連性も問われるようになってきたため、調査区を現在の低湿地をはさんで、北東側の台地にものばす必要が生じてきた。

ここで御床松原遺跡で大挙して検出された住居跡群との接点を見出そうと、第4次調査で3ヶ所にトレンチを設定し、調査を開始した。

しかし、予測された弥生期の住居跡は確認されず、中世土壌墓と縄文後期初頭の土坑群および貝塚が新成果として検出され、その範囲確認が早急の課題となった。

そのため、平成3年度から重要遺跡確認調査として国庫補助を受け、志摩町が事業主体となり調査を開始した。

調査期間と調査組織は下記のとおりである。

発掘調査期間 平成3年5月2日～平成3年8月30日



第1次調査地点全景



第2次調査
II-03・05トレンチ

調査組織

調査主体 志摩町教育委員会

総 括 志摩町教育委員会 教育長 牧園照和

教育課長 吉村啓助

庶 務 社会教育係長 谷口 優

社会教育係 岡崎みどり

調査担当 社会教育係 河村裕一郎

調査作業員 濱近次男 上野花子 坂本ユキエ 山崎真喜江 伊藤美千代（順不同）

調査時において、人骨検出には九州大学医学部解剖学教室の中橋孝博先生に、多忙の中、手をわずらわせていただいた。

また、福岡県教育委員会文化課小池史哲氏福岡教育事務所中間研志氏には有益な指導・助言をいただいた。

人骨の写真撮影時には、前原町教育委員会文化課林寛・岡部裕俊・角浩行各氏にご協力いただいた。

なお、土井良英一新町区長をはじめ、快く発掘調査を承諾してくださった地権者の方々、地元の皆様にも諸々のご協力をいただき感謝の念にたえない。



第3次調査風景



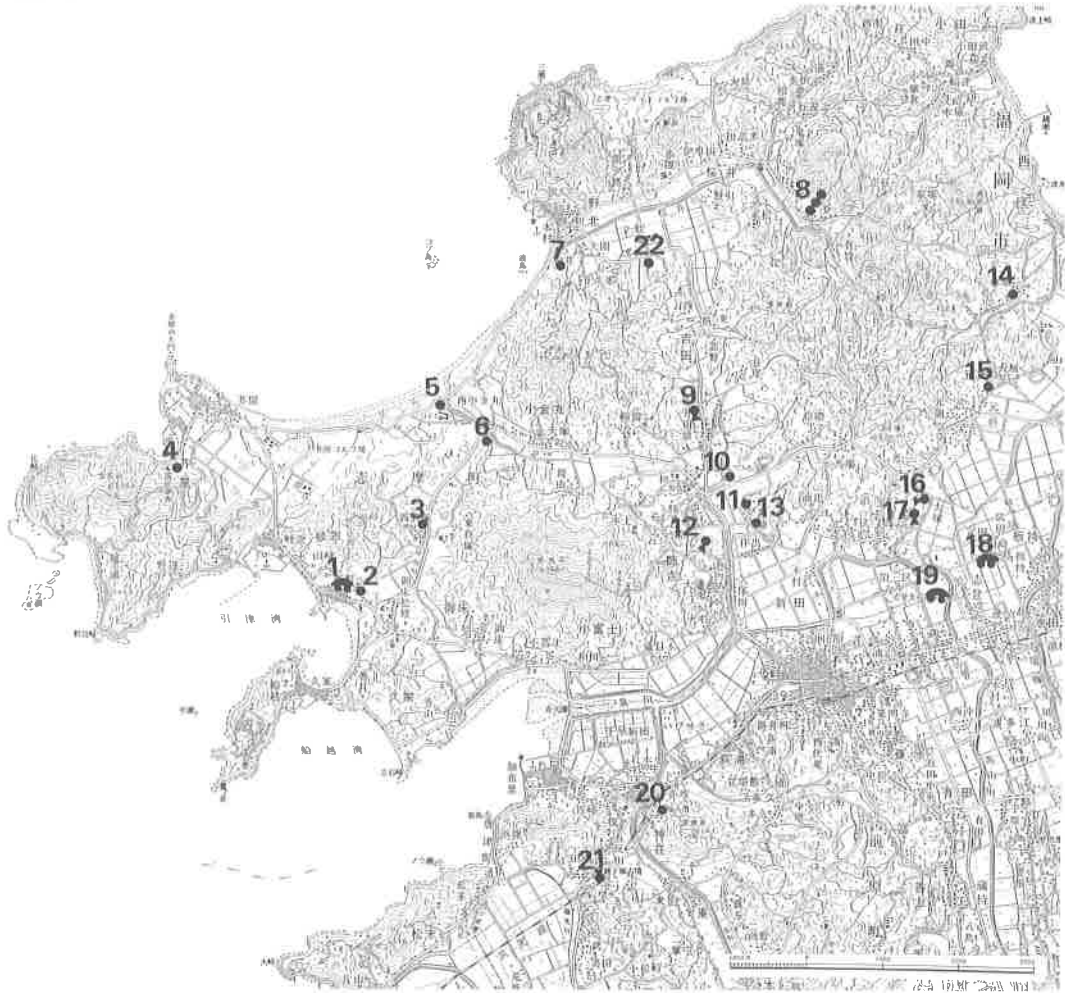
第4次調査
IV-02トレンチ



第3次調査
IV-02トレンチ出土人骨

2. 遺跡の位置と環境

新町遺跡が初めて発掘調査されたのは昭和61年のことである（註1）。この時弥生早期の支石墓を含む57墓の墳墓群が発見され、その重要性から、以降4次にわたる調査が実施された（註2）。



- | | | | |
|------------|---------------|------------|-----------|
| 1. 新町遺跡 | 2. 御床松原遺跡 | 3. 八熊遺跡 | 4. 天神山貝塚 |
| 5. 大牟田遺跡 | 6. 熊添遺跡 | 7. 向畑古墳 | 8. 谷古墳群 |
| 9. 開1号墳 | 10. 四反田古墳群 | 11. 後口古墳 | 12. 稲葉古墳 |
| 13. 権現古墳 | 14. 桑原飛櫛貝塚 | 15. 爪生貝塚 | 16. 泊大塚古墳 |
| 17. 御道具山古墳 | 18. 志登神社支石墓 | 19. 志登支石墓群 | 20. 釜塚古墳 |
| 21. 銚子塚古墳 | 22. 矢田溜池縄文包蔵地 | | |

第1図 遺跡位置図（縮尺1/100,000）

内湾に臨む砂丘上に所在する新町遺跡は、同じく砂丘上に営まれた集落跡である御床松原遺跡（註3）に隣接する。

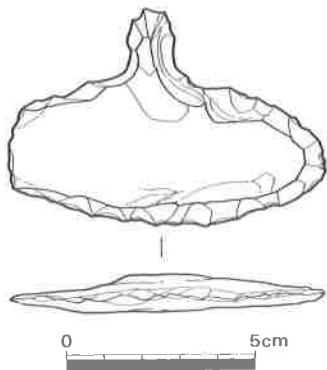
これまでの調査の成果により、遺跡の時期幅も稲作開始期直後の弥生早期から古墳前期までと、御床松原遺跡とともに弥生時代の代表的遺跡として周知されるようになった。

しかし、平成2年度の第4次調査において、中世土壌墓の底部より貝塚の上面が確認され、また、出土した貝殻条痕土器と磨消縄文土器により、それが縄文後期初頭に当たるものと判明した。以前では昭和57年の御床松原遺跡の調査で、下層から縄文土器が出土しているが、遺構に伴っていないので、その所在が懸念されていた経緯があるのみである。

今回の第5次調査では、貝塚のそばから同時代の貝輪を装着した人骨が出土し、その重要性、縄文遺構の保存状態の良好性がクローズアップされた。

糸島半島において縄文期の貝塚は非常に数が少なく、同町所在の天神山貝塚（註4）、福岡市所在の元岡瓜生貝塚、桑原飛櫛貝塚が確認されているにすぎない。

貝塚ではないが、同町大字野北に所在する矢田溜池付近からも石匙が採取されているので（註5、第2図参照）、縄文時代遺跡の分布は全町にわたるものと推測されていた。



第2図 矢田溜池表採石匙
実測図(縮尺1/2)

また、上記人骨の類似例は遠賀郡芦屋町の所在の山鹿貝塚（註6）や同郡岡垣町所在の榎坂貝塚に求めることしかできず、糸島では初の出土となる。

新町遺跡の貝塚の位置は現海岸線から約350m内陸に入っている。これより当時の海岸線は若干内陸部にはいりこんでいたと思われる。

芥屋天神山貝塚の調査の際、出土した魚貝類の遺存体を鑑定した結果、内湾性のものが主体であり、海生食物の採集圏が同町岐志より入り込んだ内湾にあったことが推測されている。

る。

このことから、縄文時代の推定内湾線を基に志摩町西部を対象として当時の海岸線を推定してみると（第3図参照）、現引津湾も西貝塚手前まで東に奥深く入り込み、新町遺跡の縄文遺構も内湾に面した砂丘上に立地していたものと思われる。

註1 志摩町教育委員会「新町遺跡」志摩町文化財調査報告書第7集 1987

註2 志摩町教育委員会「新町遺跡Ⅱ」志摩町文化財調査報告書第8集 1988

志摩町教育委員会「新町遺跡Ⅲ」志摩町文化財調査報告書第11集 1990

志摩町教育委員会「新町遺跡Ⅳ」志摩町文化財調査報告書第14集 1991



第3図 縄文時代内湾推定図(縮尺1/30,000)

註3 志摩町教育委員会「御床松原遺跡」志摩町文化財調査報告書第3集 1983

註4 志摩町教育委員会「天神山貝塚」志摩町文化財調査報告書第1集 1974

註5 昭和57年に表採。

註6 山鹿貝塚調査団「山鹿貝塚」 1972

Ⅱ. 調査の内容

1. はじめに

平成2年度に実施した第4次調査で設定した3ヶ所の調査区のうち、IV-02トレンチから中世土壌墓に埋葬された人骨とともに、縄文後期初頭とみられる貝塚の一部が検出された。

また、IV-02トレンチより南東30メートルに設定したIV-01トレンチからも貝塚と同時期の土坑群が検出されている。

これにより調査地の対象として選んだ台地の東側には、縄文時代の遺構が広がっていることが予測された。



貝塚の発掘風景



縄文人骨の発掘風景

したがって、IV-02トレンチは埋め戻さず、第5次調査として同トレンチを拡幅し、貝塚の検出と中世土壌群の範囲確認を主眼に置き、調査を進めることにした。

調査区の設定はIV-02トレンチの東側を面でおさえることにして、IV-02トレンチの西南隅を基点として北に6m、東に14m拡張した。

調査地として選んだ畑は、北側を走る町道により台形を呈していて、トレンチの北辺も町道に沿う形となったので、調査区は全体的に台形となっている。調査面積はIV-02トレンチと拡張区を含め約100㎡である。

調査の手順としては、IV-02トレンチの層序を基準に上部から全面掘り下げとし、貝塚および中世土壌墓を平面でおさえようとした。上層は遺物包含層となっていて、弥生、古墳時代をはじめ中近世の土器も含

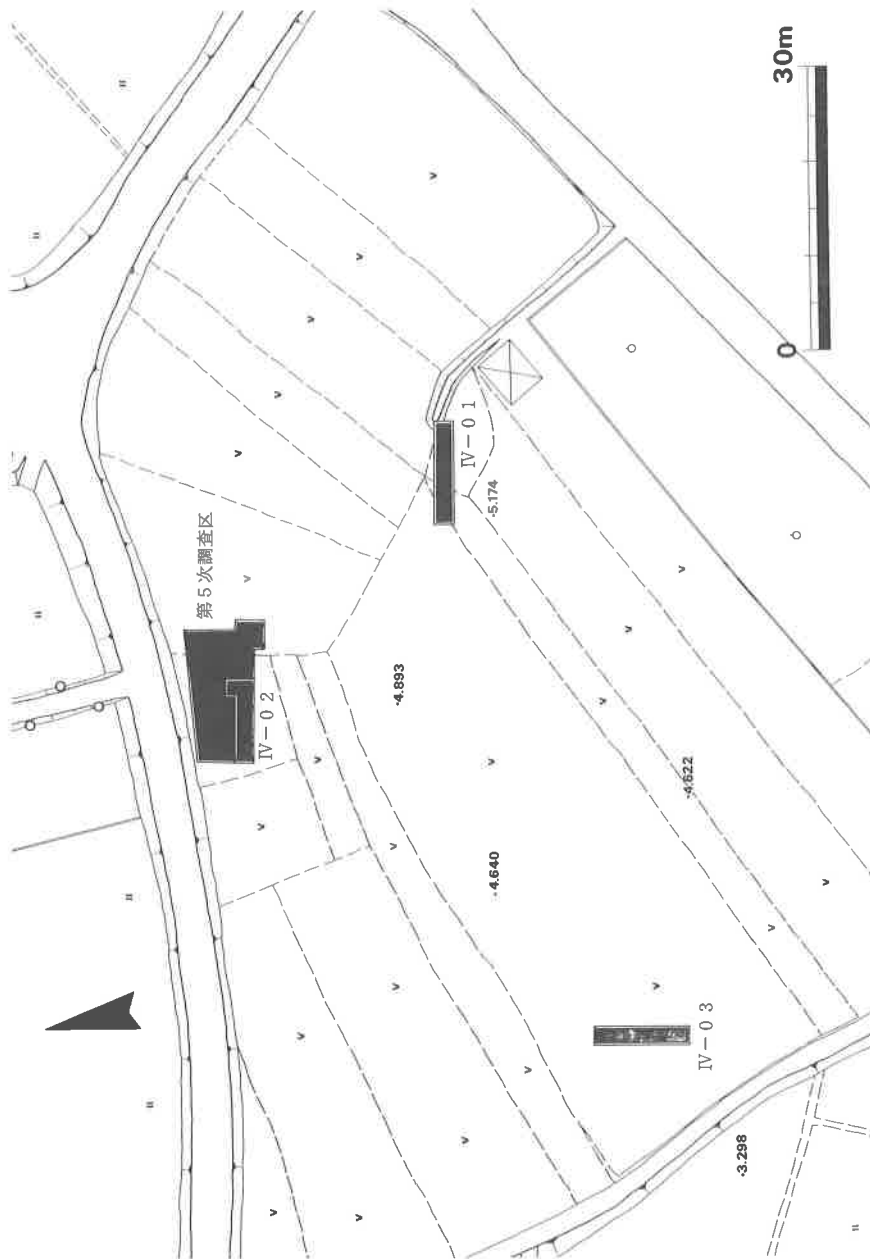


第4図 遺跡附近地形図(1/5,000)

- | | | |
|------------------|----------------|-------------------|
| 1. 新町遺跡第1次調査地点 | 2. 御床松原遺跡 | 3. 鉄戈出土推定地(昭和38年) |
| 4. 貨泉出土推定地(大正6年) | 5. 新町遺跡第2次調査地点 | |
| 6. 新町遺跡第3次調査地点 | 7. 新町遺跡第4次調査地点 | |

んでいた。

結果的には、東半分が縄文期の貝層面となり、付近より同時期の土壌墓が検出されたので東南隅を拡張することになった。IV-02トレンチで検出されていた貝塚は、北および西方には伸



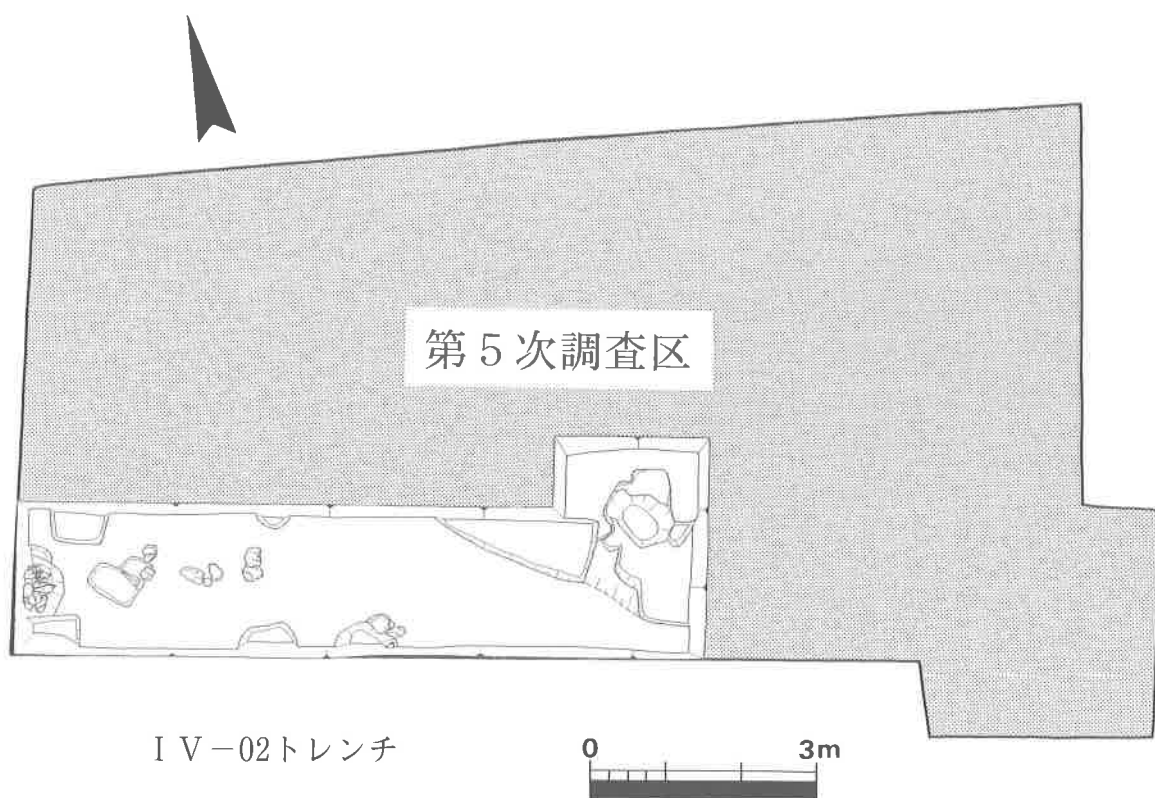
第5図 遺跡地形図(縮尺1/800)

びず東半分を占める形で確認された。貝塚は砂丘上に構築されているが、トレンチ内の状況を見る限り、一部人工的な土坑を掘り込んでいるものの、自然地形を利用して貝殻を捨てているようである。

調査中はあいにくの天候で雨が多く、また、調査地の湧水も著しく、排水装置を継続して使用しても調査区が水没することが多々あった。特に縄文人骨検出時は人骨の周りに土嚢で堰をつくり水没しないようにし、上にテントをかぶせて調査を進める始末であった。

そのため調査中盤から検出された貝塚のみを調査対象とし、グリッド方式の調査に変更した。東南側を優位点とした方眼を組み、北にアルファベット、西に数字をふり、遺構、遺物ともグリッド番号で扱うことにした。以下、全体的な説明の他はグリッド番号を使用し、報告を進める。

なお、IV-02トレンチはこの調査では精査しておらず、前回調査時のままとしている。IV-02トレンチからの出土遺物も、あわせてここで報告していく。



第6図 第5次調査位置図(縮尺1/100)

また、貝層の剥ぎ取りを九州歴史資料館横田義章氏の指導のもとに行ったが、その詳細はここでは割愛する。



貝層剥ぎ取り風景

2. 遺構

1) 貝塚の調査 (第7図、第8図)

貝塚の存在が初めて認識されたのはIV-02トレンチ調査時のことで、人骨除去後の中世土壌墓の底部に貝層の一部が見られたことに始まる。

この中世土壌墓の位置は第5次調査区の南側のほぼ中央にあたり、当初貝塚は東側に広がるものと思われた。

しかし、調査区を全面にわたり掘り下げてみると、調査区を南東から北に分断するように貝は分布している。調査区の層序をみてみると、基本的にはIV-02トレンチと変化はない。貝塚が現れる層も先の調査でみられた中世土壌墓下にあった暗灰褐色砂である。

しかし、同層は西側が高く、北東側に低くなっている状況で、北東側は同層の上に硬い暗灰茶色砂質土が堆積している。この暗灰茶色砂質土には主に古墳時代から中世までの土器が含まれているが遺構は伴わない。後述する人骨も上面が破壊されていて、縄文層の上部はすでにないことを示している。確認はしていないが、北東側の縄文遺構は削平されている可能性もある。

全体的にみて、暗灰褐色砂は西南から北東に下がっていて、貝殻はその谷間に捨てられているようである。ただし、調査区東側には、はっきりと掘形を設け中に堆積している状況も見られるので、自然地形だけを利用しているわけではない。

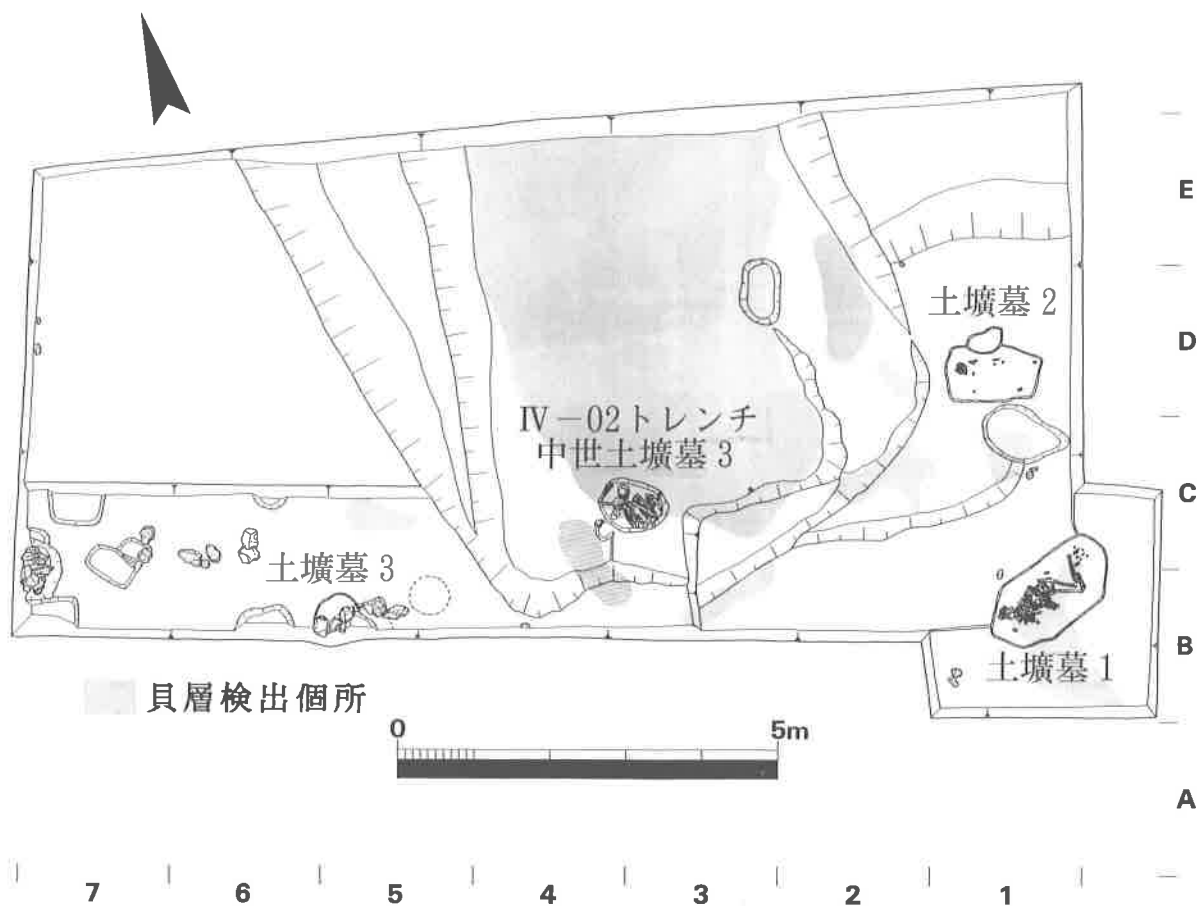
調査区中央部の落ちこみに顕著な貝殻の分布がみられるが、これはその一部しか検出していない。これはちょうど貝層の下に湧水点があったことで、北側の貝層が調査中に崩壊したことにより、平面的な遺構検出に無理が生じたこともあって、途中で検出を止めた経過があるためである。

貝層の範囲がほぼ確定できたのは、後にサブトレンチを北側に延びるであろう貝層の広がりの確認を試みた結果による。

また、縄文期砂層からは2基の土壙墓が検出されている。後に1層上の暗灰茶色砂質土から1基の土壙墓が検出された。砂層から検出された2基の土壙墓は、貝塚と時期を同じにする縄文後期初頭で、暗灰茶色砂質土から検出された土壙墓は掘り込まれている層から、IV-02トレンチ出土の中世人骨と同時期である可能性が高い。

このうち完掘したのは縄文後期の土壙墓1基のみで、残りの2基は位置を確認したに留めた。

次頁より、貝層および上記の土壙墓、出土遺物の説明をグリッド番号を使用しながら進めていく。



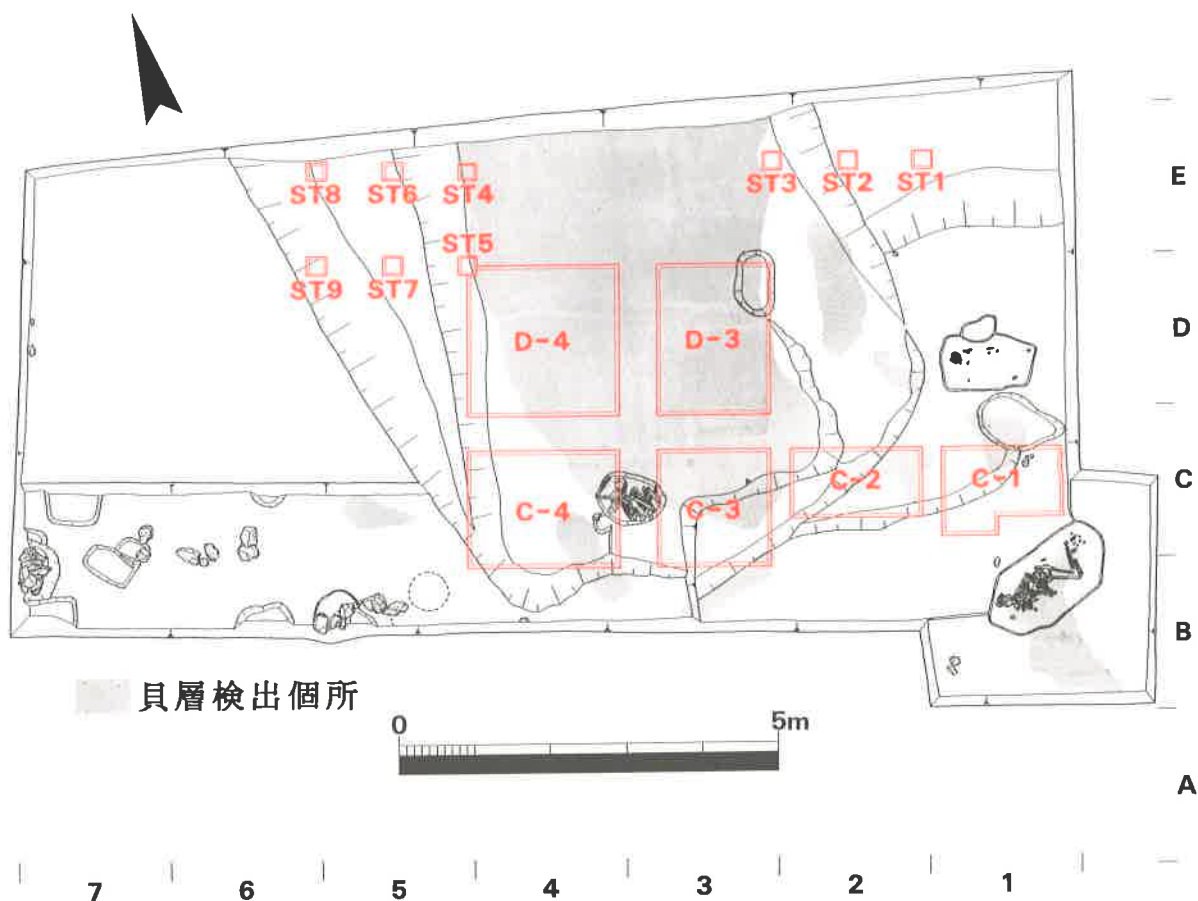
第7図 新町遺跡第5次調査遺構配置図 (縮尺1/100)

2) 貝塚の層位 (第9図、第10図、第10-2図、第10-3図)

調査の後半からグリッドを設定して、貝塚の層位の把握に努めた。グリッドの一边は2mとし、C-1、C-2、C-3、C-4、D-3と5カ所に設定した。

しかし、遺構面が砂地であることに加え、地下からの湧水により土層観察用に残した畦が崩壊し、実質正方形にはなっていない。

1. C-1区の層位



第8図 グリッド割り付け及び貝層検出箇所 (縮尺1/100)

調査区の東端に位置する。また、後述する縄文土墳墓に最も近いトレンチでもある。

ここでは顕著な貝の堆積は認められず、平面でも1m四方ほどの広さに貝が集中している程度である。ここは遺構面である暗茶褐色砂を掘り込んで大量の貝殻を捨てていて、人工的な土坑とも考えられる。

暗茶褐色砂は調査区の中央付近から北側にむけて下がっていく様子を見せているが、これは自然地形としての落ち込みであろう。

2. C-2 区の層位

C-1 区の土坑と思われる貝の堆積と同様の箇所がここでも認められる。明確な掘形がみられ、暗茶褐色砂が埋土になっている。しかし、同じ埋土ながらも貝の種類によって3層に分かれていて、下から二枚貝、小型巻貝、二枚貝となっている。

北壁の西端にも貝の堆積層がかかっている、暗茶褐色砂はこの辺りから徐々に低くなっている傾向をみせ、旧砂丘の地形を表している。しかし、貝の堆積が始まる東側は暗茶褐色砂を切りこんでいる掘形と思われる明確な線がみられるが、これが意図的に掘られたものかははっきりしない。

南壁にみられる淡茶褐色砂は二枚貝、巻貝を多量に含んでいて、これは調査区の南側から西側にかけて広く分布している。また、この層は全体的な層位からみて、早い時期に貝を捨てているものと思われる。

3. C-3 区の層位

調査区中央部から北側にかけて捨てられている貝の堆積層をみると、基本的には3つの層によって構成されている。上から暗淡灰褐色砂質土、淡茶褐色砂質土、淡茶褐色砂となる。場所によっては同一層だが、含まれる貝の量、種類が著しく異なる場合もあるが、これは貝塚の形成過程を考えると納得のいく部分であると言ってよい。貝の下層は淡黄白色の砂があり、遺物は含んでいない。

中央部北面には貝塚を切って暗灰褐色砂質土が埋土となる土坑が1基ある。この土坑は形成された後、上に貝殻を捨てられているので、当初の平面検出では確認できず、トレンチで貝塚を断ち割ったときに初めてその存在が確認できた。この土坑には貝殻をはじめ、遺物がまったく入っていないので用途等の詳細は不明である。

当区の西側は、淡茶灰褐色砂土の上に淡暗黄褐色砂が堆積している。これを断ち切るように暗灰褐色砂質土が混入しているが、これは中に縄文土器と貝を大量に含んでいることもあって、

縄文期の土坑と思われる。

また、西壁北側には、上記の縄文土坑と同じく淡暗黄褐色砂土を切りこんで暗灰褐色土を埋土とする土坑があるが、この埋土中には貝はまったくなく、弥生土器が混入しているので、後世に構築されたものと思われる。用途等の詳細は不明である。

なお、この西壁で貝層の剥ぎ取りを行った。

4. C-4 区の層位

C-4 区の位置は、調査区西側から東に砂丘が下がりつつある所にあり、IV-02トレンチの拡張区に重なる場所でもある。IV-02トレンチ調査時に検出された中世土壌墓底部で確認された貝層の上面もこの部分にあたる。

ここの層位も基本的にはC-3区と変わらず、3層で構成されていて、層位底部には淡茶褐色砂に貝が多量に混入している。しかし、西側にいくにつれて貝の堆積は薄くなり、C-5区からは貝をまったく混入しない細砂となり、貝塚がこの辺りで終わる様相をみせる。

すなわち、旧地形である砂丘がC-5区以西にその高まりがあることを示している。

5. D-3 区の層位

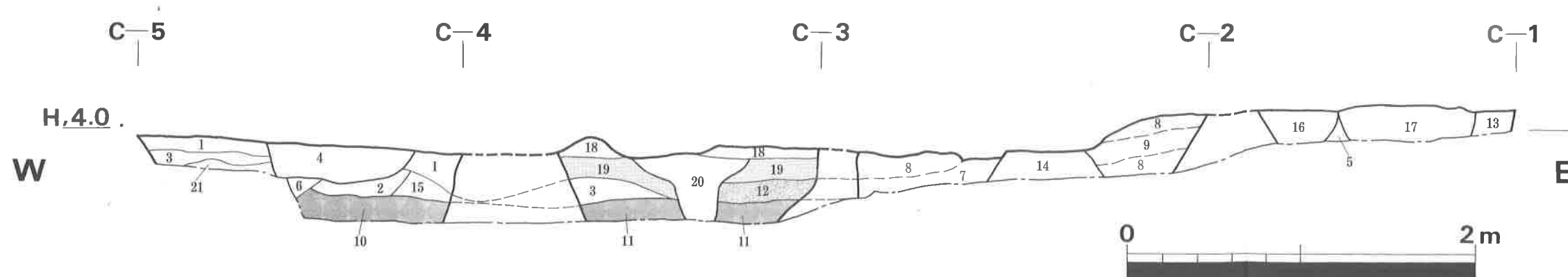
D-3区以北は調査途中の湧水によって2 m以上も土層観察用の壁面が崩壊してしまったので、急遽断ち割る箇所を北にのぼし、崩壊した部分を推定復元することに努めた。

D-3区からE-3区、F-3区にかけて、調査区南側でみられた地山面である淡黄白色砂は急に落ち込む様子をみせ、貝の堆積も厚くなっている。

しかし、C-3区でみられる淡茶褐色砂は姿を消し、淡茶灰褐色砂とその上に広がる暗灰褐色土の2層のみとなっている。淡茶灰褐色砂には貝の破砕片が少量混入しているだけだが、この層はF-3区辺りから下層の淡黄白色砂とともに下のほうへ落ち込んでいく。暗灰褐色土には貝が多量に含まれていて、土坑により破壊されているにもかかわらず、層の厚みは北側にいくにつれて増している。

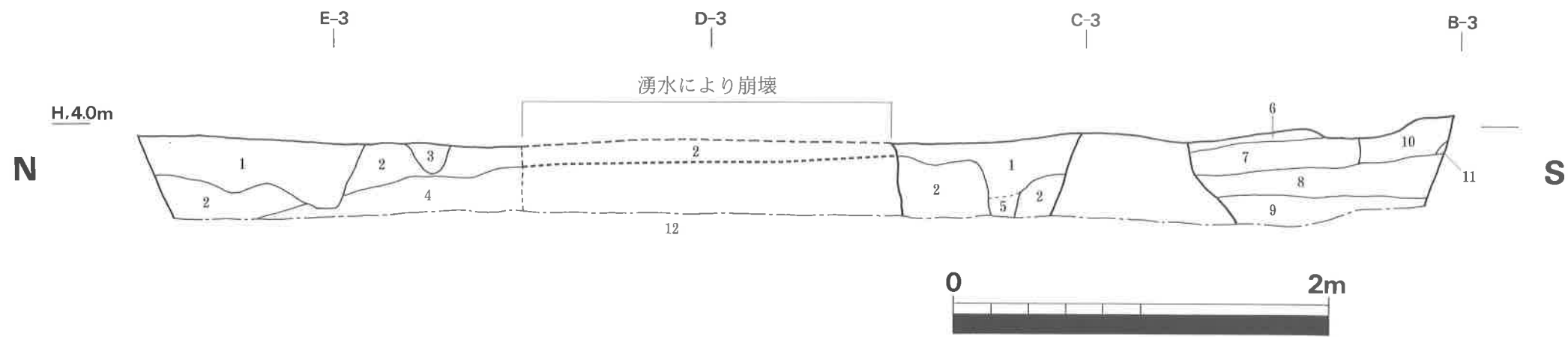
F-3区で調査区が終わっていて、その北側は町道があるので調査はここで止めるに至ったが、周辺地形をみる限り、町道北側にある低湿地に向かい、さらに旧砂丘は下がっているものと思われる。

6. サブトレンチの調査



1. 調査区東西方向断面

- | | | | |
|----------------------|--------------------|----------------------|----------------------|
| 1. 暗褐色砂 | 7. 暗茶褐色砂土 | 13. 淡茶褐色砂（縄文人骨層） | 19. 暗淡灰褐色砂質土（破碎貝が多い） |
| 2. 暗褐色砂（破碎貝を含む） | 8. 暗茶褐色砂土（二枚貝が多い） | 14. 淡茶灰褐色砂土 | 20. 土坑（暗灰褐色砂質土） |
| 3. 淡黄褐色砂 | 9. 暗茶褐色砂土（小型巻貝が多い） | 15. 淡暗褐色砂（破碎貝を含む） | 21. 暗褐色砂混淡黄褐色砂 |
| 4. 土坑（暗茶褐色砂質土） | 10. 淡茶褐色砂（完形の貝が多い） | 16. 淡暗茶褐色砂質土（完形貝が多い） | |
| 5. 暗茶褐色砂質土（破碎貝を少量含む） | 11. 淡茶褐色砂（破碎貝若干含む） | 17. 暗茶灰褐色砂質土（完形貝が多い） | |
| 6. 明黄褐色砂 | 12. 淡茶褐色砂（貝は少ない） | 18. 暗灰褐色砂質土（完形貝が多い） | |



2. 調査区南北方向断面

- | | | | |
|------------------|------------------------|-------------------|----------------|
| 1. 暗茶灰褐色土 | 4. 淡茶灰褐色砂（破碎貝を含む） | 7. 暗淡灰褐色砂質土（貝は少量） | 10. 暗褐色砂混淡茶褐色砂 |
| 2. 暗灰褐色土（完形貝が多い） | 5. 暗茶灰褐色土より僅かに茶色い（貝少量） | 8. 淡茶褐色砂（貝を少量含む） | 11. 貝のブロック |
| 3. 土坑（暗茶褐色砂土） | 6. 暗灰褐色砂質土（完形貝が堆積） | 9. 淡茶褐色砂（破碎貝を含む） | 12. 淡黄白色砂 |

第9図 貝塚土層断面実測図（縮尺1/30）

第10図貝塚土層断面実測図の説明

a. C－1区東壁土層図

1. 耕作土
2. 淡灰褐色砂質土
3. 暗茶褐色土
4. 淡暗黄褐色砂
5. 暗茶褐色砂質土

b. C－1区西壁土層図

1. 暗茶褐色砂（縄文土墳墓）
2. 暗茶灰褐色砂質土
3. 淡暗茶褐色砂質土（完形の貝を多量に含む）
4. 暗茶褐色砂質土（破碎された貝を少量含む）

c. C－2区東壁土層図

1. 暗茶褐色砂質土（完形の二枚貝が多い）
2. 土坑（埋土は暗灰褐色土）
3. 土坑（埋土は暗灰褐色土）
4. 小型巻貝が多量に含まれる層
5. 完形二枚貝が多量に含まれる層

d. C－2区南壁土層図

1. 土坑（暗灰褐色土）
2. 暗黄褐色砂質土
3. 暗茶褐色砂質土（小型巻貝、破碎貝を多く含む）
4. 淡茶褐色砂（完形の二枚貝、巻貝が多い）

e. C－3区南壁土層図

1. 暗褐色砂混淡茶褐色砂
2. 暗淡灰褐色砂質土
3. 完形の貝のブロック
4. 貝のブロック
5. 淡黄茶色砂（貝はごく少量）
6. 淡茶褐色砂（貝はごく少量）

f. C－3区、D－3区西壁土層図

1. 明黄褐色砂
2. 淡暗黄褐色砂質土（完形の二枚貝を多量に含む）
3. 暗灰褐色砂質土（破碎貝を多量に含む）
4. 淡暗黄褐色砂質土（完形の二枚貝を多量に含む）
5. 弥生時代土坑（埋土は暗灰褐茶色土）
6. 暗灰褐色砂質土（破碎貝を多量に含む）
7. 暗淡黄褐色砂（破碎貝を多少含む）
8. 淡茶灰褐色砂質土（二枚貝、巻貝を多量に含む）
9. 暗黄褐色砂

g. C－4区東壁土層図

1. 淡灰褐色砂質土（貝含む）
2. 暗褐色砂
3. 淡灰褐色砂混淡黄褐色砂（貝含む）
4. 淡茶灰褐色砂
5. 淡暗褐色砂
6. 淡茶灰褐色砂
7. 淡茶褐色砂（完形の貝を多量に含む）

h. C－4区南壁土層図

1. 淡灰褐色砂質土（貝含む）
2. 淡茶灰褐色砂
3. 明黄褐色砂
4. 淡茶褐色砂（完形の貝を多量に含む）
5. 暗褐色砂混淡黄褐色砂
6. 淡茶褐色砂（貝ごく少量）

i. C－4区西壁土層図

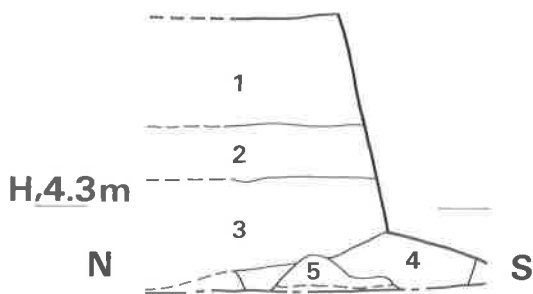
1. 暗灰褐色砂質土（完形の貝の堆積）
2. 土坑（暗灰褐色素質土）
3. 淡黄褐色砂
4. 淡茶褐色砂に破碎貝が集中

註 第10図貝塚土層断面図は、表土等除去後、貝塚の上面を検出した箇所からの土層観察のものである。

第10－2図拡張区土層実測図、第10－3図拡張区南壁土層実測図の説明

1. 表土（淡黄茶褐色砂質土）
2. 床土（淡灰褐色砂質土）
3. 暗茶褐色土（遺物包含層）
4. 暗黄褐色砂（縄文人骨検出層）：遺構面
5. 暗茶褐色砂（完形の貝を多少含む）：遺構面
6. 淡灰黄褐色砂質土

註 第10－3図拡張区南壁土層実測図は、厳密にいうと拡張区のものではなく、第5次本調査区の南壁である。ここは第4次調査Ⅳ－02トレンチ南壁を東側に延長した部分でもある。



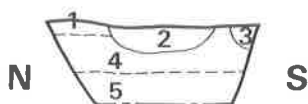
a. C-1区 東壁土層図



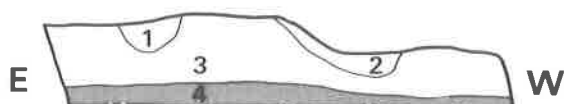
b. C-1区 西壁土層図

H,4.3m

H,4.3m

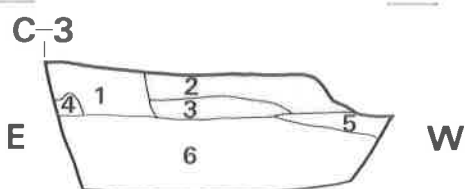


c. C-2区 東壁土層図



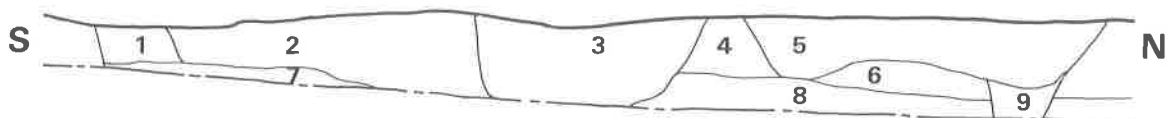
d. C-2区 南壁土層図

H,4.3m



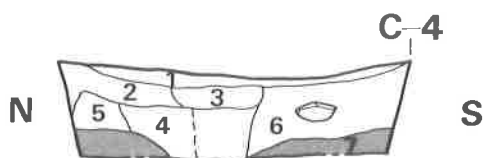
e. C-3区 南壁土層図

H,4.3m



f. C-3区 D-3区 西壁土層図

H,4.3m

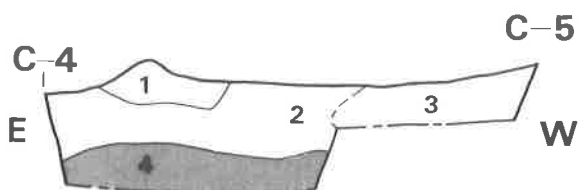


g. C-4区 東壁土層図

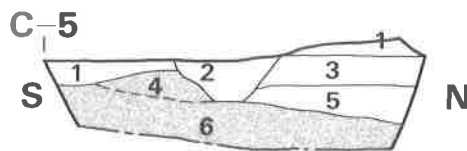


H,4.3m

H,4.3m



h. C-4区 南壁土層図



i. C-4区 西壁土層図

第10図 貝塚土層断面実測図 (縮尺1/30)

調査区の北側は、グリッド調査時に湧水等による壁面の崩壊が多発したので、貝層を検出するまでには至っていない。しかし、C-3区、D-3区に広がる中心的な貝の堆積層の北側の範囲を把握するために、小さな試掘坑を10箇所にした。

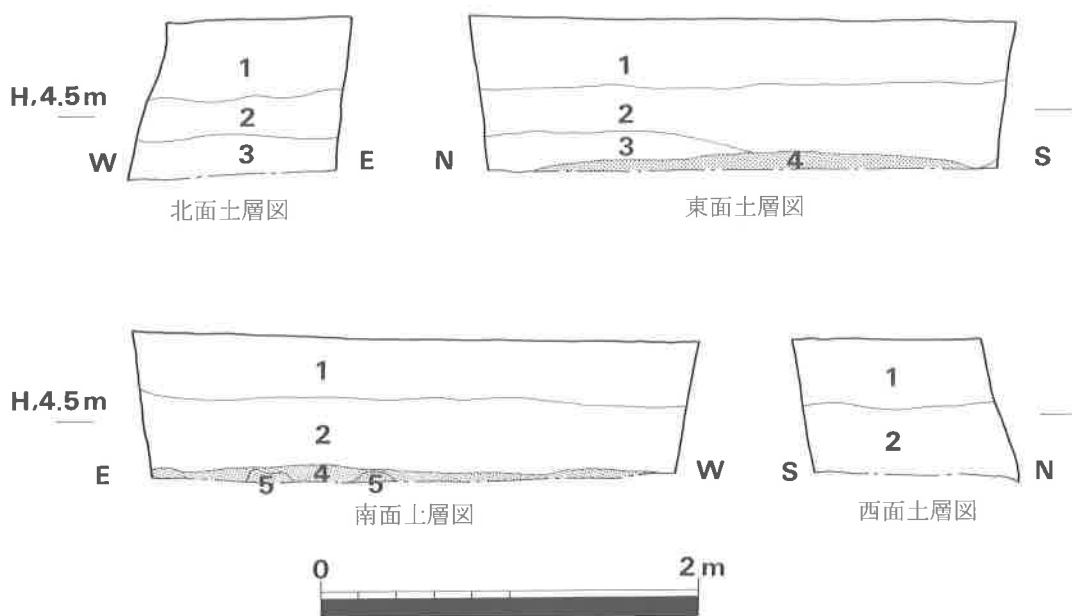
方法は50センチ四方のサブトレンチ（以下STと記す）を1mおきに設定して、貝層の上面が確認された段階で調査を止めた。

その結果、ST3、ST5、ST6で貝層が確認されたが、他の試掘坑は貝層上面のレベルより深く掘っても、遺物すら含んでいない状態であった。また、貝層が確認できなかった試掘坑で認められたのは、グリッド調査区で確認されている地山である淡黄白色砂であった。

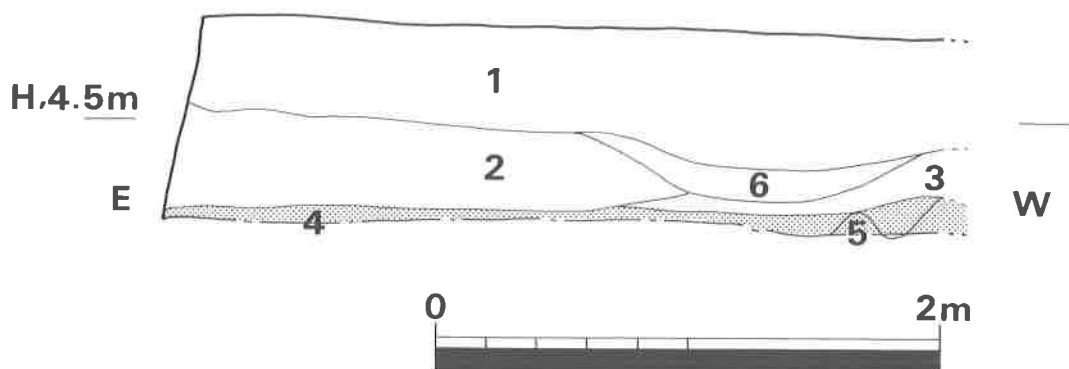
以上のことから、調査区内に自然地形としての砂丘の谷間が南東から北西に向けてはしっていて、そこに貝塚が形成されていることが考えられる。また、時期を問わずして貝の堆積層にいくつかの土坑を掘りこんで新たに貝を捨てている状況もみられる。

調査区中心に存在する大貝層は、調査区の北側外までのびている可能性が生じてきたが、東西方向についてはその痕跡が認められなかった。

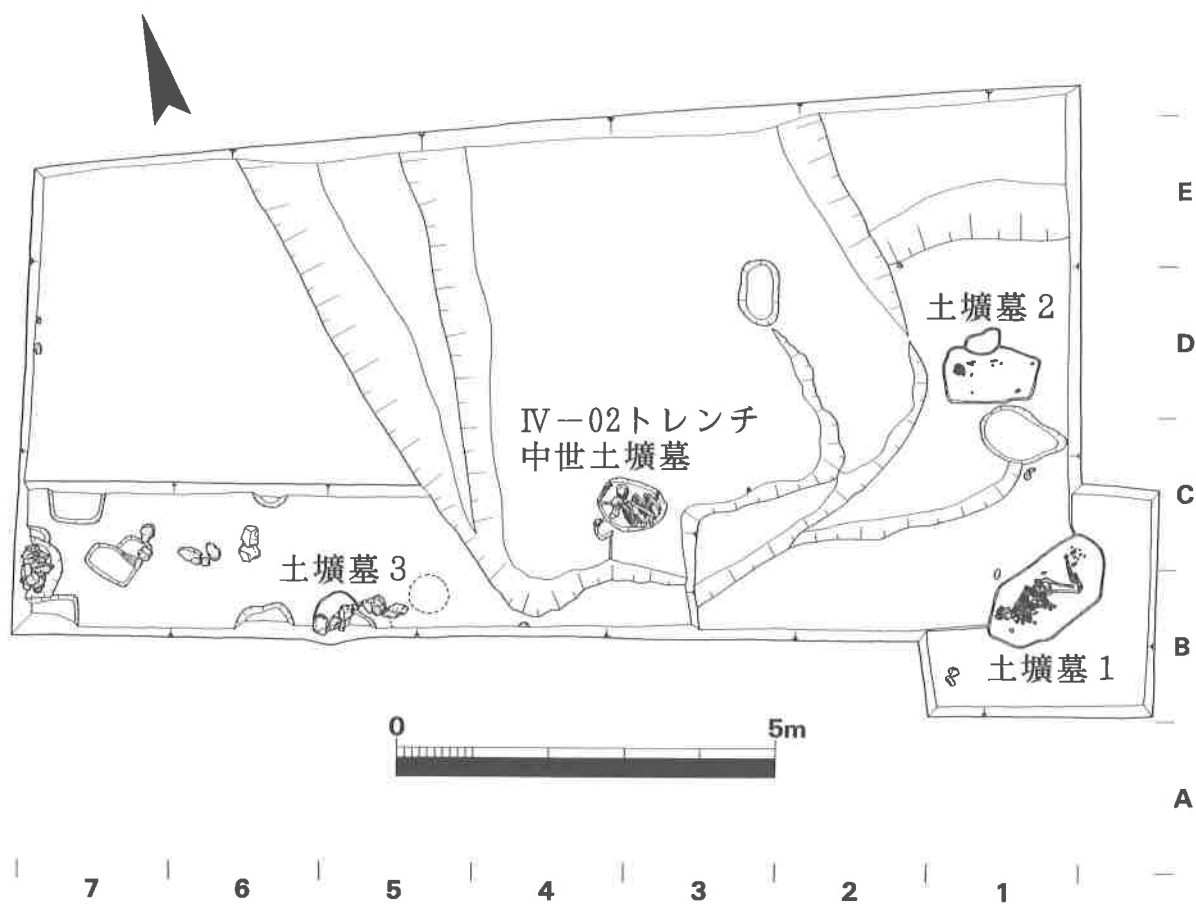
また、貝塚が馬蹄形を呈している可能性と、付近に別の貝塚が存在する可能性は残っているが、その確認は別の機会に譲ることにしたい。



第10-2図 拡張区土層実測図（縮尺1/40）



第10-3図 拡張区南壁土層実測図 (縮尺1/30)



第11図 土壙墓位置図 (縮尺1/100)

3) 土墳墓の調査

1. 土墳墓 1 (縄文土墳墓) (第11図、第12図)

調査区の東南隅を掘り下げ、遺物包含層である暗灰褐色土を除去し、縄文層である暗茶褐色砂がみえた時点で、左前腕の一部が確認された。この時点で既に貝製腕輪の着装が認められ、縄文時代の人骨と判断した。

また、左前腕部の位置より、その大半が調査区外に存在していることが明白であったので、急遽拡張区を設けた。

検出の際は、貴重な縄文人骨ということで、九州大学医学部解剖学教室の中橋孝博先生に手をわずらわせていただいた。

土墳墓は暗茶褐色砂に掘り込まれていて、長さ179cm、幅90cmを測り、長軸を東西にとる不整形な長方形をしている。上部の削平が著しく、その深さはほとんどない状態であった。

人骨はその土墳の中央に上向きで安置されている。頭位はほぼ西を向いていて、両腕は腹部の上で組まれ、両足も軽く折り曲げられた仰臥屈肢の形態をとる。

惜しいことに、人骨直上まで削平が進んでいて、各所にかなり攪乱を受けていた。特に頭蓋骨から右上肢にかけての乱れ方が顕著で、下顎は裏返り、頭蓋骨の破片も周囲に散乱している。右前腕部は尺骨を含めかろうじて原位置を保っているが、上腕骨の肩に近い箇所は完全に破散し、残った部分も前腕の上に乗っている状態である。肋骨も確認できるものの、肩の部分とともに上の方がかなり乱れている。

しかし、骨自体の保存状態は驚くほど良好で、若干の移動はあるものの、各部位もほぼ揃っているようである。

頭部右上方から土器が1点検出された。器形は鉢形で、口縁部を頭に向けるような位置にあった。このためこの土墳墓に副葬されたものと考えられる。この土器も人骨同様、攪乱により2分の1以上欠損しているようだが、ほぼその原位置を保っているものと思われる。

検出時からその着装が確認されていた貝製腕輪であるが、精査の結果、左前腕部に14点、右前腕部に7点あることを確認した。残存度は左の方が比較的良好である。右については前腕部の骨が極端に破損しているため貝輪の状態も悪く、人骨を取り上げた後破片で確認できたようなものである。すべての貝輪の蝶番付近が欠損していて、完形品はない。

人骨除去後、土墳内を精査したが、他の装身具類はなく、装着していたのはこの貝輪のみであろう。

なお、土墳底部に貝が露出している状況がみられた。



第12図 縄文人骨出土状況実測図（縮尺1/10）

a. 縄文人骨装着の貝製腕輪（第13図、第14図）

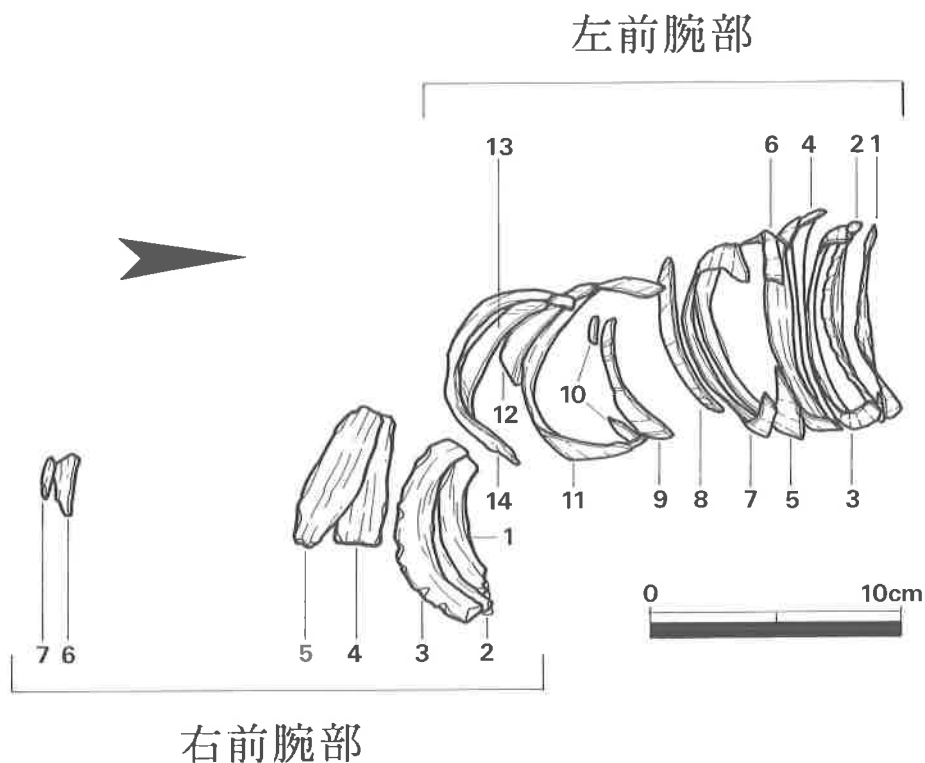
前述したように、土壌墓出土の縄文人骨は、左前腕部に14点、右前腕部に7点の貝製腕輪を装着していた。惜しいことに人骨全体が堆積した埋土の変動により上面が削平され、貝製腕輪もそれに伴い欠損箇所が多い。

両前腕部が所定の位置より若干動いていることから、特に右前腕部に装着されていたであろう貝製腕輪は、確認された点数より増える可能性もある。

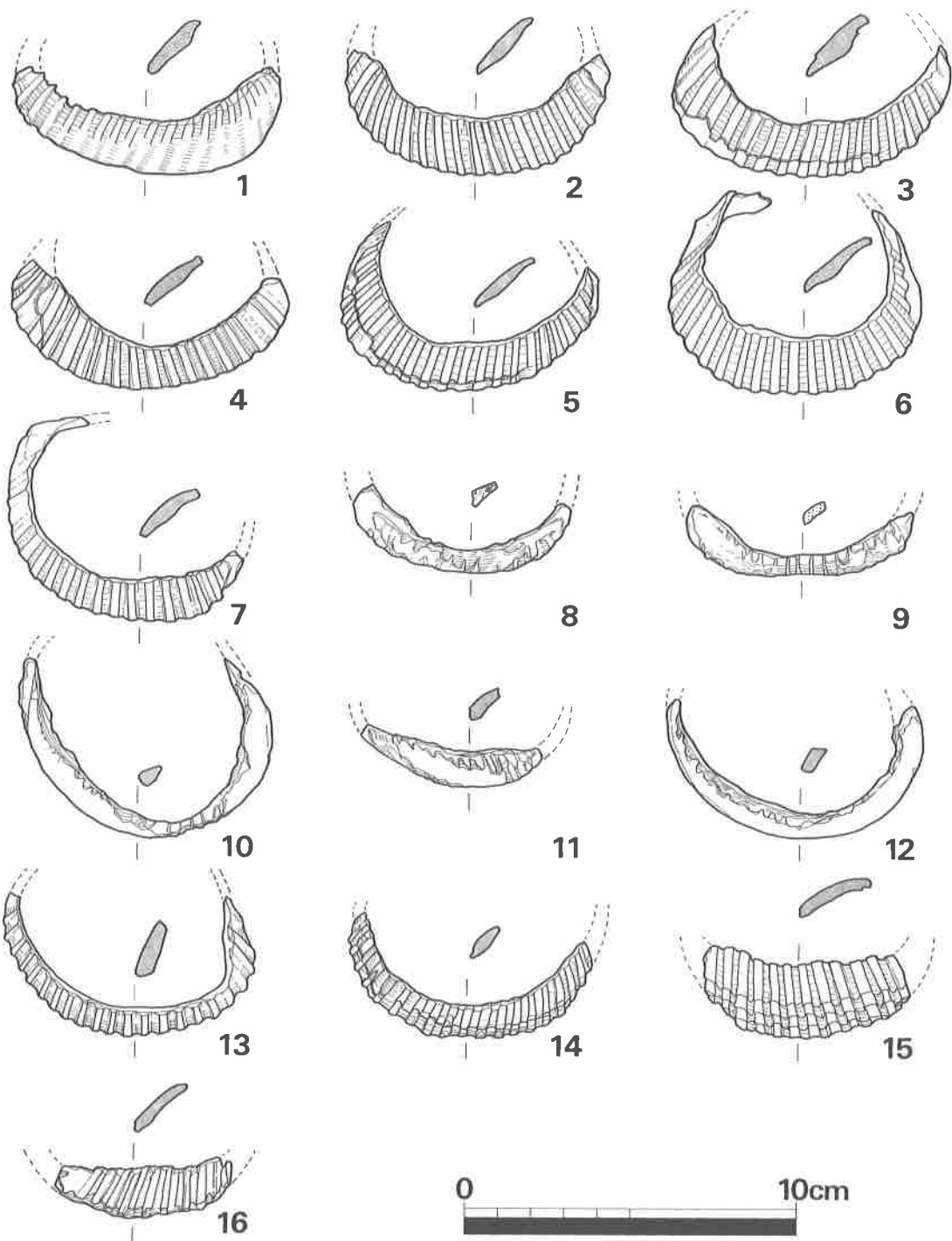
使用された貝種は、残存する殻長と放射肋から推定して、大部分はサルボウガイと思われる。（註1）

数点磨耗が激しく、現状では判断しかねる個体もあるが、わずかに放射肋が認められるのですべてサルボウガイといってよい。

サルボウガイは本州中部以南から沖縄までの広い範囲に分布し、主に内湾や干潟に生息するので、この新町遺跡の貝塚も縄文後期初頭は引津湾から深く入りこんだ内湾に面していたものと思われる。



第13図 貝製腕輪出土状況実測図（縮尺1/3）



1. L1 2. L2 3. L3 4. L4 5. L5 6. L6 7. L7 8. L8 9. L9 10. L11 11. L12 12. L13 13. R2 14. R3 15. R4 16. R5

第14図 縄文人骨装着貝輪実測図（縮尺1/2）

また、九州では貝輪の出土例はほとんどの貝塚でみられるものであり、貝輪もベンケイガイ、サルボウガイ、アカガイの二枚貝が多く、新町遺跡もその例にもれない。

前頁に貝輪の実測図（第14図）を掲載したが、左前腕部の10と14、右前腕部の1と6と7（第13図参照）は、残存度が乏しく、実測に耐えないので割愛した。

なお、挿図説明文中のLとRは、それぞれ左（L e f t）と右（R i g h t）を表していて、第13図中の番号と対応するものである。

註1 岡田要・瀧庸ほか共著 原色動物大図鑑Ⅲ 北隆館

b. 縄文人骨副葬土器（第15図）

人骨検出時に、頭蓋右上方に副葬されたとと思われる土器が1点、墓壇掘形内より出土している。器形は鉢形で、口縁部を頭部に向けるようにして検出された。

検出時、土器は横たわっていて、半分は人骨同様削平に伴い欠損している。

復元すると、口縁径15.8cm、器高12.4cm、高台底部径10cmを計り、色は赤茶褐色である。

胎土は比較的密であり、砂粒を若干含んでいる。焼成はやや良好である。

土器の割れ口から粘土帯が積み重ねられている状況が観察でき、それによると底部を作成した後、その外側に粘土帯を接着し、高台部を形成している。その上に幅2cm程度の粘土帯を6個積み上げ、内外に横ナデを施し最終調整をしている。

口縁部は指ツマミで若干内側に曲がるように作成していて、全体的に丁寧なつくりをしている。

特筆すべきことは、底部裏側に植物の葉の押圧痕が残っていることである。これは葉脈まで鮮明に残っていることから、葉を模して人為的に描いたものではなく、葉そのものを底部製作段階から粘土の下に敷いて、その形をとったことがわかる。圧痕そのものは底部が欠損していることから、その2分の1程度しか残っていない。

葉縁は全縁で葉先は鋭頭の形をとる。復元すれば葉形は楕円形を呈し、葉長は約7.5センチと推定される。

その形から常緑樹であろうと思われ、ブナ科のアカガシ属、マテバシイ属か、クスノキ科クスノキ属、あるいはナツツバキ科サカキ属のいずれかに属するものと推定されるが、特定は難しい。（註1）

同遺跡からは多数の土器底部が出土しているが、このような例はなく、この土器が特殊な意図のもとに製作されたことを物語る。

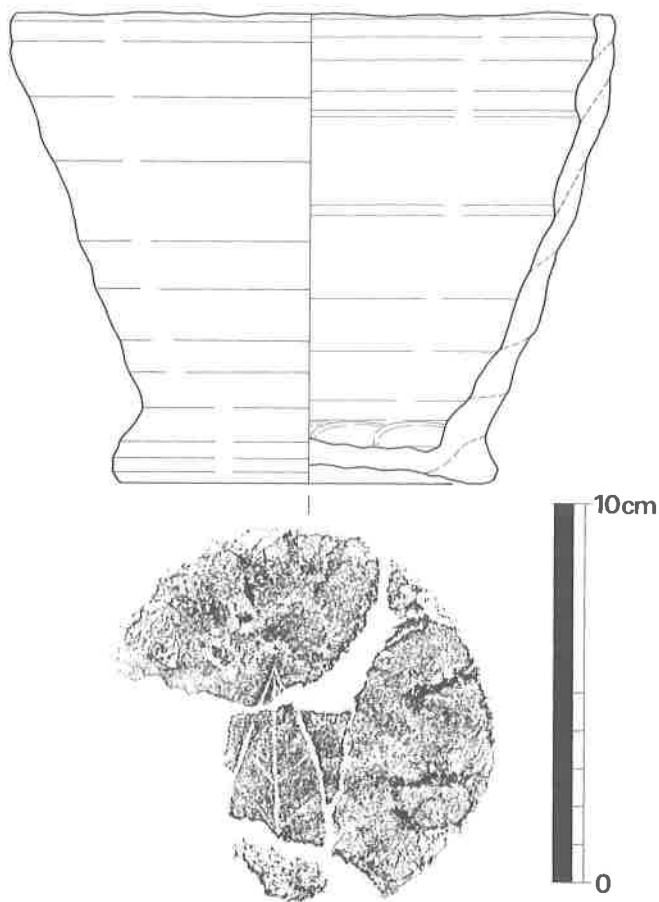
この土器が副葬されていた人骨が熟年の女性で、両腕に多数の貝輪を装着していたことを考

慮にいとると、この土器が日常的な道具ではないと想像するのは難しいことではない。

しかし、貝輪装着人骨の出土例が増加している中、被装着者に特殊性を求めるのは一概に言い難い面もある。

また、土墳墓1基のみの例となっているので、この被葬者との関連も深くなる副葬土器の特殊性については、各地での類似例の増加をまって言及したいと思う。

註1 岡本省吾著 「標準原色図鑑全集8」 樹木 保育社



第15図 縄文人骨副葬土器実測図及び拓影（縮尺1/2）

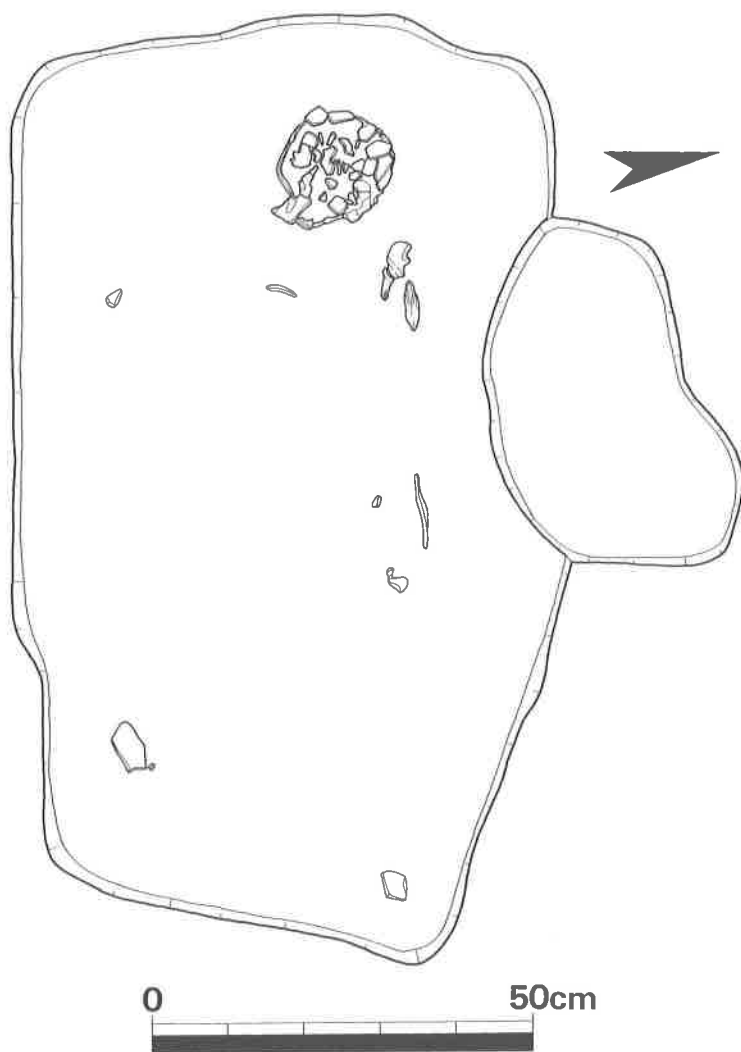
2. その他の土墳墓

a. 土墳墓2（第11図、第16図）

D-1区の南側に位置する。長さ122cm、幅65cmの長方形で、若干南に振れる西にその長軸をとる。縄文層（暗茶褐色砂）の1層上の暗灰茶色砂質土で検出された。

この墓壇掘形は埋葬された人骨が検出されたレベルで確認されているので、墓壇の深さはほとんどないと言ってよい。また、墓壇北側は別の小土坑から切られている。

検出された部位は頭位を西側にとる頭蓋骨と左肩甲骨、上腕の一部、右側の肋骨と思われる骨片のみである。ただし、この土墳墓は位置の確認のみに留めているので、墓壇を完掘すれば



第16図 土壌墓 2 実測図 (縮尺1/10)

も見受けられず、確たる時期も述べられない。

ただ、この土壌墓の検出層がIV-02トレンチから検出されている中世土壌墓と同一なので、これと時期を同じにするものかもしれない。

b. 土壌墓 3 (第11図、第17図)

B-5区に位置し、また、IV-02トレンチの南辺のほぼ中央にあたる。この土壌墓は、調査の過程で検出されたものではなく、すべての工程が終了し、調査区を埋め戻す日の前日の大雨

他の部位が存在する可能性はある。しかし、人骨が確認される時点まで骨等は見当たらなかったのと、検出された骨の状態と位置から推して、他の部分は消滅しているのではないか。

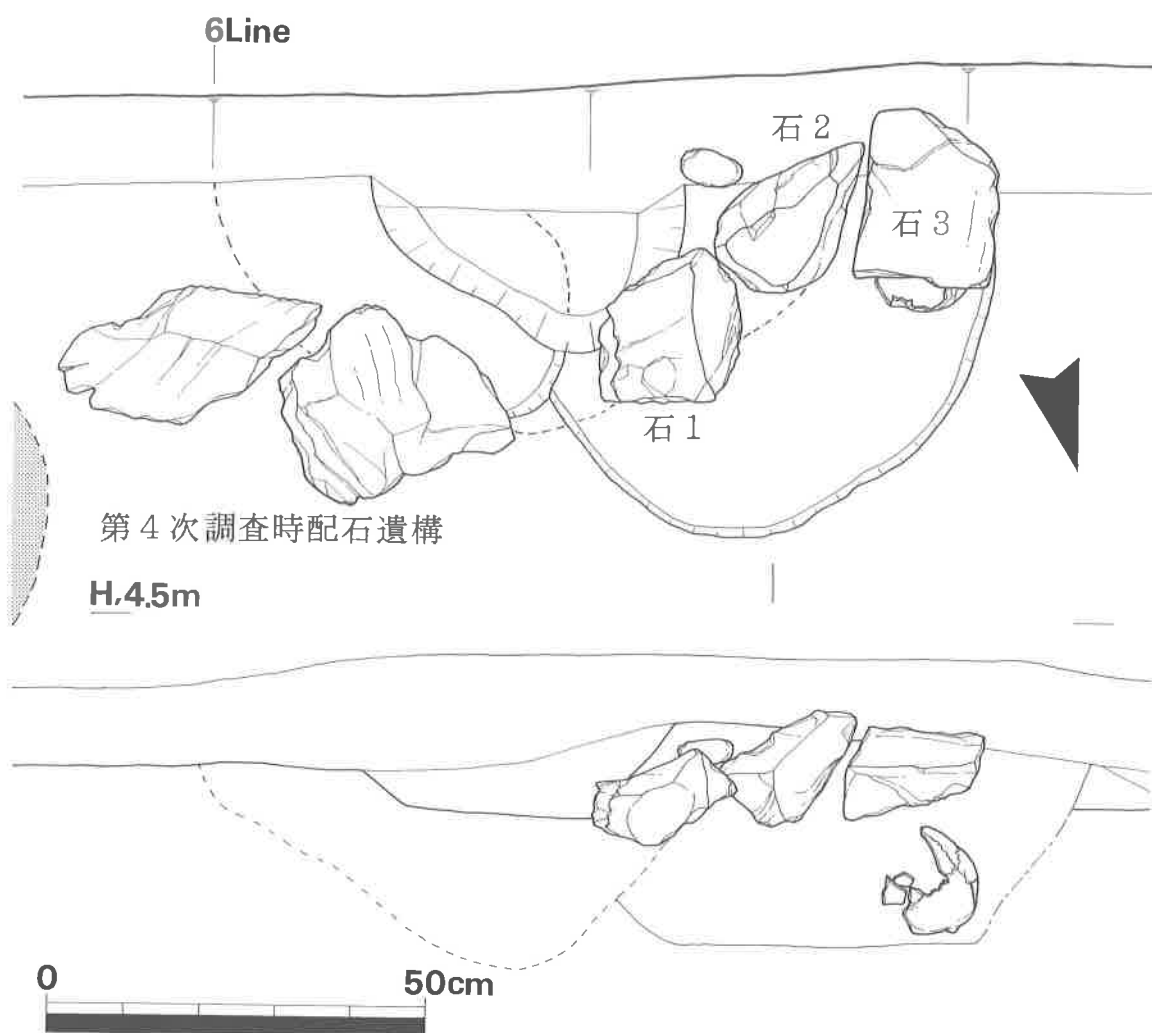
頭蓋骨の状態から被葬者は成人と推定されるが、墓壙の規模が比較的小型であるので、四肢を折り曲げた屈葬の形態をとっていたものと考えられる。

頭蓋骨は土圧で押しつぶされたような形であるが、周囲に骨片が散乱している状況は見られないので、著しい攪乱は受けていないようである。頭蓋骨自体の残存度は良好であったが、左肩甲骨と上腕、肋骨の一部はかなりもろくなっていた。

供献されている土器等

により壁面が崩壊して、石組と頭蓋骨が露出したことにより、その存在を知ることとなった。

露出した石は3個で、それぞれ20cm四方の自然石である。頭蓋骨は石3（第17図参照）の直下から検出され、その位置的關係からこの3個の石が土壌墓に伴うものであることが推測される。頭蓋骨は外後頭隆起の位置から、後頭部を下にしていることがわかり、若干横向きになっている。その大部分が石3の下になっているので、顔面の部分の確認はできないが、その状況から全体の遺存度は良好と思われる。



第17図 土壌墓3実測図（縮尺1/10）

しかし、これらの石と頭蓋骨は壁の崩壊とともに前面に崩れ落ちてきているので、原位置を保っているとは言い難い。特に石1は壁面の状態から石2、石3の上、あるいはその南側にあった可能性が高く、石2、石3も確認されている位置よりは多少南側にあったものと思われる。頭蓋骨も石組に伴い移動していることも考えられ、正確な埋葬状態は残念ながら現段階では把握していない。

墓境内からの土器等の遺物の出土はなかったので、時期は確定し難いが、この土壌墓が検出されたのは前述の縄文土壌墓と同じ層である暗茶褐色砂なので、これと時期を同じにすることが考えられる。

また、すぐ東側には第4次調査時に検出されている配石遺構や、焼土が含まれる円形土坑(第17図中の網部分)があるが、これも同層位なので何らかの関連性があるのではないか。

この土壌墓も位置確認したのみで、調査区を埋め戻す際、土のうで保護している。

註 第17図は、土壌墓を確認した段階での実測図で、断面図とせず横からの見通しとした。また、壁面土層図は第4次調査時のIV-02トレンチ南壁土層図をあわせている。

参考文献 藤田恒夫著「入門人体解剖学」改訂第3版 南江堂

3. 出土遺物

1) 土器

第4次、第5次調査からは膨大な量の土器が出土した。その時期も多岐におよぶが、ここでは第5次調査の主目的である縄文時代の土器をとりあげる。

前項で述べたように、調査の過程での調査区壁面、土層観察用の畦の崩壊により、一部出土層位が不明になった土器があるので、グリッド調査における出土地区での報告をする。

図中の拓影、断面図の向きおよび傾き等は任意に設定した。また、この項の末尾に土器観察表を載せているので、色調、胎土、焼成の具合、出土層位等はそちらを参照されたい。

なお、縄文時代の遺物を報告する前に、第4次調査の報告書では掲載できなかった、IV-02トレンチから出土した1号人骨に副葬されていた土器を報告する。

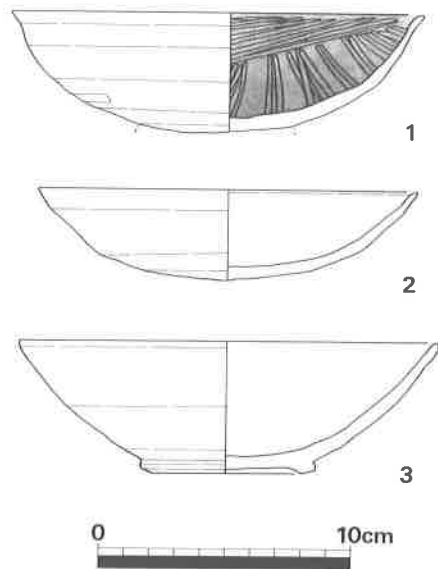
1. IV-02トレンチ 1号人骨副葬土器 (第18図)

人骨検出時に、人骨の右肩に載せるような位置から2点の土器が重なって出土している。第18図の1と2がそれである。

1は黒色土器碗で、重なった土器の下の方にあたる。約3分の1が欠損している。内面は黒色を呈し、底部から口縁方向と、口縁に沿うようにヘラミガキが施される。外面は回転ヘラ削りによる調整の後、部分的にナデを施す。底部より上に一部ヘラが強く削りこんでいる箇所と、口縁付近に黒斑が認められる。低部に高台がはずれたと思われる痕がある。

外面は淡黄褐色である。胎土に砂粒を若干含み、

焼成はややあまい。10世紀代のものと思われる。



第18図 IV-02トレンチ1号人骨副葬土器実測図(縮尺1/3)

2は1の上に重ねるように置かれていた。前出報告書では「2つとも黒色土器の碗」と報告しているが、土師器のようである。焼成があまく器表内外とも調整痕がはっきりしないが、横方向のナデが見受けられる。内外面とも淡茶褐色を呈し、ほぼ完全な形で出土している。

3は土壌内から出土したものではなく、土壌墓の北側5mの地点から出土した。遺構に伴うものではない。

土師器の高台付椀で、半分ほど欠損している。内外ともナデ調整を施していて、淡黄白色をしている。

いずれの土器も1の黒色土器と同じ時期のものと思われる。包含層からも小片ではあるが中世土器が数点出土していて、付近に他の中世墓等が存在することをうかがわせる。

2. B-0区、B-1区、C-0区、C-1区出土土器（第19図）

1号縄文人骨が検出されたため、急遽拡張した箇所にあたるのがB-0、B-1、C-0、C-1区である。

1から5は磨消縄文である。1、4は小片でどの部位かはわからないが、比較的細くしっかりとした沈線内に縄文を残す。2は口縁部で沈線は若干太く、あまい感がある。

3は肉付けした口縁部と口唇部にかなり深い沈線を施していて、口縁の頂上付近まで縄文が残っている。内面は丁寧なナデである。図中の断面傾きは誤りで、復元すると口縁は朝顔形に大きく開くものと思われる。

6は口縁部を鋭い山型隆起にしている、若干盛り上がった部分に刻目文が入っている。

7も6と同様だが、6と比べかなり大ぶりに作られている。

8は口縁部が一部欠損しているものの山型隆起をなし、円形の孔を開け、それを巡るように磨消縄文を入れている。中津式と思われる。

9もわずかだが山型隆起の口縁をしていて、やはり円形孔を穿っている。内外面とも丁寧なヘラケズリである。

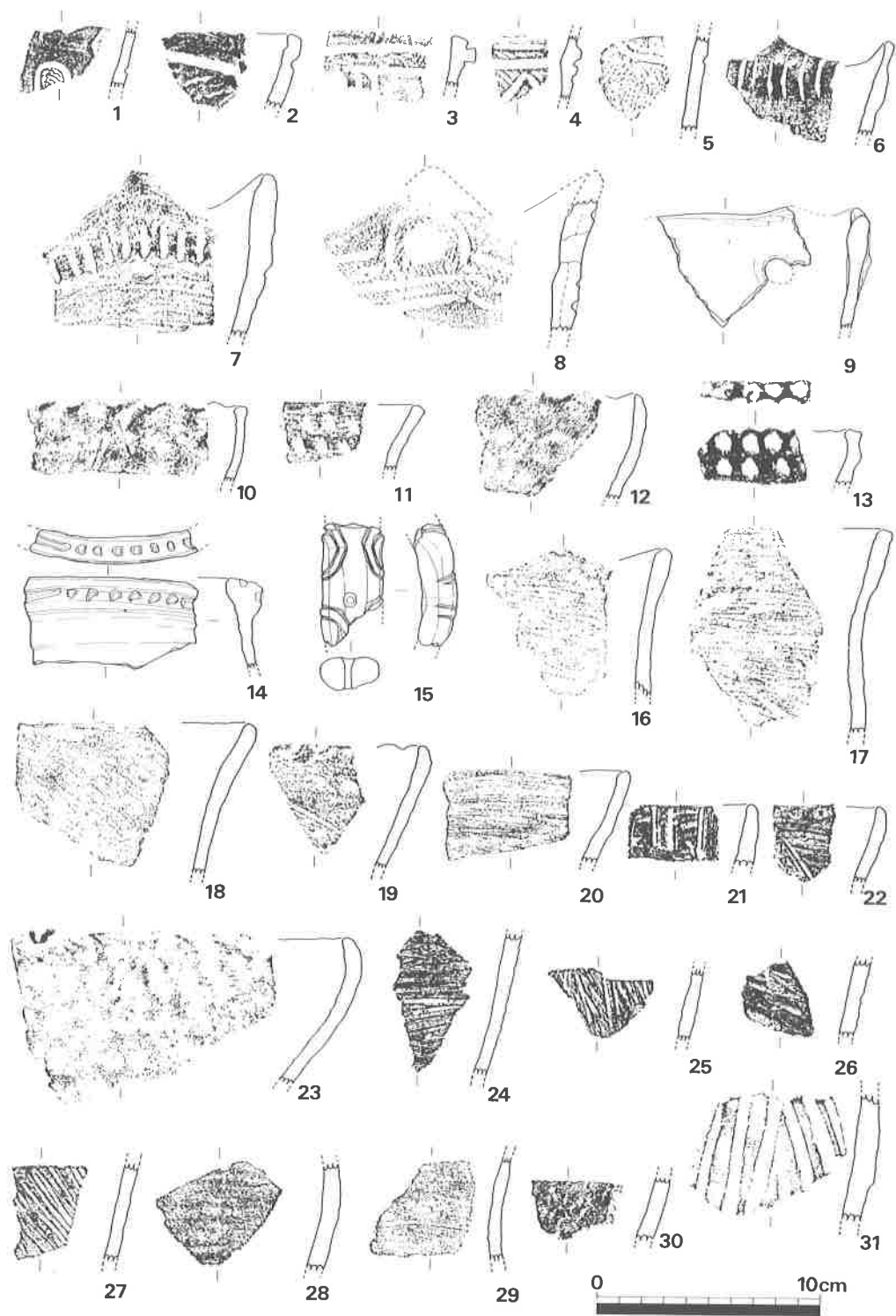
10、12は口縁を波型に整形している。11は口縁部に刻目、13は口唇部に刻目を入れ、口縁部に爪先で凹点文を2段につけている。13は縁にも同様の文様を持ち、いずれも表面に細かな条痕がある。

14は口唇部に肉付けし、凹点文を5つ入れ、その両側に沈線を施している。同様のパターンが口縁にも見られる。

15は把手状の装飾であろうか。細い沈線を2条1組で隅を直線的に囲うように施している。中央に小さな孔が開けられている。14、15ともに北久根山式の時期に位置付けられるかもしれない。

16は山型隆起の口縁を持つ鉢で、内外面ともに貝殻条痕がある。17、18も同様だが平縁であろう。

19は口唇部に爪で刻目を入れていて、沈線も認められる。20は平縁になるものと思われる。いずれも貝殻条痕がある。



第19図 B-0区、B-1区、C-0区、C-1区出土土器拓影（縮尺1/3）

21は口縁部で、縦方向に貝殻条痕がある。22から30も内外ともに貝殻条痕がある。

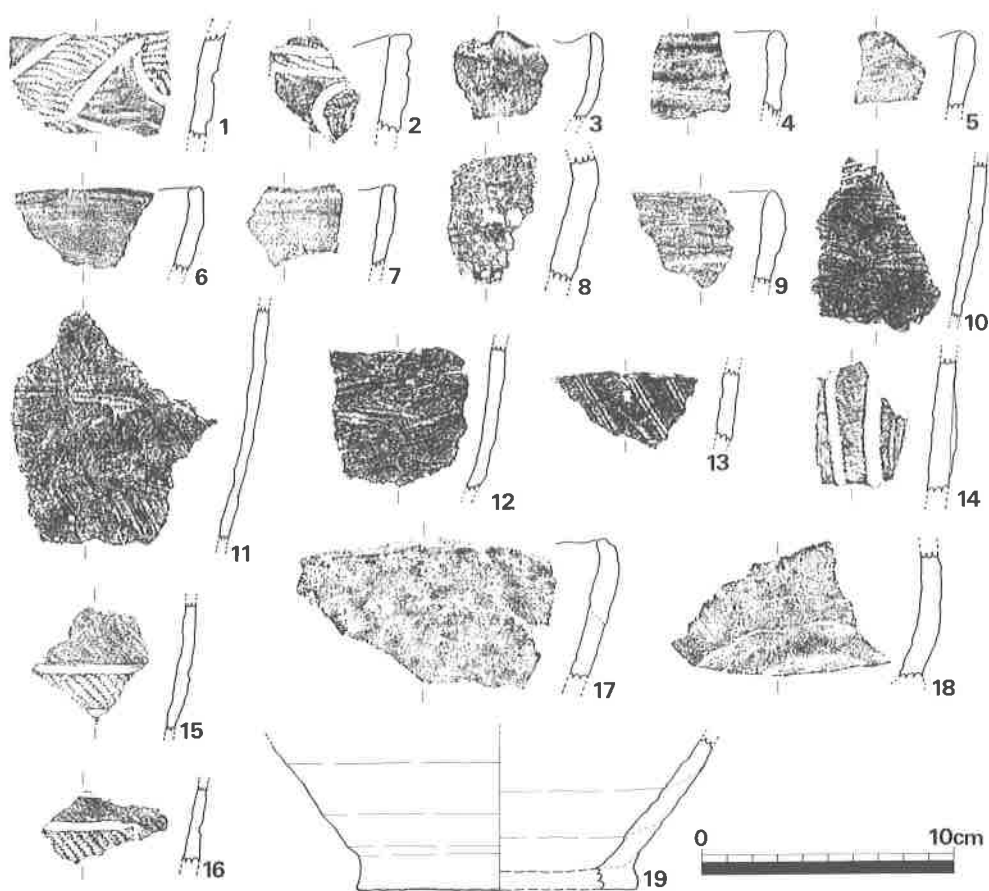
23は口唇部に小さな隆起があり、刻目が入る。口縁部は丸みを帯びていて、整形の際指でこねた痕が残っている。

24から30までは貝殻条痕の小片である。

31は阿高式系土器で、太い沈線をV字型に入れている。赤褐色を呈し、胎土に滑石か、あるいは雲母を混入している。

3. 土壙墓1掘形内出土土器（第20図）

土壙墓1はその大半がB-1区にあるが、特に墓壙内から出土した土器のみを掲載する。ただし、人骨の出土状況から、かなり攪乱を受けていることは明白で、必ずしも墓壙埋土に直接



第20図 土壙墓1掘形内出土土器拓影、実測図（縮尺1/3）

結びつくものではない。

1と2はいずれも磨消縄文である。沈線は比較的太く浅い。3は口縁部を押圧して波状にしている。

4は胎土に少量の雲母を含んでいて、阿高式系土器と思われる。

5から7は口縁部の小片である。丁寧な横ナデによる調整が施されている。

8は胴部片であろうか。途中から若干屈曲している箇所が見受けられる。

9は口縁部で、口唇部が若干肉厚である。

10、11、12は胴部の破片であろう。いずれも貝殻条痕が残る。

13は小片で、どこの部分かわからない。

14は阿高式系土器である。

15、16は磨消縄文で、沈線は細いものの浅い。17は口縁部で、指の圧痕が残る。18は胴部の破片で、やはり指の圧痕が認められ、粘土帯の継ぎ目が見受けられる。

19は鉢の底部である。17から19はいずれもナデ調整がなされている。

4. C-1区出土土器 (第21図)

ここは貝塚の東南隅にあたり、薄いものの貝の堆積が始まる箇所である。

1は口縁部に磨消縄文を施す。口唇部は若干厚みを持ち、2条の沈線が入っている。

2は磨消縄文で口唇部に小さな隆起を持つ。

3、5、6は磨消縄文の胴部である。いずれも内面に貝殻条痕が施されている。3は外側に屈曲し始める箇所である。

4は沈線を丸く曲げている。5は他に比べ厚さが薄く、沈線を直線的に曲げている。

6は2本の沈線がほぼ平行に走る。いずれも中津式と思われる。

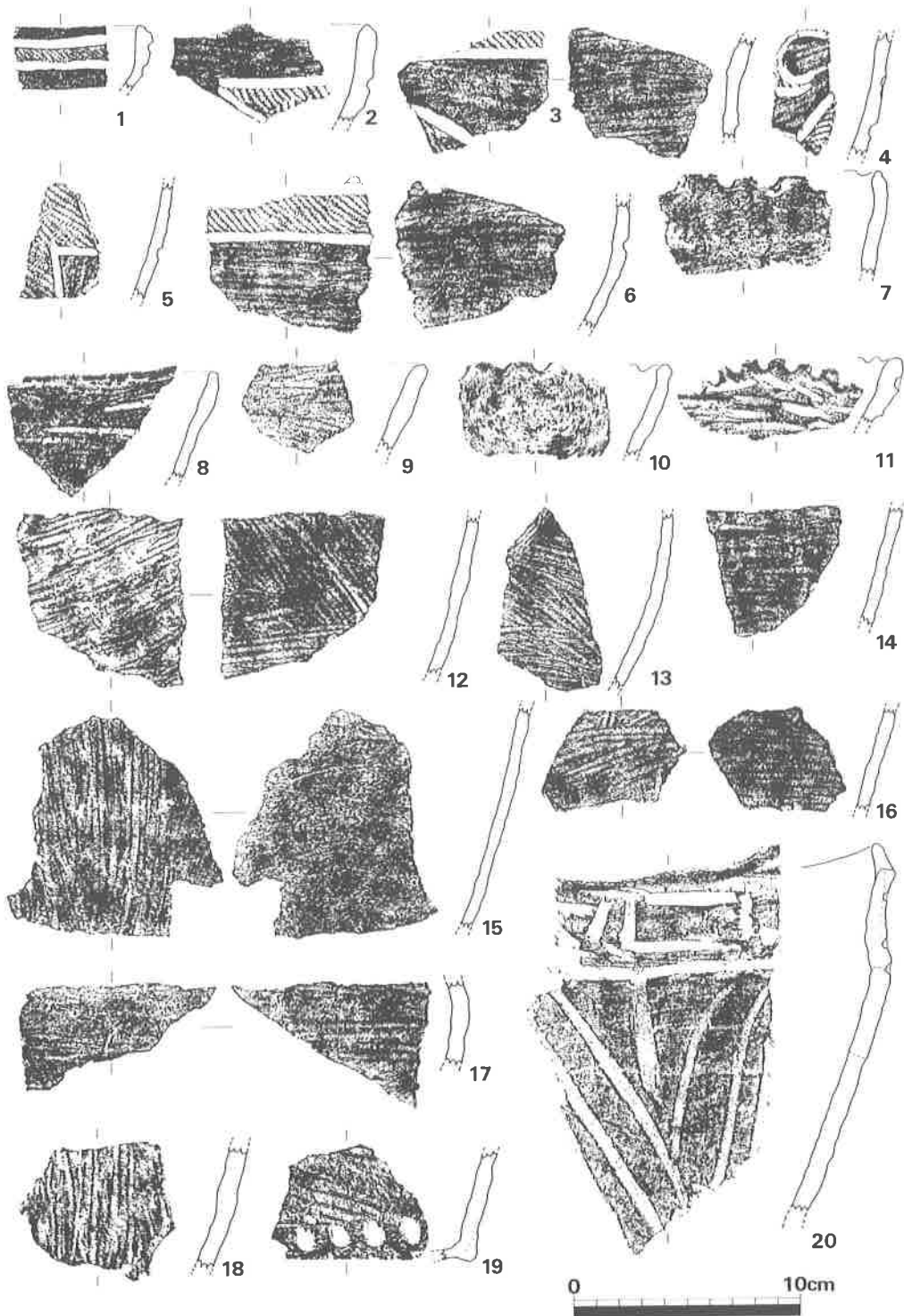
7と10は刻目で口縁を波状にしていて、指の圧痕が残る。

8、9は口縁部で貝殻条痕がある。いずれも口縁部は平らではなく、若干盛り上がる様子を見せる。

11は肉厚の口唇部に刻目を入れている。

12から18は胴部破片で、内外面ともに貝殻条痕が残る。19は底部で、指の圧痕が認められる。

20は阿高式系土器である。口縁は山型隆起となり、わずかに内反する。口縁部は少しくびれ、長方形の沈線文を付け、その下に1条の沈線を横に巡らす。胴部はV字状に沈線を入れている。色は赤褐色を呈し、胎土には滑石あるいは雲母を混入している。



第21図 C-1区出土土器拓影（縮尺1/3）

5. C-2区出土土器（第22、23、24図）

C-1区の西側に位置するグリッドで、この辺りから貝の堆積が厚くなる。しかし、トレンチ崩壊が相次いだところでもあり、土器の取り上げの際、出土層位が不明になっているものも多い。

1は貝殻条痕を施された口縁部である。頸部がくびれ、再び外に膨らむ。貝殻条痕は横方向に残っている。2も同様の口縁部だが、山型隆起が認められる。

3は口縁部の小片で、貝殻条痕と、口縁部に横方向の指の圧痕が認められる。

4から7もいずれも口縁部である。

4は貝殻条痕が認められる。5と6は貝殻条痕をナデ消し、5には指の圧痕が残る。7は横方向の貝殻条痕がある。

8は口唇部を指で細かい波状に整形、あるいは刻目を入れ、その時の圧痕が斜めに残っている。

9から15も同様である。10は内面に指の圧痕が認められる。いずれも貝殻条痕が残る。

16は口唇部を小さな波状形にしている。

17は口唇部に刻目を入れ、口縁部に爪による凹点文を2列施している。

18は口縁部に若干の肉付けをし、縦方向の刻目を入れる。

19は口縁部に横2列の凹線文を入れている。

20は口縁部である。かなり深い条痕が残る。

21は小片だが、口唇部を波状にし、口縁部に凹点文がかろうじて残っている。

22、23は口縁部に刻目突帯が付いている。

24から30は磨消縄文である。（以下、50まで第23図）

24は口縁部で1本の沈線と縄文が残る。沈線は比較的深くはっきりしている。

25は沈線が直線的に鋭角に曲がる。26は沈線が渦巻き状に巡るものだろうか。

27は沈線の部分しか残っていないが、磨消縄文と思われる。

30は沈線のみであるが磨消縄文と思われる。

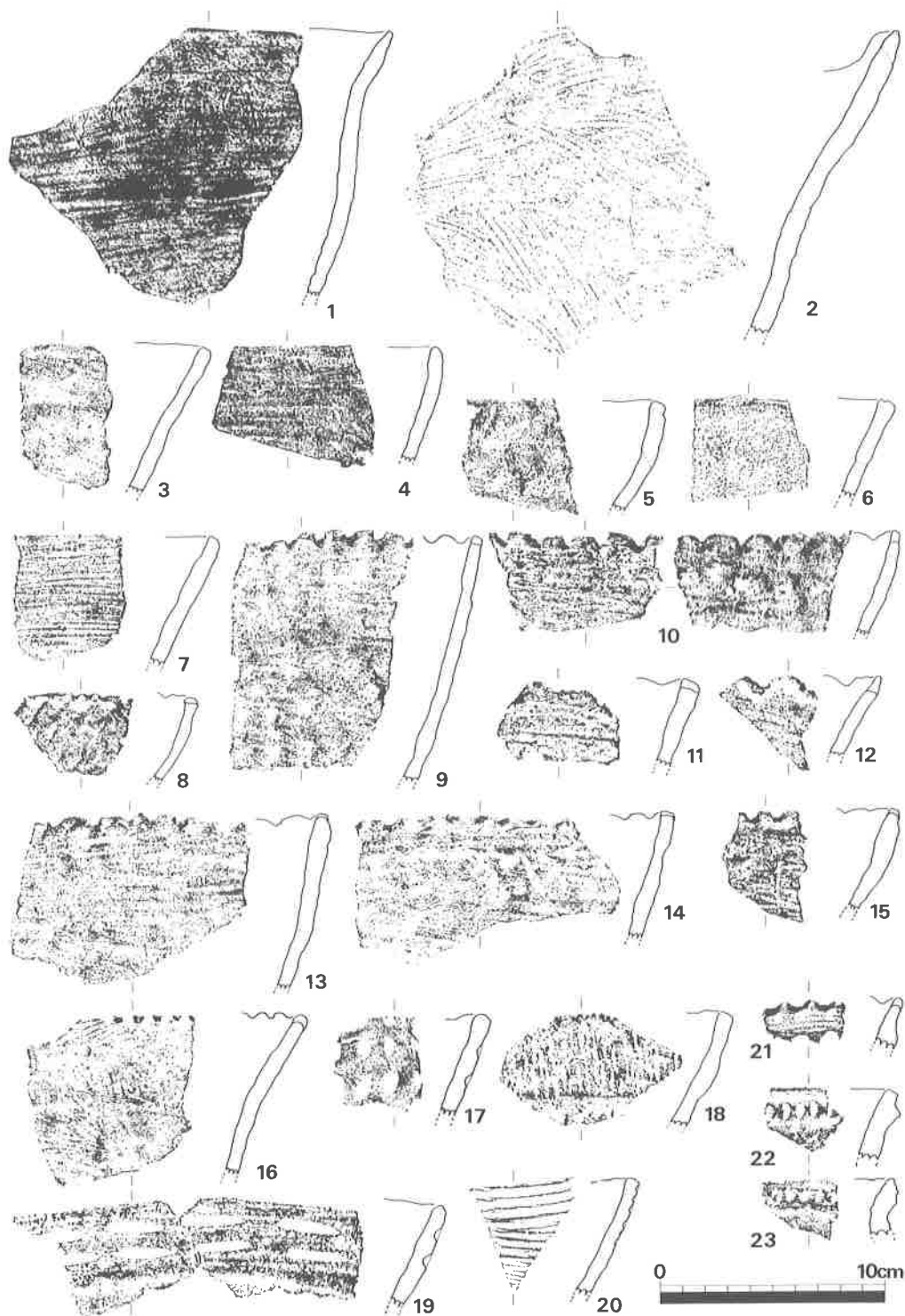
31から44、46、47は貝殻条痕が施された胴部波片である。うち41は指の圧痕が認められる。

45と48、49は底部破片である。いずれも貝殻条痕があり、指での押圧痕が残っている。

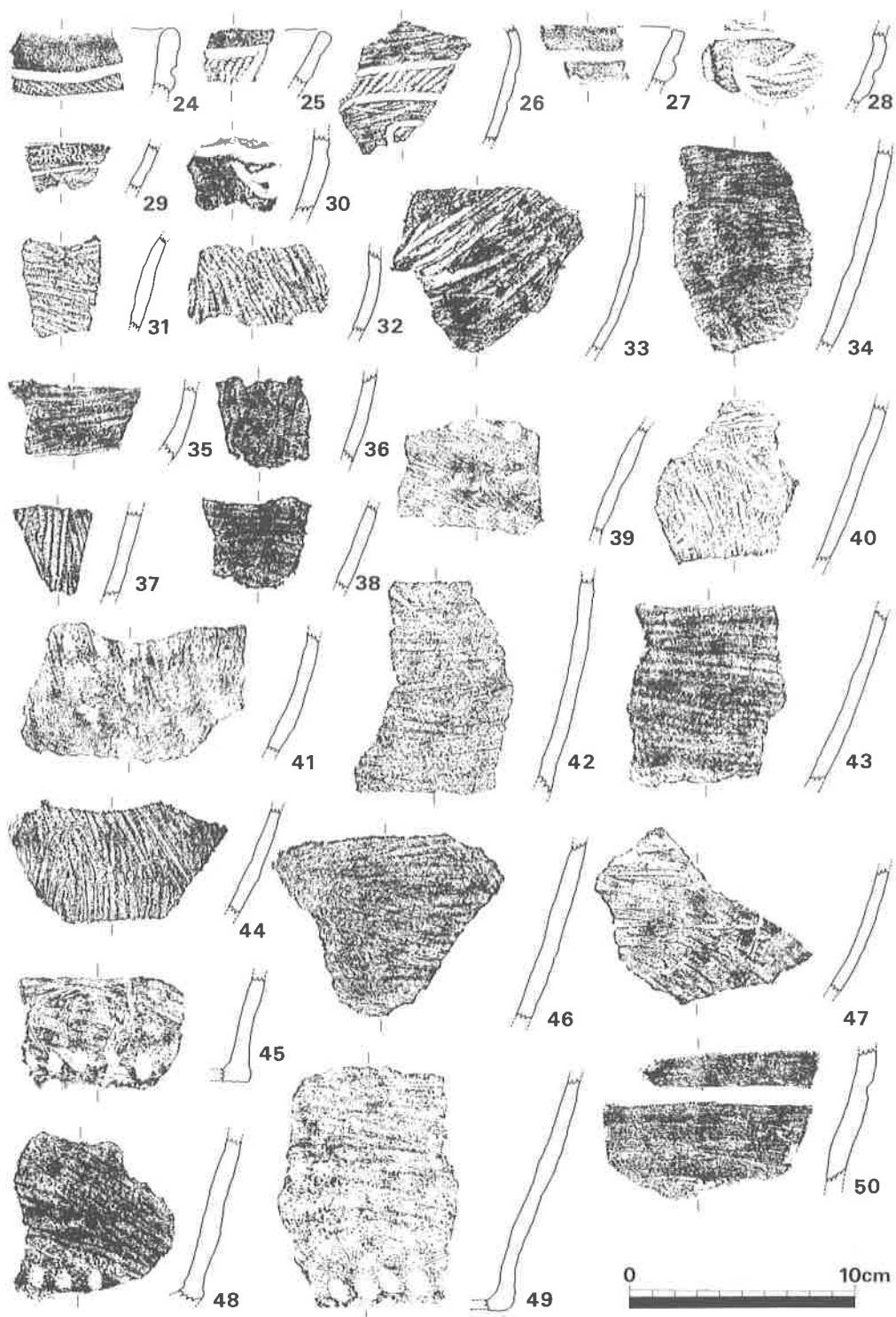
50は阿高式系土器である。

51は阿高式系土器である。（以下、63までは第24図）

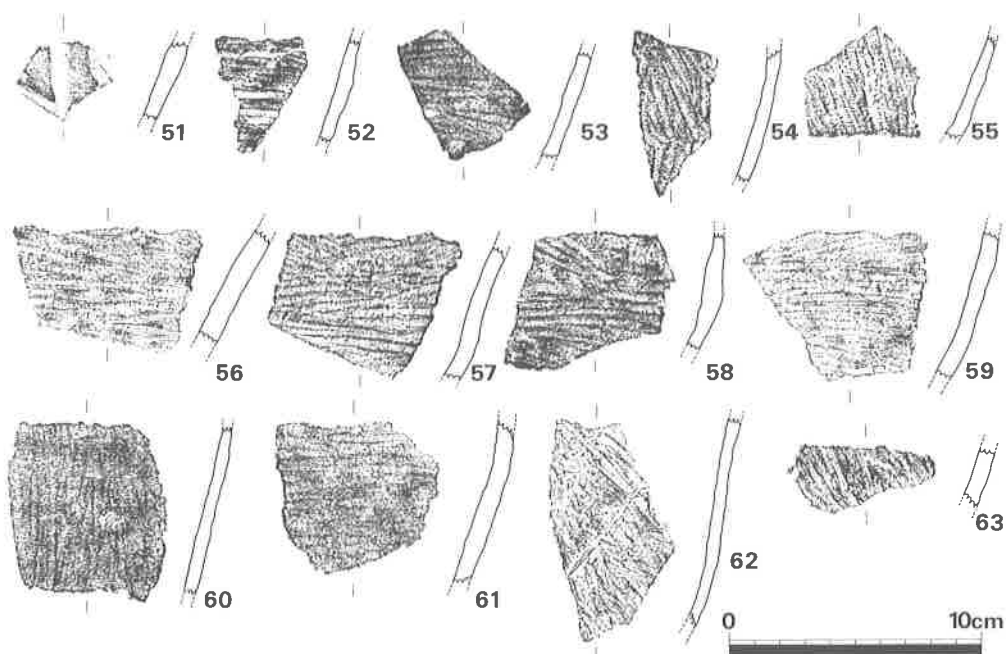
52から62は貝殻条痕が施された胴部破片である。いずれも条痕は内外面におよぶ。



第22図 C-2区出土土器拓影 (縮尺1/3)



第23図 C-2区出土土器拓影 (縮尺1/3)



第24図 C-2区出土土器拓影（縮尺1/3）

6. C-3区、D-3区出土土器（第25、26図）

ここは貝塚の中心に近い場所で、貝の堆積が最も厚かったD-3、D-4区よりは若干レベルが高く、貝塚最深部への落ち込みが始まる箇所にあたる。

1と2は磨消縄文で、器壁は薄く、焼成もしっかりしている。細い2本の沈線が直線的に区画をなしているのがわかる。3、4は貝殻条痕の胴部破片である。

5は阿高式系土器である。太い沈線が見受けられ、赤褐色を呈し、胎土に滑石もしくは雲母を含む。

6は口縁部で、口唇部に爪で刻目を入れている。

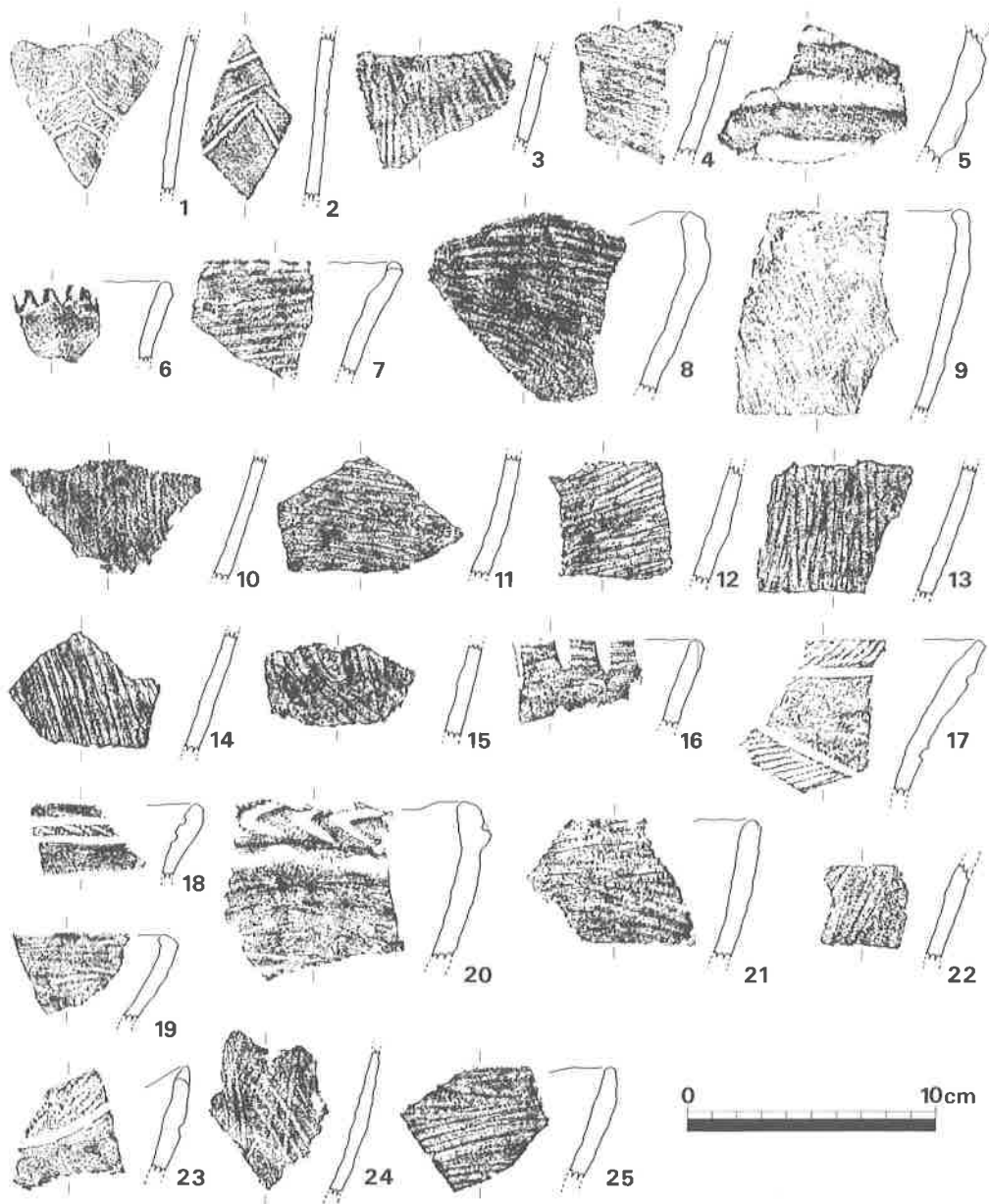
7、8、9はいずれも口縁部片で貝殻条痕が残る。7は指による圧痕が残り、かすかな波状口縁となっている。8は山型隆起の口縁で、口唇部が肉厚になり若干外に湾曲する。

10から15は胴部破片で貝殻条痕が残る。

16は口縁部から口唇部にかけて少し斜行する刻目が入る。

17は磨消縄文の口縁部である。

18は口縁部だが、器面内側に沈線と縄文が施されている。口縁がもっと開き文様が上面を向く



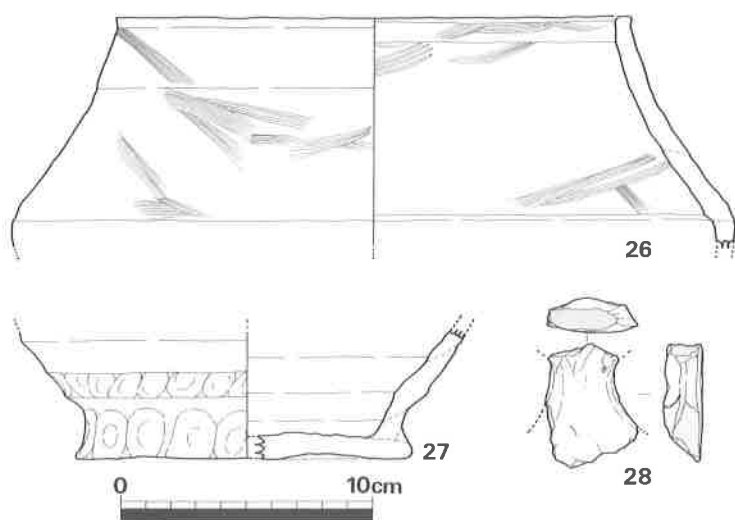
第25図 C-3区、D-3区出土土器拓影（縮尺1/3）

可能性もあり、図の断面傾きは誤りかもしれない。

19は貝殻条痕が残る口縁部である。

20は口唇部に横方向のV字刻目を並べて入れ、その下に1本の太い沈線がある。胎土に雲母を少量が含まんでいて、阿高式系土器であろうか。

21は口縁部であるが、口縁にわずかに指の圧痕が見受けられる。22は胴部破片と思われる。



第26図 C-3区出土土器実測図(縮尺1/3)

27は底部であるが、押圧により高台部が形成されている。

28は把手状の装飾部分であろうか。あるいは中空の筒形突起に円孔を穿ったものの一部の可能性もある。いずれにしても小片なので詳細は不明である。

7. C-4区出土土器(第27、28図)

貝塚の中心部にあたる。貝の堆積が最も厚い箇所でもあり、多量の土器が出土している。

1は磨消縄文の胴部片である。沈線で直角的な意匠を施している。中津式土器と思われる。

2は爪による凹点文を横に不規則ながら4段に入れている。口唇はかすかに反る形を見せる。

3は1と同様の磨消縄文である。4は口縁部で、口縁を爪で若干へこませている。

5は筒形突起の一部であろうか。刻目突帯と沈線が認められる。焼成はかたく、福田KⅡ式に近いものか。

6は山型隆起をなす磨消縄文の口縁部である。

7は平縁の口縁の一部で、貝殻条痕をナデにより消している。口唇部より下に指の圧痕がある。8も調整は7と同じであり、口縁は山型隆起となる。

9は胴部片で貝殻条痕が残る。

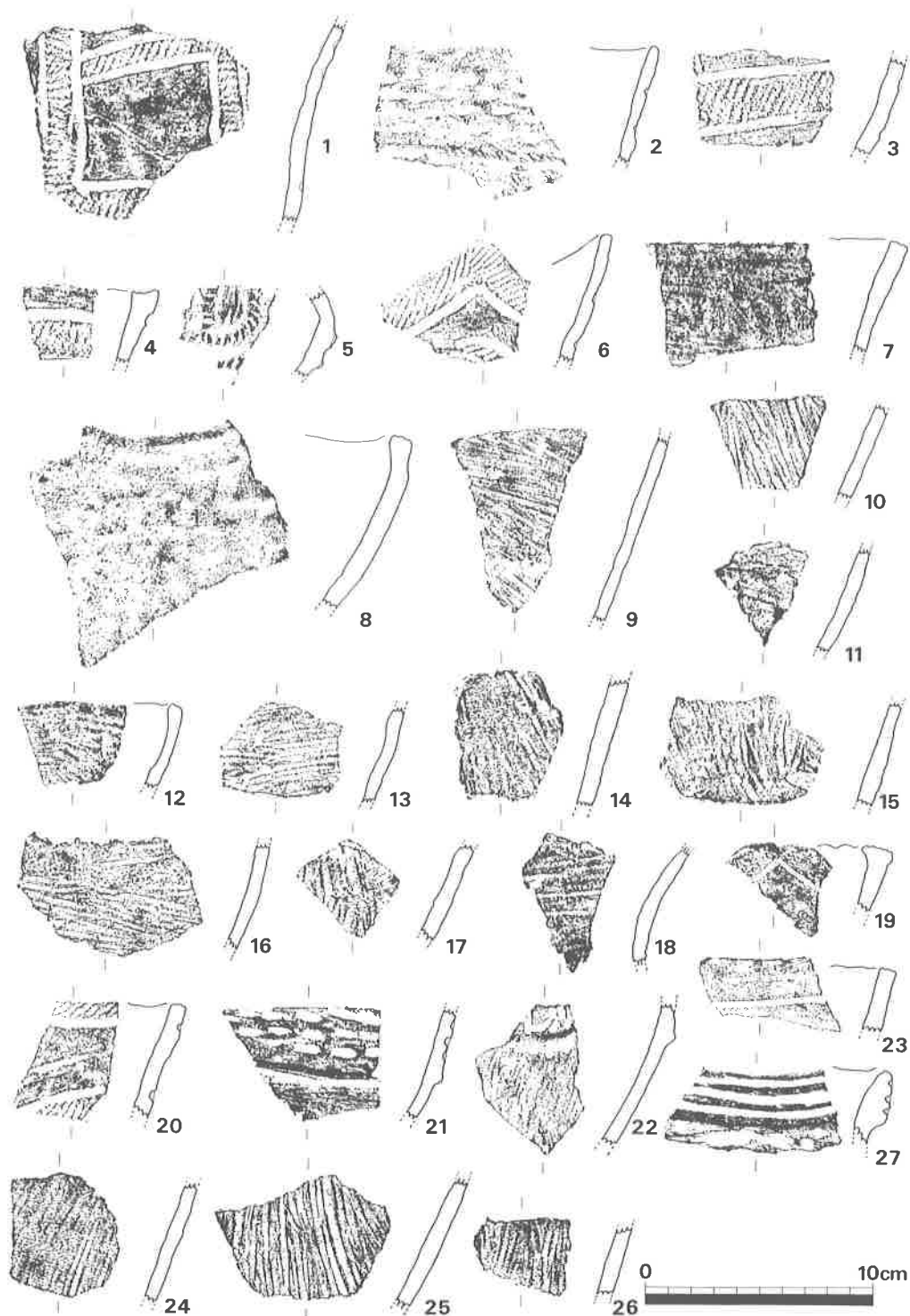
10から18は小片の貝殻条痕土器片である。

19は口縁部端を内外のナデによりかすかなT字型としている。口唇部に丸みがかった山型の沈線を入れている。

23は磨消縄文で、小片だが復元すると山型隆起するものと考えられる。

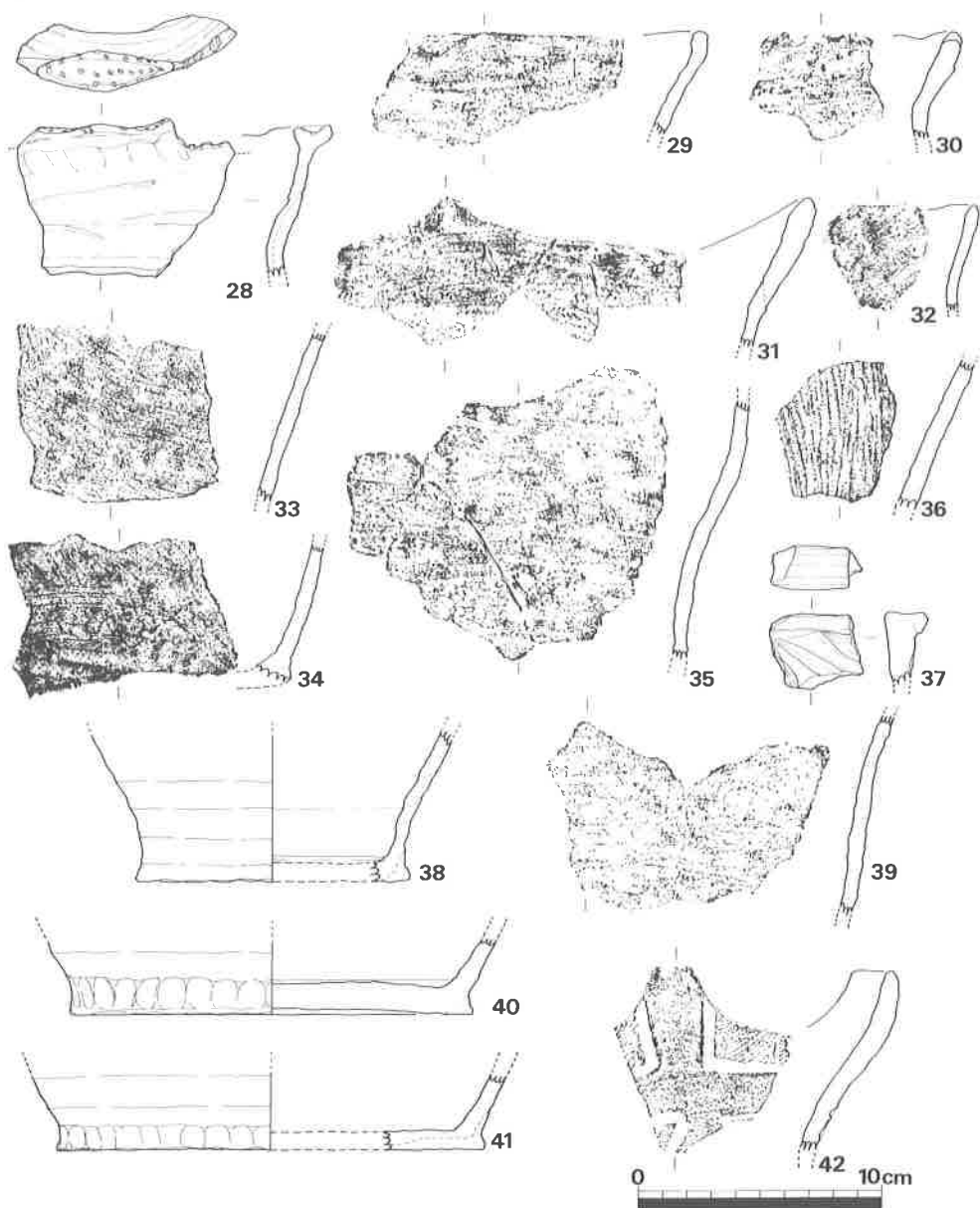
24、25は貝殻条痕が残るもので、25は口縁部となる。

26(以下28まで第26図)は粗製土器である。内外面とも部分的にハケ目が残るが、全体に丁寧な横ナデを施されている。中津式に伴う壺形土器であろうか。



第27図 C-4区出土土器拓影(縮尺1/3)

20は磨消縄文の口縁部片である。復元すると山型隆起になるものと思われる。
 21は2と同様の破片で、欠損している箇所が口縁端になるのではないか。爪による凹点文が横に3段見受けられる。
 22は沈線文を施し、胎土に微量の雲母を含む。23は口縁部で、指による押圧整形の痕が見て取れる。24から26は胴部破片で貝殻条痕がある。



第28図 C-4区出土土器拓影、実測図（縮尺1/3）

27は口縁部に4本の沈線を横に巡らす。

28（以下、42まで第28図）は口縁に皿状の装飾を持ち、一段下がって刻目を口縁端にしている。皿状の口縁を巡るように、そして底部に1列に刺突文が入る。圧痕から皿状装飾は口縁部をつまみ出して作られているようである。ある種異形の土器ともいえる。

29から32は口縁部で、いずれも貝殻条痕がある。30は口縁が波状に、31は鋭い山型隆起になっている。33は胴部破片である。34は底部付近で、いずれも貝殻条痕が施される。

33と34は接合する。

35、36は胴部片である。

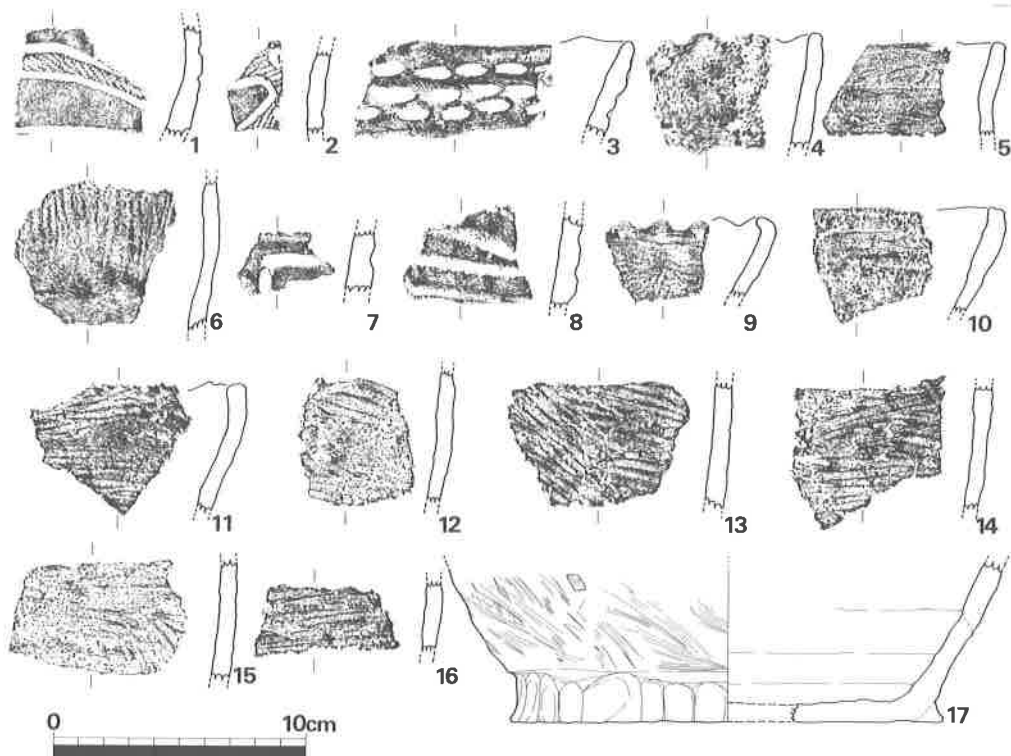
37は口唇部を外側に折り曲げる。胎土に雲母を含んでいて、阿高式系土器と思われる。

38は底部から胴部の一部が残る。39は胴部片である。

なお、29、31、35、39は胎土、色調、調整法ともに共通していて、同一個体の可能性が高い。

40、41は底部で二つとも指の圧痕が認められる。42は先端を平らにした山型隆起口縁を持つ磨消縄文である。十字に沈線文をいれ、縄文は丁寧に削られている。中津式である。

8. D-1区、D-2区出土土器（第29図）



第29図 D-1区、D-2区出土土器拓影、実測図（縮尺1/3）

ここは貝塚への落ち込みが始まる東側付近にあたる。D-1区は2号土墳墓がある場所で、後世の攪乱を受けている。

1、2は磨消縄文を施している。3は口縁を緩やかな波状となし、爪による刻目を横方向に3列入れている。

4は口唇部に指による刻目で波状に整形する。指の圧痕が認められる。5は口縁部で貝殻条痕が残る。6も貝殻条痕を施した胴部片である。

7と8は阿高式系土器である。太い沈線と滑石か雲母を含む胎土が特徴的である。

9は口縁端がつよく内側に屈曲し、口唇部は波状をなす。

10、11は口縁部下がかすかにくびれている。二つとも貝殻条痕が見られる。

12から16はいずれも胴部片で、貝殻条痕が施される。

17は底部で、指による押圧で底部が強くくびれている。

9. D-3区出土土器（第30、31、32図）

この区は貝塚調査中、最も多くの遺物が出土したところである。貝の種類によって層がわかれているところもあって、貝塚そのものが比較的時間差のない形成をされていることがうかがわれる。

1は円弧を描く沈線文の磨消縄文である。2は口縁部で、2本の沈線文の磨消縄文がある。3は3本の沈線文の磨消縄文で、この沈線は細く深い。区画外側は丁寧に削られている。これらの特徴から福田KⅡ式土器と思われる。

4は小さな山型隆起口縁を持つ。頸部は若干くびれ、口縁から口唇部にかけて沈線文が認められる。中津式に近いものか。

5は磨消縄文の胴部片であろうか。6は口唇部に爪で刻目を入れ、同様に口縁に2列の刻目を持つ。7は口縁部に小さな凹点文を2列に入れているが、不規則な千鳥状にも見える。

8は若干くびれる口縁部である。

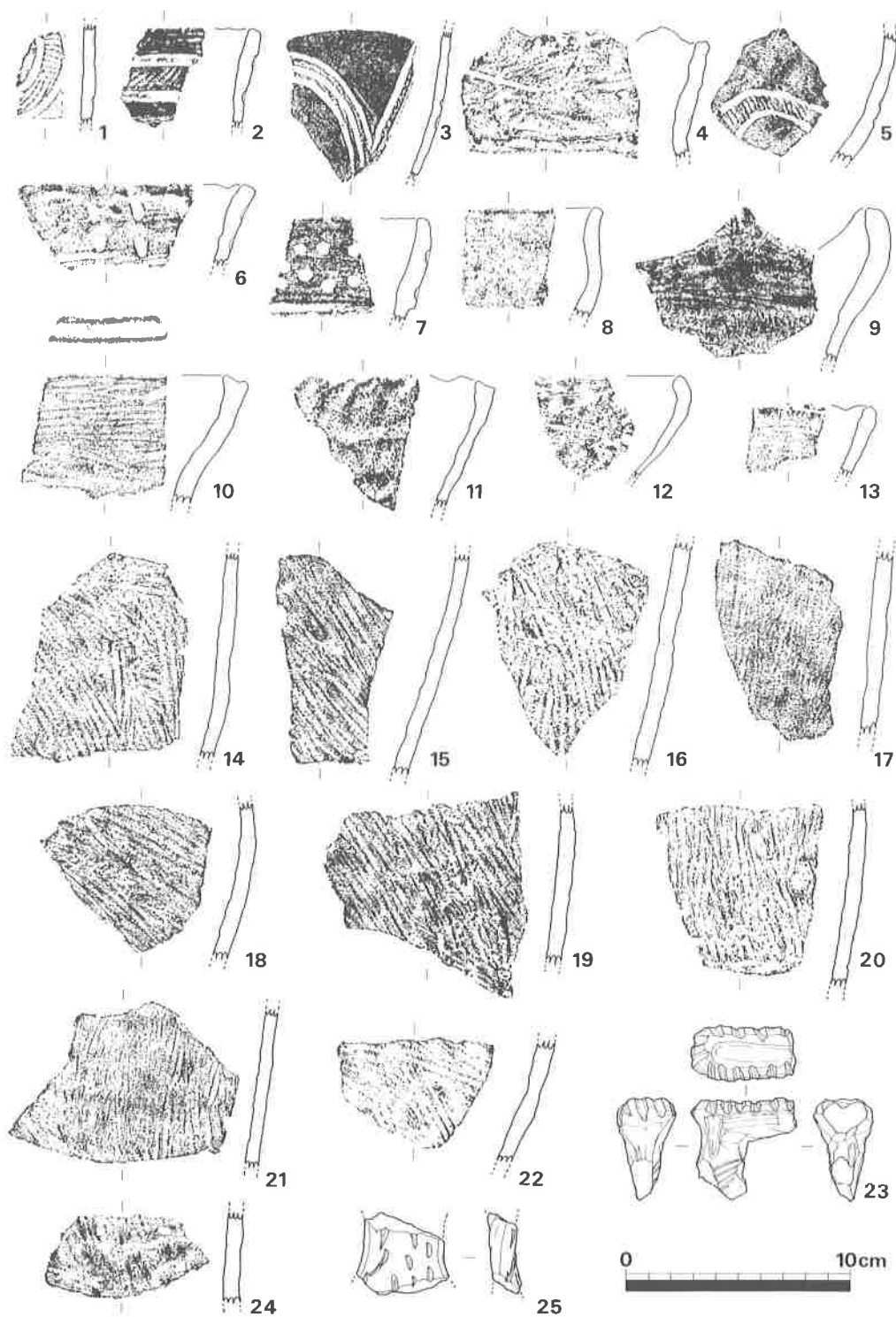
9は山型隆起する口縁で、貝殻条痕が施される。

10は口唇部に沈線を入れていて、表面は貝殻条痕が残る。11は口唇部に指による圧痕があり、それが波型の口唇を形作っている。

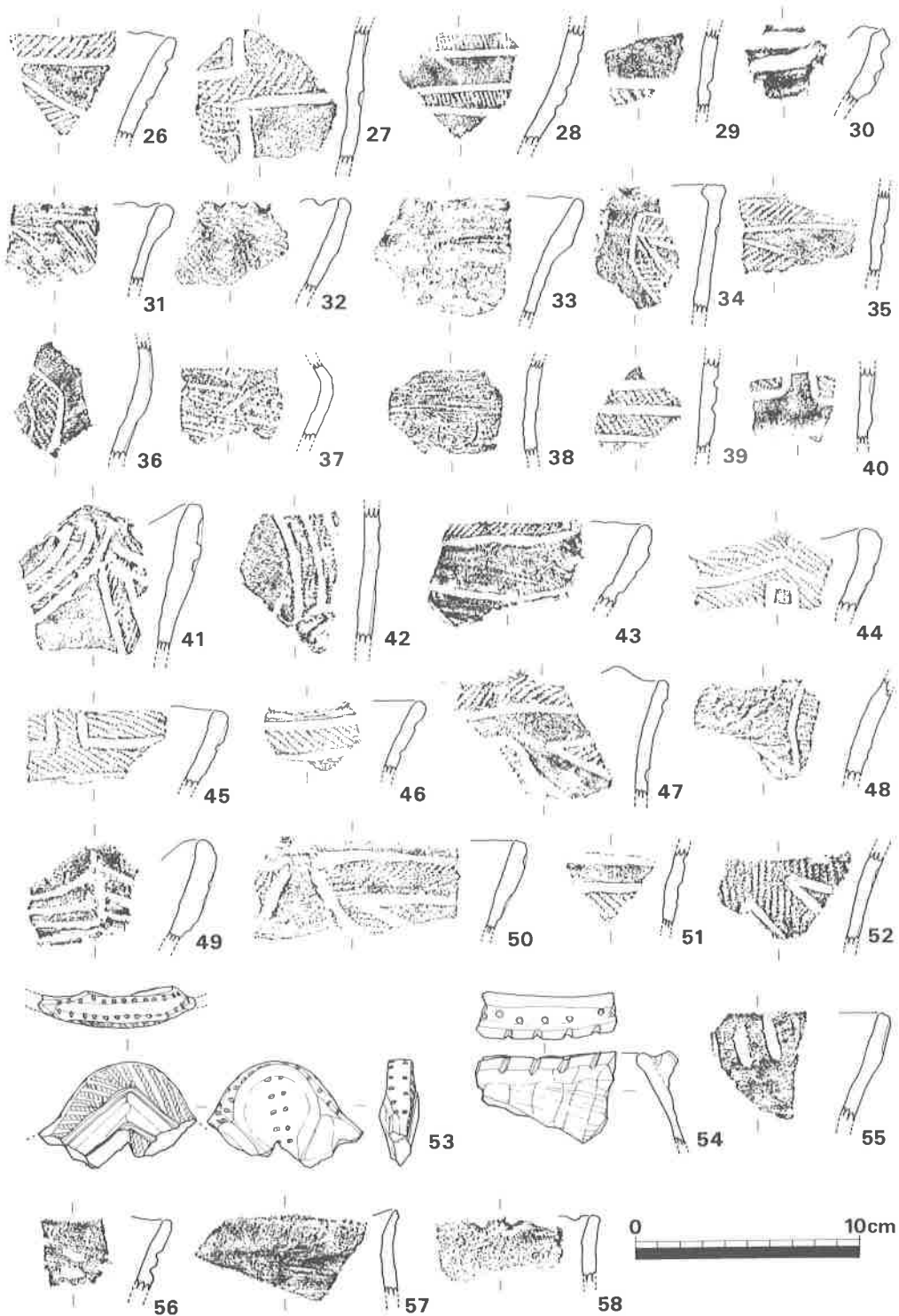
12は内側に湾曲する口縁部である。

13は口唇部が波型となるものである。

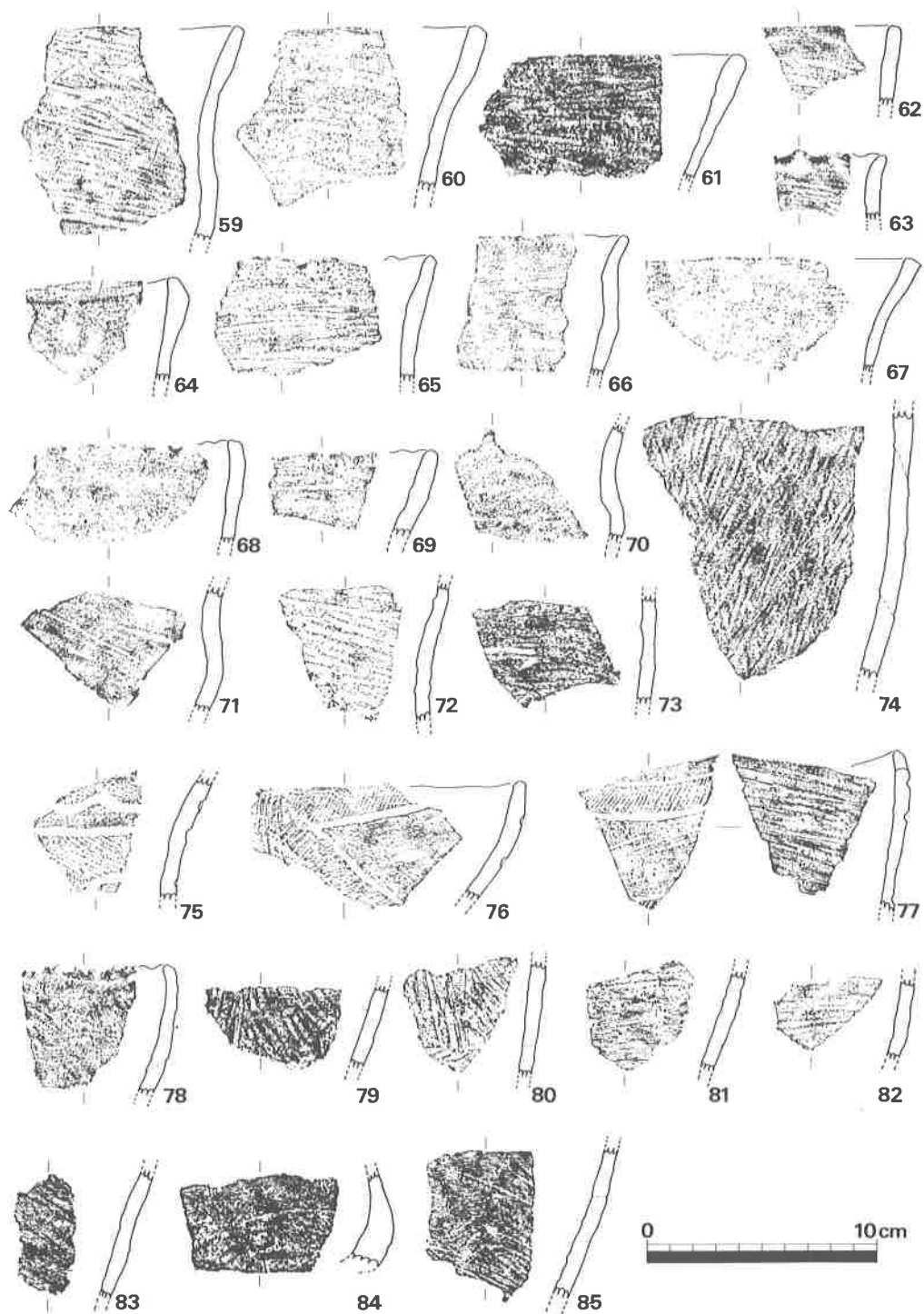
14から22は胴部片でいずれも貝殻条痕が残る。



第30図 D-3区出土土器拓影、実測図（縮尺1/3）



第31図 D-3区出土土器拓影、実測図（縮尺1/3）



第32図 D-3区出土土器拓影(縮尺1/3)

23は把手状の装飾だろうか。欠損部が多いため本来の形や部位がわからない。楕円形の皿状の縁に刻目が入り、裏面に接続部がある。

24は胴部破片で、貝殻条痕がある。

25も把手状のものであろうか。表面に爪による刻目が不規則に並ぶ。あるいはC-2区出土のもの（第28図、28）と同列のものか。

26（以下、58まで第31図）は磨消縄文の口縁部である。27は直線的な沈線文による区画の中に縄文がある。中津式であろう。

28は細い沈線にかこまれて縄文があり、福田KⅡ式に近い特徴を持つ。

26は小片で磨消縄文である。30は阿高式系に近いものであろうか。

31は貝殻条痕の中に沈線が認められる。中津式に準じるものか。

32は口唇に爪による刻目を入れ、波状にしている。

33は口縁部を肉厚にしている。

34、35、36は小片であるが、細くしっかりした沈線文に囲われた緻密な縄文が認められる。福田KⅡ式と考えられる。

37は比較的強く湾曲した部分である。38は逆にくびれの部分で、2点とも貝殻条痕の後から縄文を付けているのが認められる。同一個体であろうか。

39、40は小片ながらその磨消縄文により中津式と思われる。

41は山型隆起する口縁を持つ磨消縄文である。中津式か。

42は3本の沈線を持つ磨消縄文である。胴部片と思われる。

43から47はいずれも磨消縄文の口縁部で、中津式に属するものと思われる。

48は沈線はあるものの、器表が荒れていて細部まで観察できないが、縄文というより、むしろ糸目というべき痕跡が認められる。磨消縄文の製作過程で、縄の端で糸がはぐれている箇所を押印されたのであろうか。

49は山型に隆起し、縁に沿って横方向の沈線3本と、垂直の沈線がある。

50は磨消縄文の口縁で、口唇部に小さな隆起がある。

51と52は小片で、磨消縄文を持つ。

53は丸い耳状のもので、外面と思われる方に沈線を持つ磨消縄文、内面および縁には小さな刺突文がそれぞれ2列施されている。欠損しているが湾曲した内側にも縄文が認められる。本来の形は不明であるが、山型隆起の頂点に付ける装飾かもしれない。

54も異形の口縁である。縁に刻目を持つことと、丸い小さな刺突文があることから、C-4区出土品（第28図、28）と同類のものだろうか。これらのものは鐘崎式や北久根山式に近い可能性もある。

55は口縁部に縦方向の刻目がある。

56は口縁部に爪による刻目が2列認められる。

57、58はナデ調整の口縁部で、58は刻目がある。

59（以下、85まで第32図）から69は貝殻条痕を施された口縁部である。63、65、68、69は口縁に刻目を入れ、波状としている。

70から74は胴部片で、いずれも貝殻条痕が残る。

72には貝殻条痕の上に縄目が認められる。

75、76は磨消縄文である。75はくびれる部分で、76は口縁部で内側に湾曲する。

77は外面に磨消縄文、内面に貝殻条痕を残す。

78は口縁に刻目を入れ、波状にした口縁である。

79から85は胴部の破片で、いずれも貝殻条痕が残る。84のみ器壁の一方が厚く、強く湾曲する様子がある。

10. D－4区、D－5区出土土器（第33図）

D－4区は貝塚の中心北側で、D－5区はその西側でなだらかに砂層が高くなっていて、貝の堆積が終わる部分でもある。

1から3は磨消縄文である。3の文様から中津式に属するものと思われる。

4は口縁から胴部にかけて若干くびれがある。ほぼ横方向の貝殻条痕が残る。

5は口縁が山型に隆起していて、凹線文が2列認められる。

6、7、8は口唇部に爪で刻目を入れ、波状にしているものである。

9は壺形土器になるものか。口縁部に肉付けをし、頸部は指による押圧を加えているので段が付いているように見える。口縁には横方向の太い沈線文が並び、口唇部は緩やかな波状となっている。

10から12と15は胴部片で、いずれも貝殻条痕が見られる。

13と14は底部片である。どちらも指による圧痕が認められる。

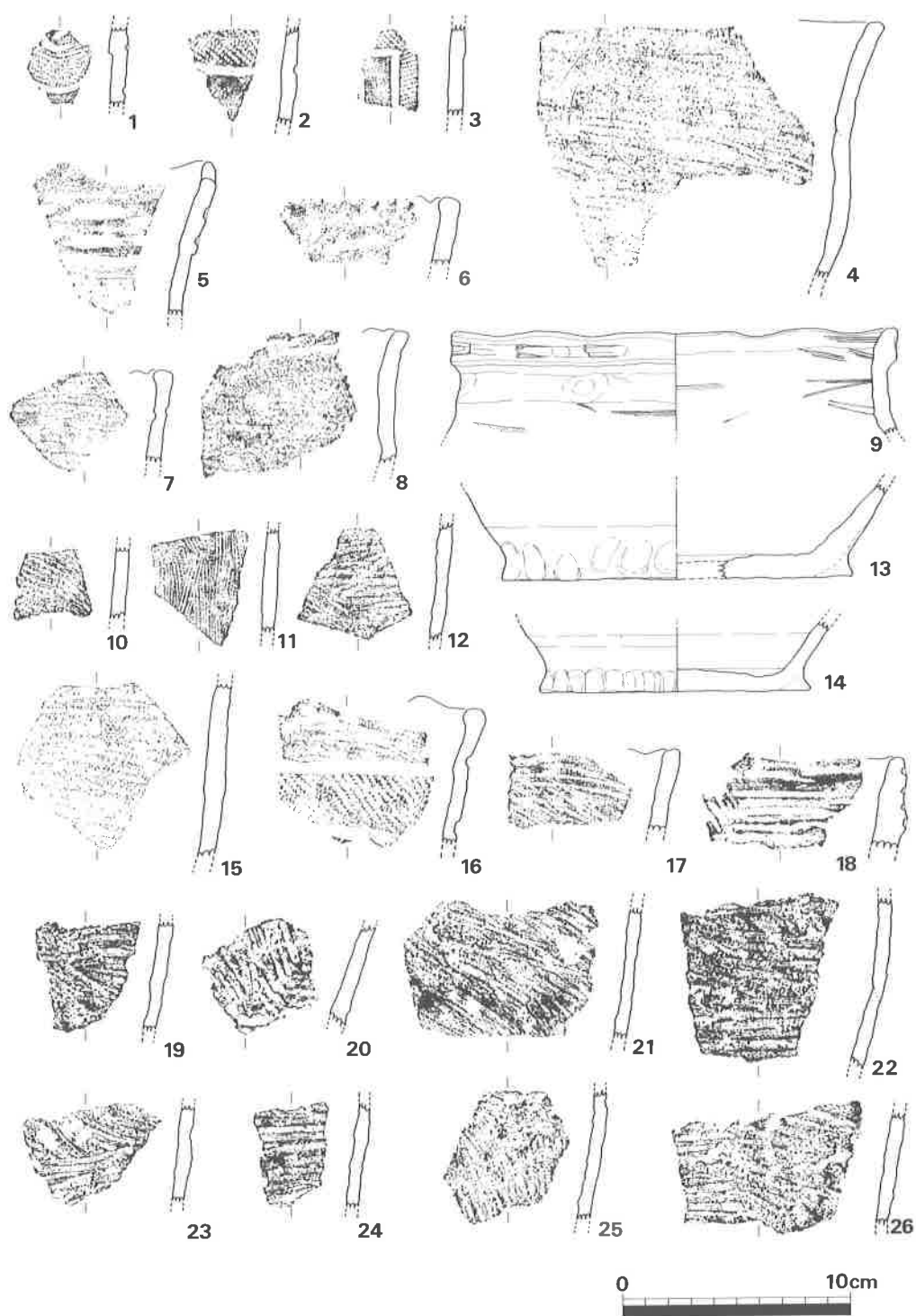
16は磨消縄文で小さな山型隆起口縁である。

17は貝殻条痕を施された口縁部で、波状となっている。

18は貝殻の肋による条痕が横方向と、わずかに斜行するものも認められる。

1から18はD－4区出土土器である。

19から26はD－5区から出土したもので、いずれも貝殻条痕が施された胴部片である。



第33図 D-4区、D-5区出土土器拓影、実測図（縮尺1/3）

11. B-3区、B-4区、C-5区、C-6区出土土器（第34図）

B-3区、B-4区は貝塚東南側で、砂丘が南側に向かって高くなっている箇所で、貝の堆積は薄い。むしろ貝が散らばっていると表現した方が近く、土器も砂丘上に点在している感がある。

B-4区はIV-1号中世人骨墓墳があったところで、墓墳の底部に露出していた貝層の調査となったが、ここの貝の堆積はほとんどない状況であった。

1は頸部にかけて緩やかにくびれ、口縁部に2段の押線が付けられている。2、3、4、5は貝殻条痕が付いた胴部片である。

6は口縁部に押線を持つ。小片なので詳細はわからないが、不規則に3段に付けられているようである。7は口唇部に爪で刻目を入れ波状にし、口縁に2段の押点文を持つ。

8は小さな山型隆起があるのだろうか。口縁は縄文をナデ消して、2段の爪による刻目を入れている。

9は筒形突起と思われる。刻目突帯が2条認められ、福田KⅡ式に近いものと考えられる。

10は磨消縄文の破片である。11は磨消縄文の口縁部で、2点とも中津式であろう。

12から15は口縁部片である。いずれも貝殻条痕が付けられているが、13と14はナデ消している。15は口唇部をつまみだし、T字状にしている。

16は貝殻条痕が施された口縁部である。17は口縁で、先端に小さな隆起があるものと思われる。

18は粘土紐を二つねじり合わせたものである。土器の部品というより土製品の一部かもしれない。

19は口唇部をほぼ直角に内側に曲げ、縁に爪で刻目を入れている。

20も9と同様、筒形突起と思われる。口唇部に縄文が残り、その上から刻目を入れているのが見受けられる。

21も中空の筒形突起で、外面に楕円形の孔が開く。縁に爪で刻目を入れ、途切れてはいるが沈線が1条認められる。表面は丁寧に削っている。

22から29は貝殻条痕が残るものである。

22は口縁部で、頸部が若干くびれる。23から27は胴部片であろう。26と27は緩やかにくびれが認められるので、口縁部に近いものと思われる。

なお、24と27は接合する。

28は口縁部で欠損しているが、口唇部に爪で刻目を入れているようである。29は口縁部に太い沈線が残る。



第34図 B-3区、B-4区、C-5区、C-6区出土土器拓影、実測図（縮尺1/3）

12. E-3区、E-5区出土土器（第35図）

調査区北側で、E-3区は貝塚中心部の東隅、E-5区は旧砂丘がなだらかに西側に上がっていく場所にあたる。

土器等、遺物の出土は少なかった。

1は貝殻条痕が施された口縁部である。口縁先端が肉厚になり、わずかに外反する。頸部にかけては少しくびれていくようである。

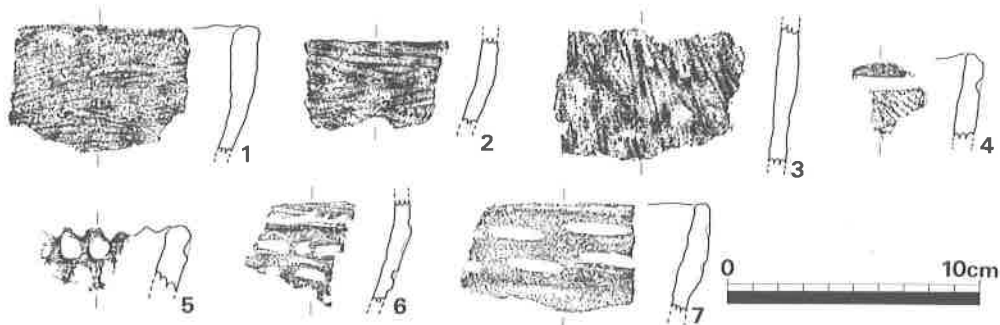
2と3は貝殻条痕の胴部片で、2はわずかに「くの字」に曲がっている。

4は磨消縄文の口縁部の小片である。

5は口唇部に爪による刻目を入れ、口縁部に丸い凹点文を付ける。認められるのは2段のみである。

6はわずかに「くの字」に曲り、太い押線が2段に付く。

7は口縁部で2段に太い押線が施される。



第35図 E-3区、E-5区出土土器拓影（縮尺1/3）

13. 包含層出土土器（第36図）

1は磨消縄文の口縁部で頸部は強く外反する。2、3、4も磨消縄文である。4は沈線が細くしっかりしていて、福田KⅡ式に近いものかもしれない。

5は口縁部に丸い凹点文を2段に持つ。6は磨消縄文の胴部片である。

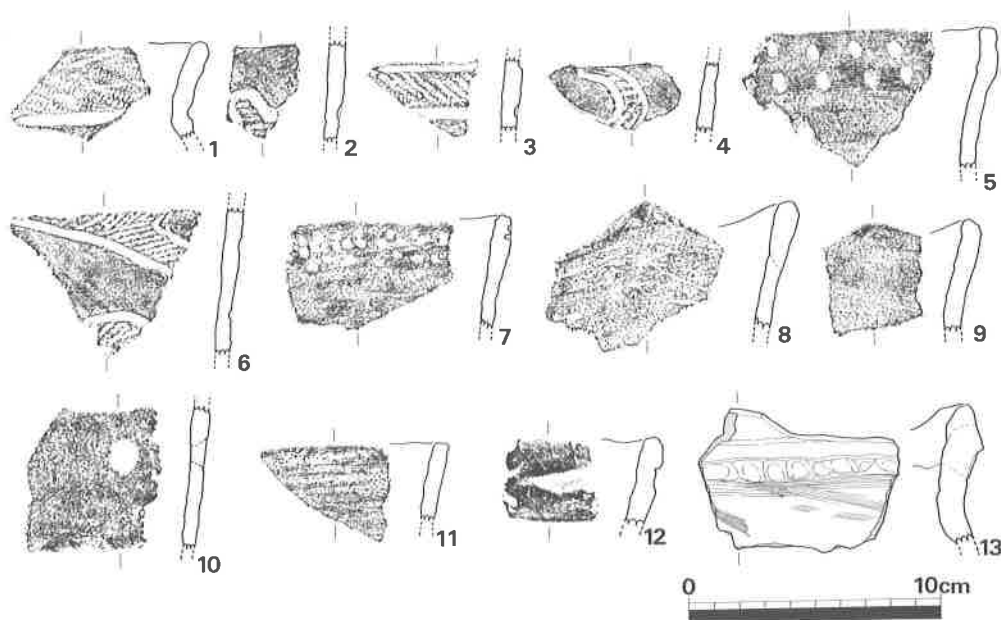
7は口縁部に小さな丸い凹点文を不規則だが2段に入れられている。

8は口縁部が山型隆起するもので、表面はナデ調整を施されている。9は口唇部がわずかに内に曲げられているが、8と同様のものではある。

10はナデによる調整をされた胴部片で、丸い孔が開けられている。

11は貝殻条痕が付いた口縁部である。

12は阿高式系土器である。他の出土品同様、赤褐色を呈し、胎土に滑石もしくは雲母を含む。
13は口唇部が一段下がる形を持ち、口縁部に指の圧痕が認められる。

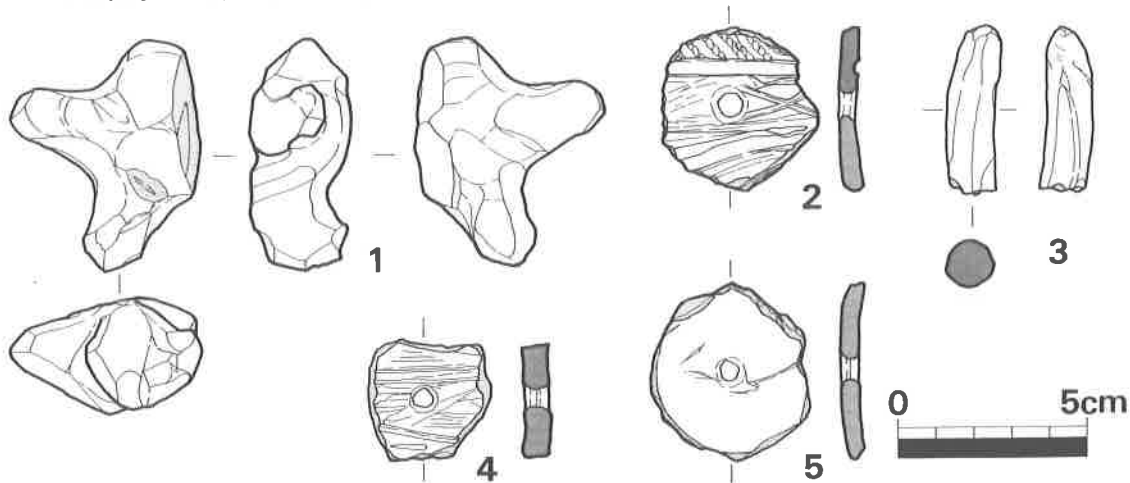


第36図 包含層出土土器拓影、実測図（縮尺1/3）

14. 土製品（第37図）

1は手づくねの土製品で、一部欠損している。表面調整も特にされておらず、把手のような突起が2箇所出ている。本来の形は不明である。2は磨消縄文土器を利用した紡錘車である。

3は把手の一部であろうか。4と5は紡錘車で、4は貝殻条痕が付いている。



第37図 土製品実測図（縮尺1/2）

2) 石器

第4次調査、第5次調査ともに、縄文時代の石器類が多量に出土している。その大半は黒曜石製の鏃等で、ここに実測に耐えるものを紹介していく。

また、打製石斧や軽石製浮子、石錘等および時代は異なるが他の石器も数点出土している。紙面の都合上、その紹介は別の機会に譲りたい。

縄文時代の鏃類は100点を越えるが、ここでは97点を挙げた。

うち鏃は79点、搔器、削器、石鋸類は18点である。大半は貝層内よりの出土である。若干遺物包含層からの出土もあるが、時期的に貝塚が形成された縄文後期初頭に比定してもよい。

また、同項末尾に載せている観察表に長さ、幅、厚み、重さ、比率等の計測値と、調査時期、出土地点、層位を載せているので、説明は特に留意する点のみを述べる。

1. 打製石鏃Ⅰ（第38図）

1から5はほぼ完形の黒曜石製鋸歯鏃である。いずれも丁寧かつ細かい調整により製作されていて、二等辺三角形を呈する。

1は丸みがかった抉基である。2、3、4はV字型の抉基を持つ。

6は先端を欠損する。片面に1次打ち欠きの際、大きく剥離した痕があるが、そのエッジは利用せず2次加工において刃部を形成する。安山岩製。

7は先端部のみの出土である。

8は先端と片脚を欠損する。復元するとV字型の抉基になる。

9から12は完形品である。これも細かい調整を施されている。7から12は黒曜石製である。

2. 打製石鏃Ⅱ（第39図）

13は先端と片脚の先がない。14は半分割れた状態である。復元すれば丸みを帯びた抉基になる。15は先端部と片脚がない。16はほぼ完形である。

17は全体的に正三角形を呈し、丸い抉りが入る。

18、19は二等辺三角形を呈し、大きく抉りが入る。ともに先端を欠する。

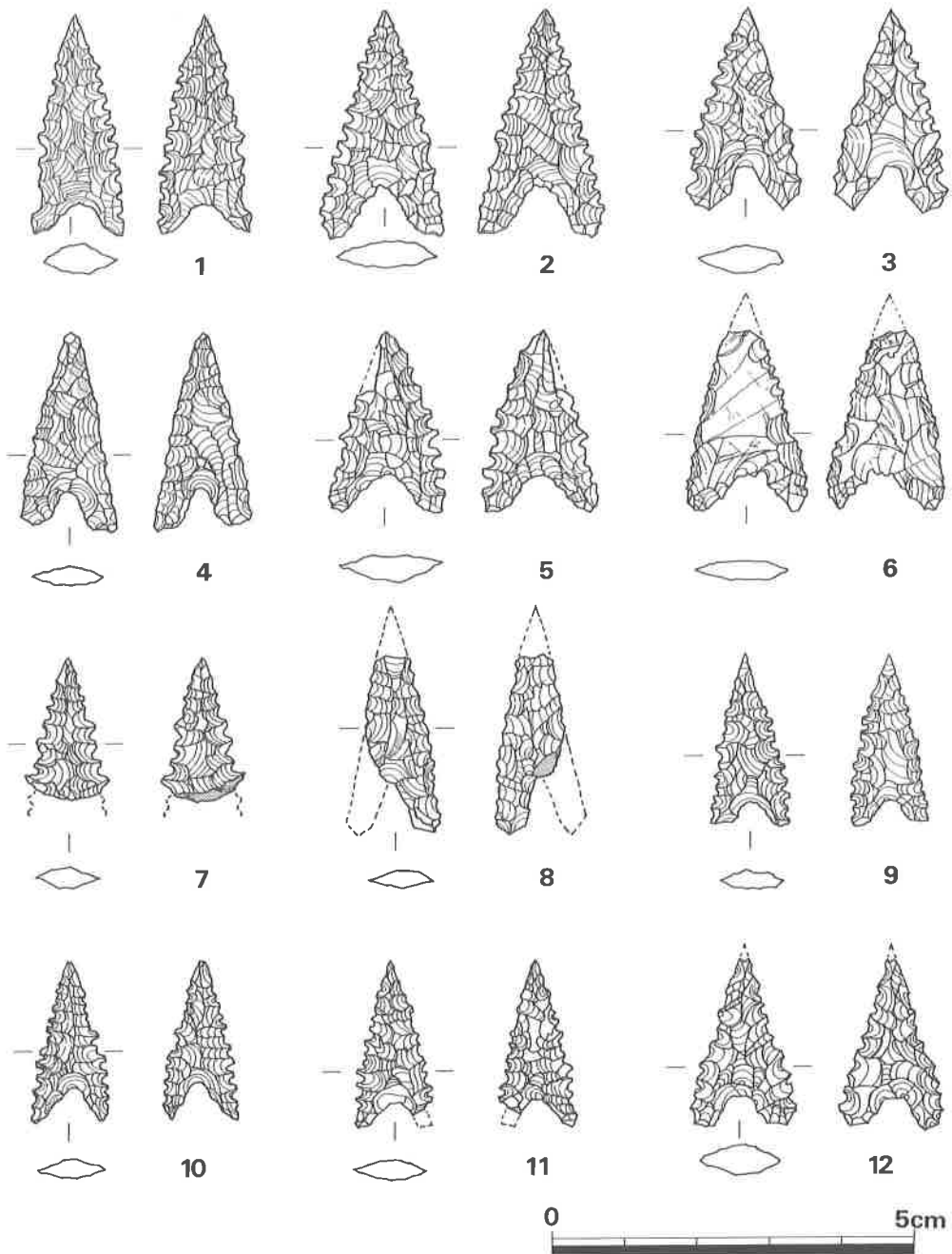
18はわずかだが鋸歯が認められる。

20から24はわずかだが一部欠損する。25は小型の鋸歯鏃で正三角形を呈する。両面ともに大きな剥離面があり、その二辺にそって2次加工が施され刃部を作る。26、27は刃部が若干丸み

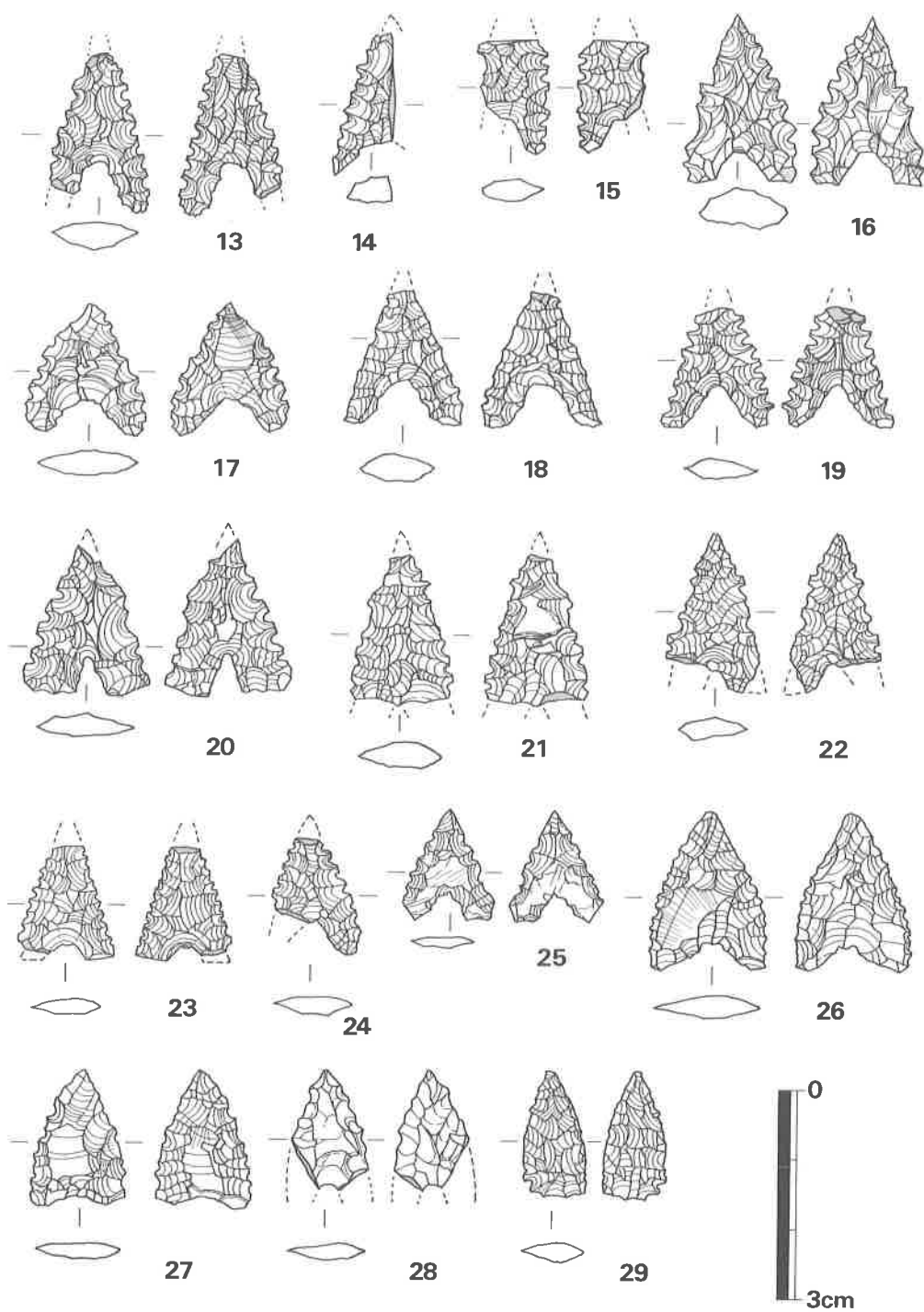
を帯び、わずかだが鋸歯が認められる。それぞれに大きな剥離面を持つ。

28は両脚を欠損する。

29も丸みがかった二等辺三角形で、脚がなく円基である。片側基部付近に2本の鋸歯が見受



第38図 打製石鏃Ⅰ実測図(縮尺1/1)



第39図 打製石鏃Ⅱ実測図（縮尺1/1）

けられる。

28は安山岩製であとは黒曜石製である。

3. 打製石鏃Ⅲ（第40図）

30から35は鋸歯がなく、挟りも丸みを帯び、浅い部類に属する。しかし、31と32はかすかだが鋸歯があるように見受けられる。

33は安山岩製である。34は片面に大きく剥離した痕がある。

35は全体的に丸みを帯び、片面に一部原石の表面が残る。36は比較的大きな加工痕を残す。

37は片方が欠損しているが、脚部が長く、丸みを帯びるのが特徴である。

38は片面に大きく1次加工痕が見られる。

39は細かい調整を施している。

40から46は全体的なフォルムが鋭く、45までは凹基である。

40はほぼ完形で、先端が鋭くとがっている。41は先端欠損。42は片脚がわずかに欠ける。43は両面ともに1次加工痕が大きく残る。44、45はほぼ完形である。46は同じフォルムを持つが、平基である。

47は少し丸みを帯びている。片面に縦方向の1次加工痕が見られる。

48は先端と両脚を欠損している。復元すると円基になるのであろうか。

49は刃部が少しふくらむ。

50は逆に刃部がへこんでいて、若干大型である。

4. 打製石鏃Ⅳ（第41図）

51は片脚がないが、復元すると正三角形を呈するものか。わずかに挟りが入る。

52は安山岩製である。両面ともに1次加工痕が大きく残っている。53は先端と両脚がない。

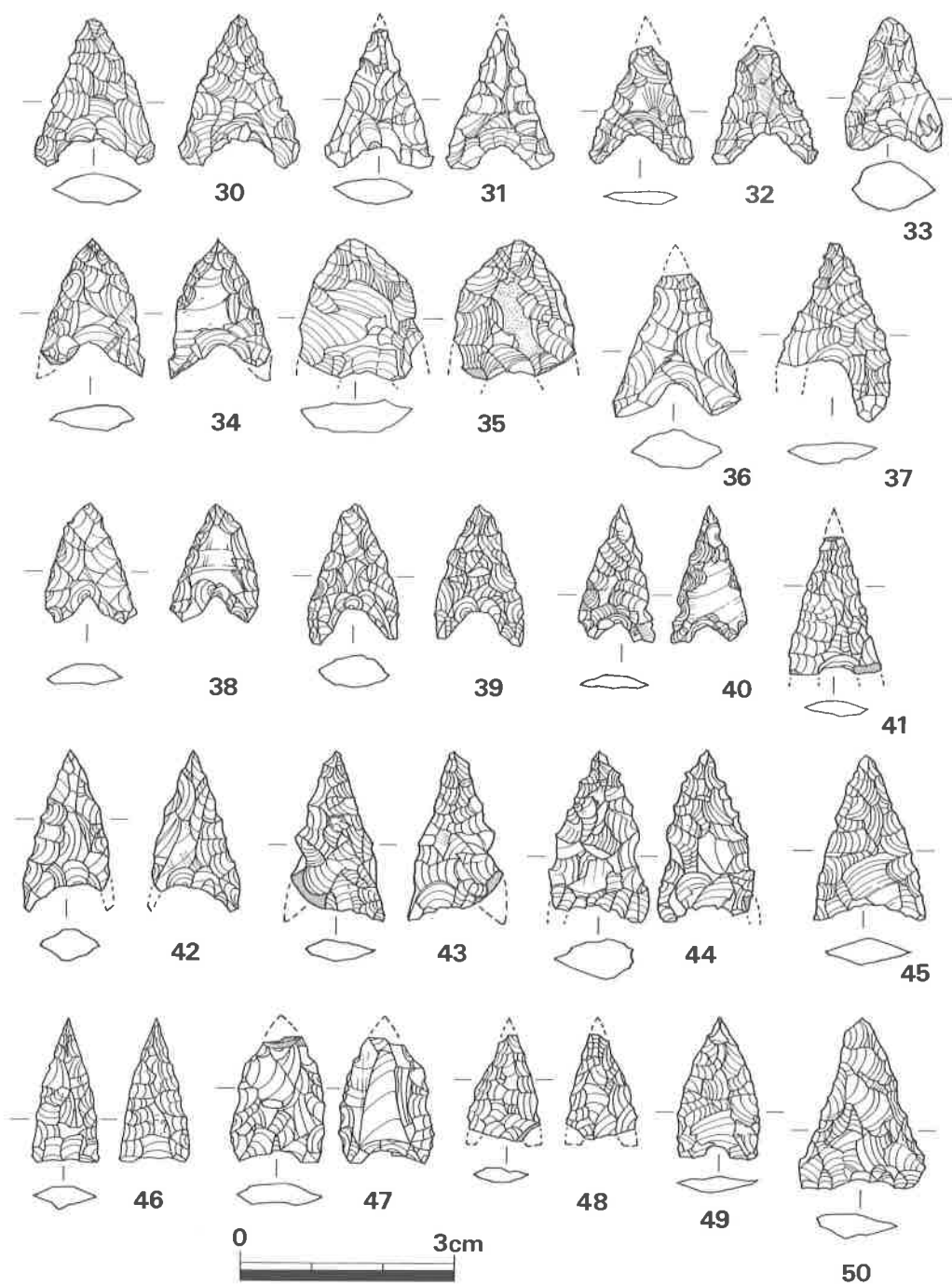
54から68までは大きさはまちまちだが、二等辺三角形を呈し、平基のものである。

54は刃部が若干丸みを帯びる。55は一部欠けているが54と同様のフォルムを持つ。56も同様だが、前者と比べると一回り小さい。57は56よりさらに小さい。60も同様である。

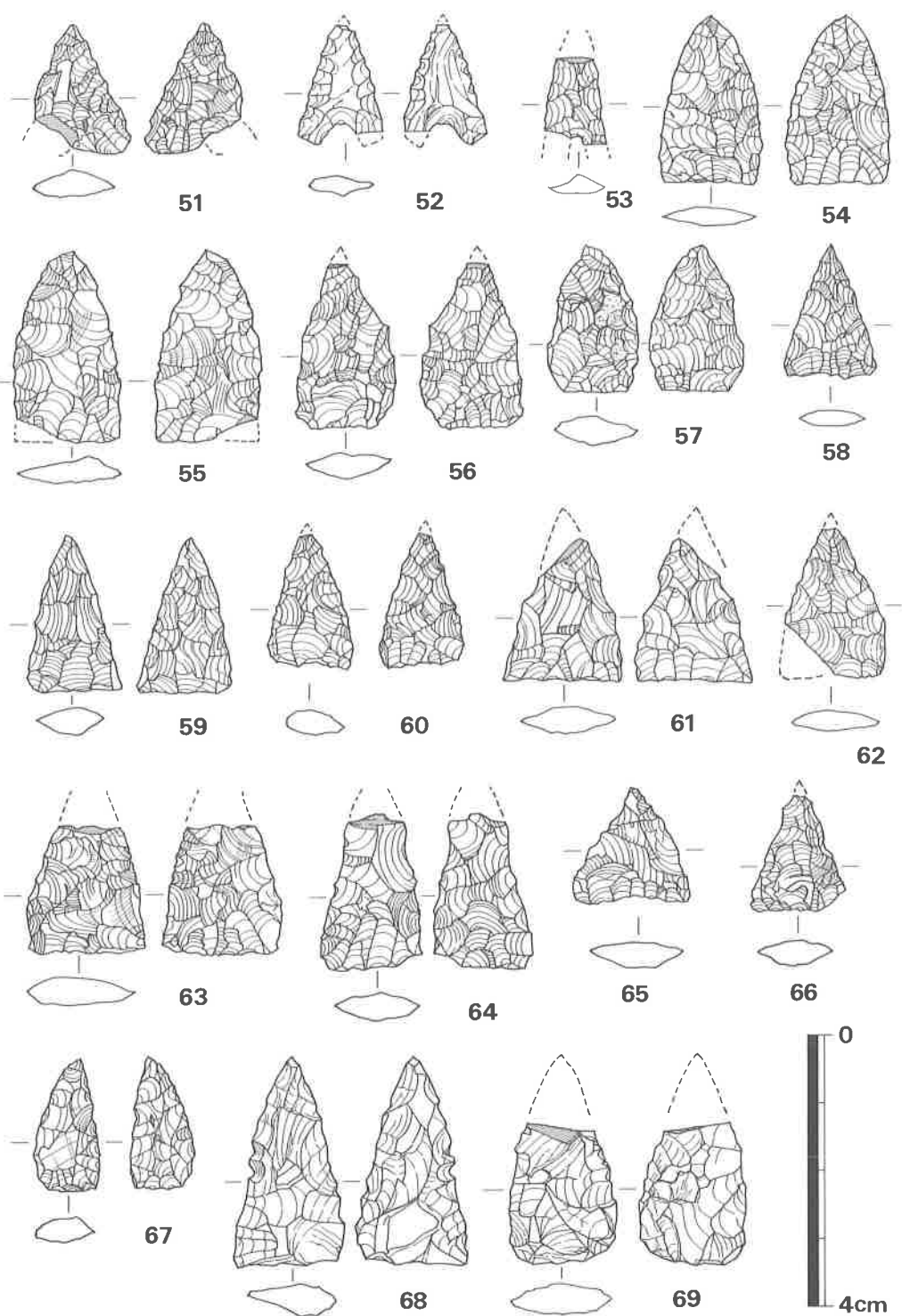
58は刃部がまっすぐ立ち上がっていて、きれいな二等辺三角形である。わずかに基部に挟りが入っているように見受けられるが、平基に分類した。

59は58より一回り大きい。61は先端が大きく欠けるが、復元すると二等辺三角形を呈するものと思われる。

62は基部の一部が欠損する。先端部は先細っているが、途中からふくらみを持ち始める。



第40図 打製石鏃Ⅲ実測図（縮尺1/1）



第41図 打製石鏃IV実測図 (縮尺1/1)

63は先端を大きく欠損する。

64は他と比較してより細長い。先端が欠けているが、復元すると刃部の途中が若干細くなるようなフォルムを持つのであろうか。

65、66は小型で、どちらかというところと正三角形に近い。67も小型であるが、片側の刃部が丸みを帯びていて、中軸が偏っている。

68、69は安山岩製である。

68は完形で、平基、69は先端が大きく欠損するものの、復元すると68とほぼ同じ大きさになる。基部は円基である。

5. 打製石鏃Ⅴ、剥片鏃（第42図）

70は刃部の途中がくびれている。加工痕も大きく、1次加工のエッジをそのまま利用している部分もある。

71、72は安山岩製である。71は先端にいくにつれて細くなっている。基部は円基である。72は刃部がきれいに丸みを帯びている。基部が少し欠けていて、復元すると若干細くなる様子を見せ、基部がわからないが、木の葉のような形をしていたのだろうか。

73から78は剥片鏃である。これらは表土下や遺物包含層からの出土となっているので、貝塚とは時期を異にする。作りからして北久根山式の時期になるのであろうか。いずれも1次加工痕でできたエッジをそのまま利用していて、2次加工は抉りの部分、あるいは先端調整のみに留めている。

73は先端が丸みを帯びた二等辺三角形である。丸みを帯びた抉基である。

74は数回の剥離痕のみでできていて、そのせいか全体的に曲がっている。75、76は若干小型である。

77は基部を大きく欠損する。78は先端がないが、復元すると先細っているように思える。

79は先端がないように見受けられるが、加工痕からして未製品、あるいは失敗作であろうか。

6. 搔器、石銛等（第43図）

80からは鏃以外と思われる石器である。

80、81は搔器であろうか。81の刃部は片側の1次加工痕のエッジをそのまま利用し、裏側は2次加工においてその調整を行っている。

82も搔器と思われるが、先端が欠損していることと、その加工痕から鏃の未製品、もしくは失敗作とも考えられる。

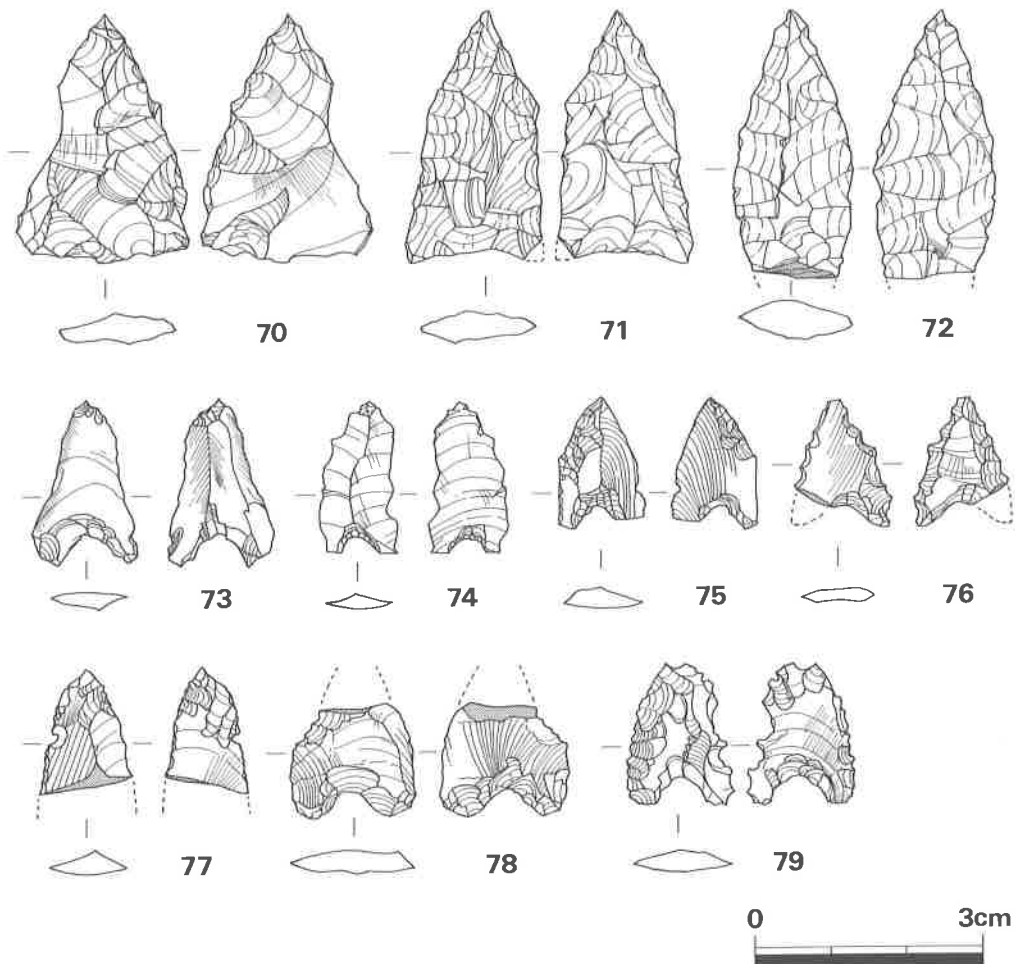
83は搔器である。丁寧な加工で刃部に丸みを帯びさせている。84は出土地点が不明であるが、これも搔器と思われる。

85、86は第4次調査での出土である。一部欠損しているものと思われるが、刃部の形成からして搔器、あるいは削器であろう。

87は搔器である。この中では大型の部類である。

88は石錐である。

89は安山岩製の石銛である。4次調査時に出土。先端部しか残っておらず、元々の大きさは不明である。断面は丸みがかったひし形を呈している。

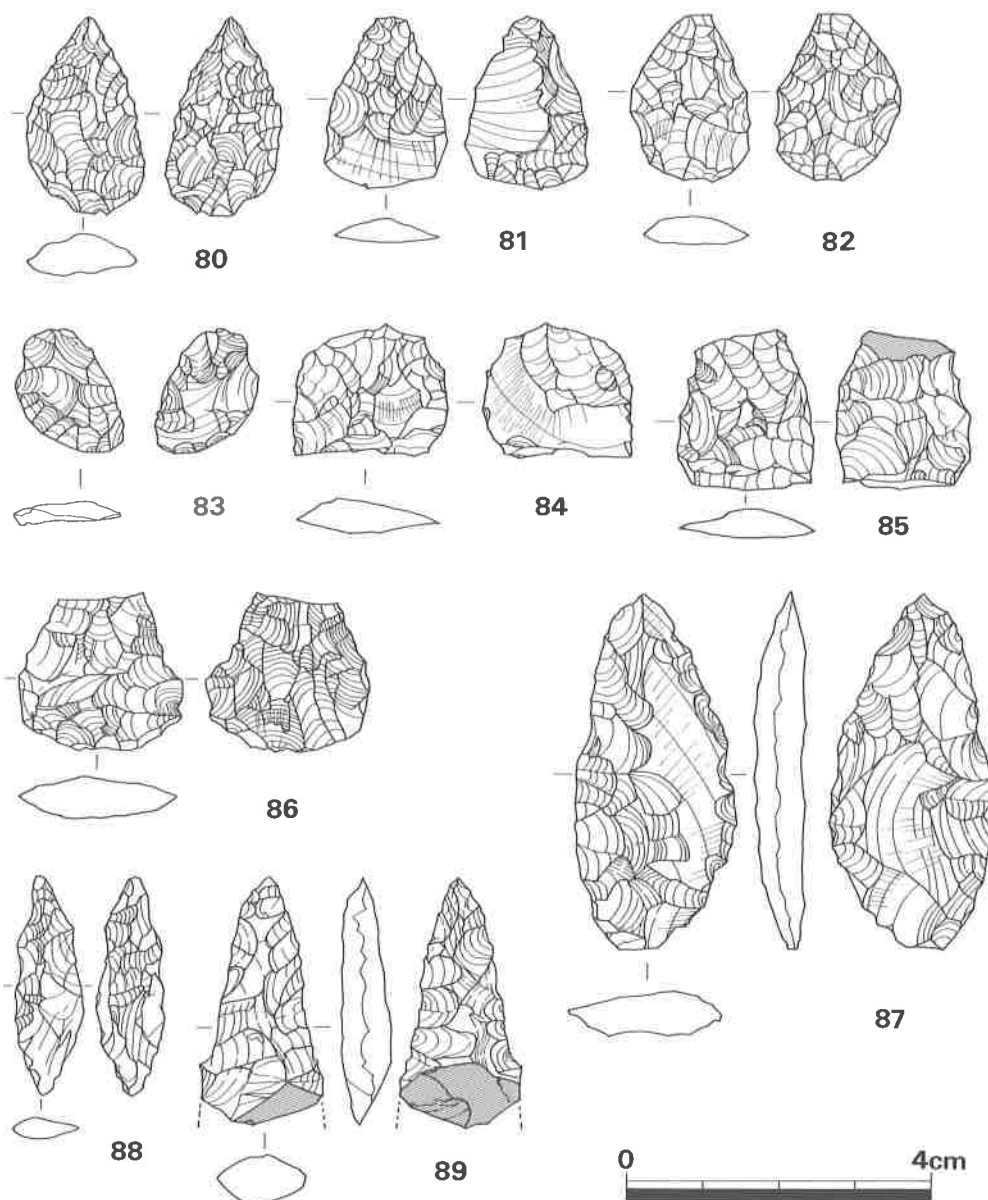


第42図 打製石鏃V実測図（縮尺1/1）

7. 石銚、石鋸等（第44図）

90も銚である。これも途中から欠けていて、本来の大きさ、形状がわからないが、その作りや断面は89と非常に似ている。安山岩製。

91は先端を欠損しているがかなり大型の製品と思われる。断面は片側に稜線を持ち、もう片



第43図 搔器、石銚等実測図（縮尺1/1）

方は丸みを帯びた不整形なひし形となる。鋸の基部となるのであろうか。素材は他と異なる黒曜石で、若干青灰色を帯び、不透明である。乳白色とまではいかないが、大分県姫島産のものであろうか。

92からは石鋸である。

92は長方形で、4本の鋸歯を持つ。うち3本は先端の加工により二股になっている。

93は丸みを帯びた台形に近いフォルムである。3本の鋸歯があり、いずれも先端は二股になっている。

94は長方形を呈し、一部鋸歯が欠けているが、復元すると5本の鋸歯があったことになる。

95はやや長めの台形で、6本の鋸歯がある。4本は鋸歯先端が二股に分かれている。

96はほぼ長方形のフォルムである。他とは違い、大きく3本の突起があり、加工により2本ないしは3本の鋸歯が作られている。

97は不整形の石鋸で、大きな剥片に鋸歯が付けられている。あるいは石鋸の失敗作か、鋸の未製品であらうか。

石鋸はいずれも黒曜石製である。

3) 貝製品、骨角器

貝製品、骨角器はすべて貝層内から出土している。貝製品のうち1号縄文人骨が装着している貝製腕輪はすでに前項で触れているのでここでは述べない。

1. 貝製品 (第45図)

1から8が貝輪である。

1は表面の風化が激しく、わずかに放射肋が認められるものの、貝種はわからない。殻の内側部分を打ち欠いている。縁には特に加工はしておらず、また、他の部分にも研磨等の痕は認められない。蝶番付近は欠損していて、状態からみて未製品の可能性がある。

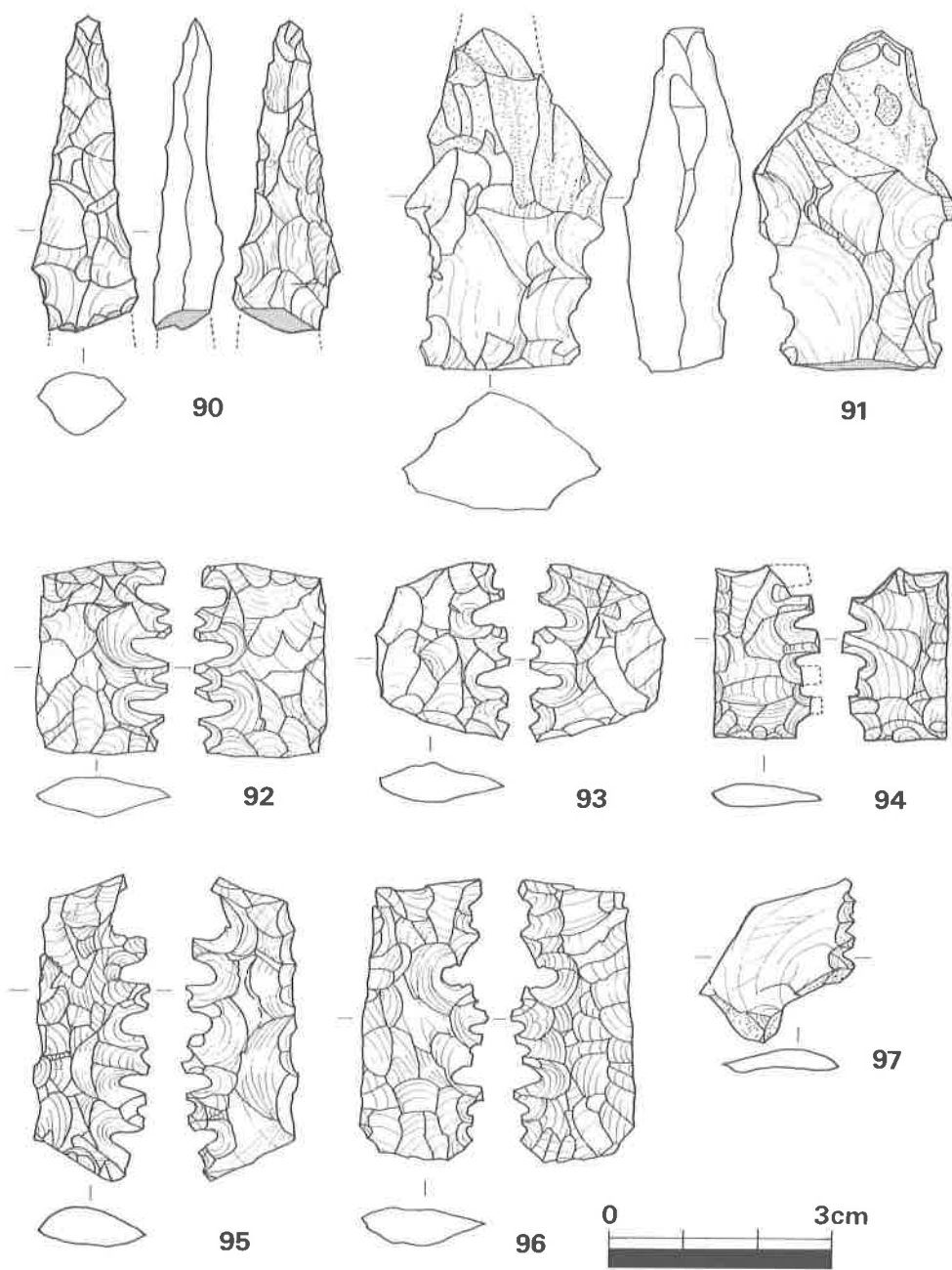
2は殻の内側を打ち欠き、研磨を施している。また、殻縁の内側も研磨している。

3から5と8はサルボウガイだろうか。いずれも表面の風化が激しく、調整の観察が難しいが、殻内側を打ち欠くものの、研磨などの2次調整はしていないようである。

6と7の貝種はわからない。どちらも打ち欠きはしているものの、研磨等の痕は見受けられない。

9から11は貝製の装飾品である。9は小型巻貝に小円孔を穿孔している。10は小型二枚貝の

蝶番付近にやはり小円の穿孔が施されている。11は二枚貝の殻を利用したものである。縁は丁寧に研磨されていて円弧状となり、途中で若干隆起する。3箇所には円形の孔を穿孔している。

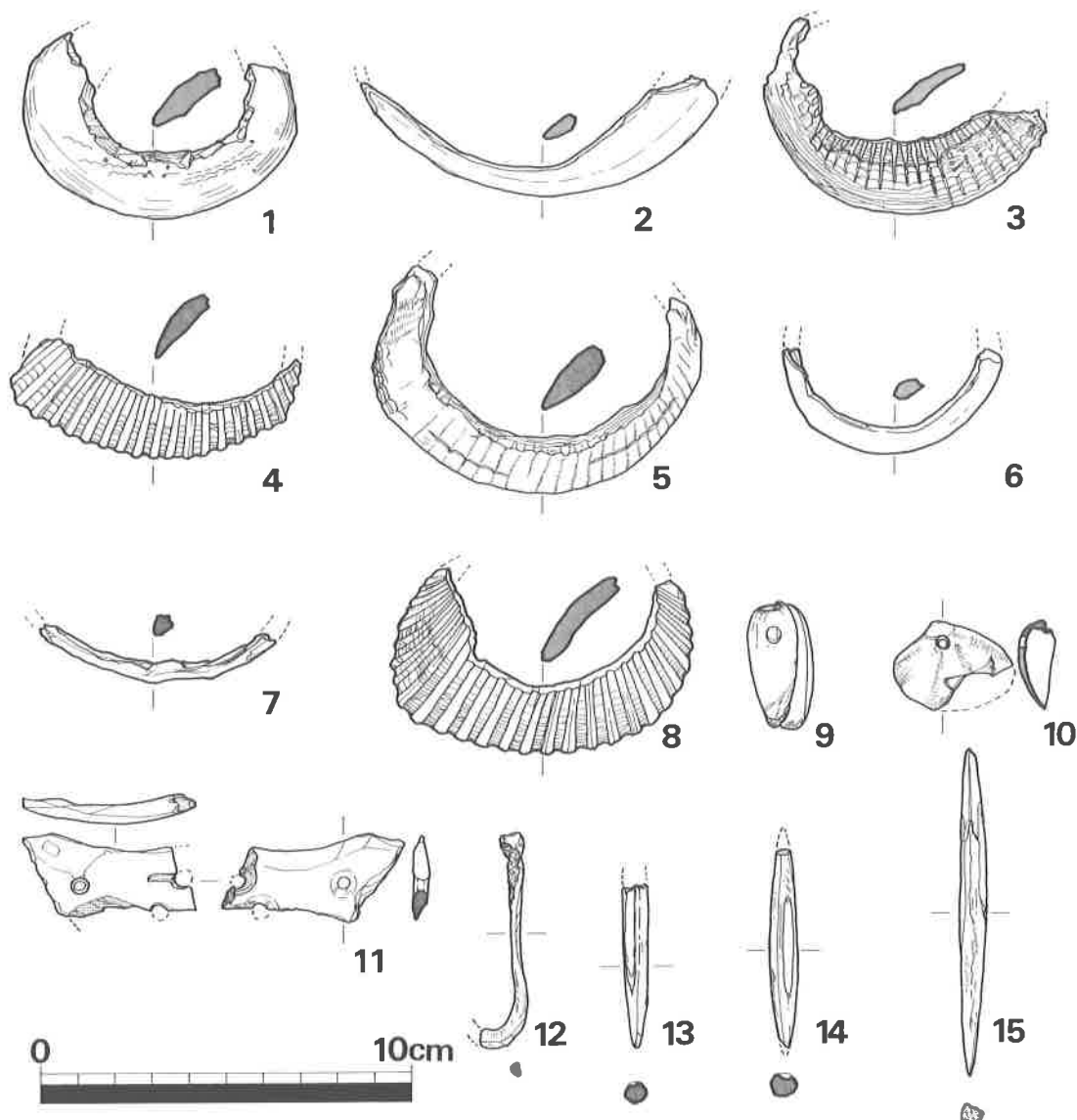


第44図 石銚、石鋸等実測図（縮尺1/1）

2. 骨角器 (第45図)

12は獣骨製の釣針である。基部に袈りを入れ、先端は欠損している。

13から15は刺突具である。13は2分の1ほど欠損しているのだろうか。復元するとほぼ15と同じ長さがあったと考えられる。14は先端を欠く。15はほぼ完形で、やはり削りによる整形である。いずれも表面を削り整形している。



第45図 貝製品、骨角器実測図 (縮尺1/2)

新町遺跡出土縄文土器観察表

種図	遺物No	文様・調整	器表色調	胎土	焼成	出土区	出土層位	備考
第19図	1	磨消縄文	淡茶褐色	密	良	B-0	1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	2	磨消縄文	淡茶白色	密	やや良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	3	磨消縄文	淡茶白色	密	良		1号土壇墓周辺	淡黄褐色砂
	4	磨消縄文	茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	淡黄褐色砂
	5	磨消縄文	茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	淡黄褐色砂
	6		淡茶白褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	7		淡茶白褐色	密	良		1号土壇墓周辺	淡黄褐色砂
	8	磨消縄文	淡茶白褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	9		淡茶白褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	10		淡茶白褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	11		淡茶白褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	12		淡茶白褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	13		淡茶白褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	14		淡茶褐色	若干砂粒含む	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	15		淡茶白褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	16	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良	B-1	1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	17	貝殻条痕	淡茶褐色	若干砂粒含む	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	18	貝殻条痕	淡茶褐色	若干砂粒含む	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	19		淡茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	20	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	21	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	22	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	23		淡白褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	24	貝殻条痕	暗褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	25	貝殻条痕	暗褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	26		淡白褐色	密	やや良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	27	貝殻条痕	暗褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	28	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	29	貝殻条痕	暗褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	30		暗褐色	密	良	C-0	1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	31	沈線文	赤褐色	雲母?含む	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
第20図	1	磨消縄文	淡赤褐色	密	良	B-1	1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	2	磨消縄文	淡赤褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	3		淡褐色	若干砂粒含む	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	4		暗赤褐色	少量雲母?含む	やや良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	5		茶白褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	6		茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	7		淡茶褐色	密	やや良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	8		淡茶褐色	やや密	やや良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	9	貝殻条痕	淡茶褐色	密	やや良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	10	貝殻条痕	茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	11	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	12	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	13	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	14	沈線文	赤褐色	雲母?	やや良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	15	磨消縄文	茶褐色	やや密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	16	磨消縄文	茶褐色	やや密	良	B-2	1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	17		淡茶白褐色	密	やや良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	18		淡茶褐色	密	やや良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	19		淡茶白褐色	やや密	やや良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
第21図	1	磨消縄文	淡茶白色	密	やや良	C-1	1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	2	磨消縄文	淡茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	3	磨消縄文	淡茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	4	磨消縄文	淡茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	5	磨消縄文	淡茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	6	磨消縄文	淡茶褐色	やや密	やや良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	7		淡茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	8	貝殻条痕	暗褐色	若干砂粒含む	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	9		淡茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	10		淡茶白色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	11		淡茶白色	やや密	やや良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	12	貝殻条痕	茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	13	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	14	貝殻条痕	暗赤褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	15	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	16	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	17	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	18	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	19	貝殻条痕	暗茶白色	密	良	C-2	1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
第22図	20	沈線文	暗赤褐色	雲母?含む	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	1	貝殻条痕	淡茶白色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	2	貝殻条痕	淡褐色	若干砂粒含む	やや良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	3	貝殻条痕	暗茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	4		淡褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	5		淡茶白色	密	やや良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	6		暗茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	7		淡茶白色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	8		淡茶白色	若干砂粒含む	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	9	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	10	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂
	11	貝殻条痕	淡茶白色	密	やや良		1号土壇墓周辺	暗茶褐色砂

第22図	12	貝殼窄腹	暗褐色	密	良	C-2	不明	刻目波状口縁
	13	貝殼窄腹	暗茶褐色	密	良		不明	刻目波状口縁
	14	貝殼窄腹	暗茶褐色	若干砂粒含む	良		不明	刻目波状口縁
	15	貝殼窄腹	淡茶白色	密	良		暗茶褐色砂	刻目波状口縁
	16	貝殼窄腹	淡茶褐色	密	良		貝層上面	刻目波状口縁
	17		淡茶白色	やや密	やや良		暗茶褐色砂	刻目口縁
	18		淡褐色	密	良		暗茶褐色砂	口縁 刻目
	19		淡茶褐色	若干砂粒含む	良		不明	横折線
	20	貝殼窄腹?	明茶褐色	密	良		暗茶褐色砂	口縁
	21		明茶褐色	密	良		暗茶褐色砂	刻目波状口縁 凹点文
第23図	22		暗褐色	密	良	C-2	暗茶褐色砂	口縁 刻目突帯
	23		淡茶褐色	やや密	やや良		暗茶褐色砂	口縁 刻目突帯
	24	磨消縄文	暗褐色	密	良		不明	口縁部
	25	磨消縄文	淡茶色	やや密	やや良		暗茶褐色砂上面	口縁部
	26	磨消縄文	淡褐色	密	良		不明	
	27	磨消縄文?	淡赤茶色	やや密	良		暗茶褐色砂	口縁部
	28	磨消縄文	淡茶色	やや密	良		暗茶褐色砂	
	29	磨消縄文	淡茶色	やや密	良		暗茶褐色砂	
	30		淡茶色	やや密	やや良		暗茶褐色砂上面	
	31	貝殼窄腹	淡赤茶色	若干砂粒含む	良		不明	
	32	貝殼窄腹	暗茶褐色	若干砂粒含む	良		貝層内	
	33	貝殼窄腹	暗褐色	密	良		不明	
	34	貝殼窄腹	淡茶褐色	やや密	良		不明	
	35	貝殼窄腹	淡茶褐色	密	良		不明	
	36	貝殼窄腹	暗茶褐色	やや密	良		不明	
	37	貝殼窄腹	淡茶褐色	若干砂粒含む	良		不明	
	38	貝殼窄腹	淡茶白褐色	やや密	良		暗茶褐色砂	
	39	貝殼窄腹	暗褐色	密	良		暗茶褐色砂	
	40	貝殼窄腹	淡茶褐色	若干砂粒含む	良		不明	
	41	貝殼窄腹	淡茶白褐色	密	良		不明	
	42	貝殼窄腹	淡茶白褐色	密	良		不明	
	43	貝殼窄腹	淡茶褐色	密	良		不明	
	44	貝殼窄腹	淡褐色	密	良		不明	
	45	貝殼窄腹	淡茶褐色	密	良		不明	底部
	46	貝殼窄腹	暗褐色	密	良		不明	
	47	貝殼窄腹	暗茶褐色	密	良		不明	底部
	48	貝殼窄腹	暗茶褐色	密	良		不明	底部
	49	貝殼窄腹	暗茶褐色	密	良		不明	底部
	50	沈線文	淡赤褐色	雲母?含む	やや良		不明	阿高式系
第24図	51	沈線文	淡茶色	やや密	やや良	C-2	暗茶褐色砂	
	52	貝殼窄腹	淡赤褐色	密	良		不明	
	53	貝殼窄腹	淡茶白色	密	良		不明	
	54	貝殼窄腹	淡茶色	密	良		不明	
	55	貝殼窄腹	淡茶色	密	良		不明	
	56	貝殼窄腹	淡褐色	若干砂粒含む	良		暗茶褐色砂	
	57	貝殼窄腹	淡褐色	密	良		不明	
	58	貝殼窄腹	淡褐色	密	良		不明	
	59	貝殼窄腹	淡褐色	密	良		暗茶褐色砂	
	60	貝殼窄腹	淡灰褐色	密	良		不明	
	61	貝殼窄腹	淡茶褐色	若干砂粒含む	良		不明	
	62	貝殼窄腹	暗茶赤褐色	密	良		不明	
	63	貝殼窄腹	淡茶褐色	密	良		貝層内	
第25図	1	磨消縄文	淡茶白色	密	良	C-3	淡茶褐色砂	
	2	磨消縄文	淡茶白色	密	良		淡茶褐色砂	
	3	貝殼窄腹	暗褐色	密	良		淡茶褐色砂	
	4	貝殼窄腹	暗褐色	若干砂粒含む	良		淡茶褐色砂	
	5	沈線文	淡赤茶褐色	雲母?少量含む	良		淡茶褐色砂	阿高式系
	6		淡茶色	密	良		貝層上面	刻目口縁
	7	貝殼窄腹	淡茶色	密	良		貝層上面	刻目口縁
	8	貝殼窄腹	淡茶色	密	良		貝層上面	口縁部 山型隆起?
	9	貝殼窄腹	淡茶色	密	良		貝層上面	口縁部
	10	貝殼窄腹	暗褐色	密	良		貝層上面	
	11	貝殼窄腹	暗赤茶色	若干砂粒含む	良		貝層上面	
	12	貝殼窄腹	淡茶赤色	密	良		貝層上面	
	13	貝殼窄腹	淡茶赤色	若干砂粒含む	良		貝層上面	
	14	貝殼窄腹	淡茶色	密	良		貝層上面	
第26図	15	貝殼窄腹	淡茶色	密	良	D-3	不明	刻目口縁
	16		淡茶白色	密	良		不明	口縁部
	17	磨消縄文	淡赤褐色	密	良		不明	口縁部
	18	磨消縄文	淡茶褐色	密	良		不明	口縁部
	19	貝殼窄腹	淡茶色	密	良		不明	口縁部 横V字沈文
	20		淡赤茶色	雲母?少量含む	良		不明	口縁部
	21	貝殼窄腹	淡茶色	密	良	C-3	不明	口縁部
	22	貝殼窄腹	淡褐色	密	良		貝層内(底)	口縁部
	23	磨消縄文	淡茶白褐色	密	良		貝層内(底)	口縁部
	24	貝殼窄腹	暗褐色	密	良		貝層内(底)	
	25	貝殼窄腹	淡茶褐色	密	良		貝層上面	
	26		茶褐色	密	良		貝層上面	
第27図	1	磨消縄文	淡茶褐色	若干砂粒含む	良	C-4	不明	把手状 円孔直
	2		暗褐色	密	良		淡茶褐色砂	中津式
	3	磨消縄文	暗茶褐色	密	良		淡茶褐色砂	口縁部 凹点文

第27図	4	鹿消縄文	暗茶褐色	密	良	淡茶褐色砂	口縁部
	5	同上	淡茶褐色	密	良	淡茶褐色砂	筒形突起?
	6	鹿消縄文	淡茶色	密	良	淡茶褐色砂	口縁部 山型隆起
	7		淡茶色	密	良	淡茶褐色砂	口縁部 内外ヘラズリ
	8		暗茶褐色	若干砂粒含む	良	淡茶褐色砂	口縁部 内外ナデ
	9	貝殻条痕	淡茶色	密	良	淡茶褐色砂	
	10	貝殻条痕	淡茶色	密	良	淡茶褐色砂	
	11	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良	淡茶褐色砂	
	12	貝殻条痕	暗茶色	密	良	淡茶褐色砂	口縁部
	13	貝殻条痕	淡茶色	密	良	淡茶褐色砂	
	14	貝殻条痕	茶褐色	密	良	淡茶褐色砂	
	15	貝殻条痕	淡茶色	密	良	淡茶褐色砂	
	16	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良	淡茶褐色砂	
	17	貝殻条痕	淡茶色	密	良	淡茶褐色砂	
	18		淡褐色	密	良	淡茶褐色砂	
	19	鹿消縄文	淡褐色	密	良	貝層内 (上面)	口縁部 刻目 山型隆起?
	20	鹿消縄文	淡茶色	密	良	貝層内 (上面)	口縁部
	21		淡茶褐色	雲母? 微量に含む	良	貝層内 (上面)	押点文 口縁部付近?
	22		淡茶褐色	密	良	貝層内 (上面)	沈線文 口縁部付近?
	23		暗茶色	密	良	貝層内 (上面)	口縁部 刻目
	24	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良	貝層内 (上面)	
	25	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良	貝層内 (上面)	
	26	貝殻条痕	暗茶褐色	若干砂粒含む	良	貝層内 (上面)	
	27		暗茶褐色	雲母? 微量に含む	やや良	貝層内 (上面)	口縁部 沈線文 阿波式系?
第28図	28		淡茶色	密	良	貝層内 (上面)	口縁部 刻目 刺突文
	29		暗赤褐色	若干の砂粒と雲母	やや良	貝層内 (上面)	31, 35, 39と同一個体か?
	30		淡茶色	密	良	貝層内 (上面)	刻目波状口縁
	31		暗赤褐色	若干の砂粒と雲母	やや良	貝層内 (上面)	口縁部 山型隆起
	32		淡茶色	密	良	貝層内 (上面)	口縁部
	33	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良	貝層内 (上面)	34と接合
	34	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良	貝層内 (上面)	底部 33と接合
	35		暗赤褐色	若干の砂粒と雲母	やや良	貝層内 (上面)	
	36	貝殻条痕	暗茶色	密	良	貝層内 (上面)	
	37	沈線文	淡赤褐色	密	良	貝層内 (上面)	阿波式系
	38		淡茶色	密	良	淡黄褐色砂	底部
	39		暗赤褐色	若干の砂粒と雲母	やや良	貝層内 (上面)	
	40		淡茶褐色	密	良	淡黄褐色砂	底部
	41		淡茶褐色	密	良	貝層内 (上面)	底部
	42	鹿消縄文	淡茶色	若干砂粒含む	良	暗茶褐色砂	口縁部 中津式
第29図	1	鹿消縄文	暗褐色	密	良	暗茶褐色土	内面ヘラミカキ
	2	鹿消縄文	暗茶色	密	良	暗茶褐色土	
	3		淡茶褐色	密	良	暗茶褐色土	口縁部 凹点文
	4		茶褐色	密	良	暗茶褐色土	波状口縁
	5		茶褐色	密	良	暗茶褐色土	口縁部
	6	貝殻条痕	黒斑部	密	良	暗茶褐色土	
	7	鹿消縄文?	茶褐色	密	良	暗茶褐色土	
	8		淡赤褐色	雲母微量に含む	良	暗茶褐色土	阿波式系
	9		淡茶色	密	良	暗茶褐色砂質土	波状口縁
	10	貝殻条痕	淡褐色	密	良	暗茶褐色砂質土	口縁部
	11	貝殻条痕	淡褐色	密	良	暗茶褐色砂質土	口縁部 刻目
	12	貝殻条痕	淡茶色	密	良	暗茶褐色砂質土	
	13	貝殻条痕	淡茶色	密	良	暗茶褐色砂質土	
	14	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良	暗茶褐色砂質土	
	15	貝殻条痕	淡茶褐色	若干砂粒含む	良	暗茶褐色砂質土	
	16	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良	暗茶褐色砂質土	
	17	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良	暗茶褐色砂質土	底部
第30図	1	鹿消縄文	茶褐色	密	良	暗茶褐色砂 (よこれ)	
	2	鹿消縄文	淡茶褐色	密	やや良	貝層内側 暗黄褐色砂質土	口縁部
	3	鹿消縄文	淡赤茶褐色	密	良	貝層内側 暗黄褐色砂質土	福田K II式
	4		茶褐色	密	良	暗茶褐色砂質土	口縁部 刻目
	5	鹿消縄文	茶褐色	密	良	暗茶褐色砂質土	
	6		淡茶色	密	良	暗茶褐色砂質土	刻目口縁 凹点文
	7		淡茶色	若干砂粒含む	良	暗茶褐色砂質土	口縁部 凹点文
	8		暗褐色	密	良	暗茶褐色砂質土	口縁部
	9	貝殻条痕	淡茶色	密	良	暗茶褐色砂質土	山型隆起口縁
	10	貝殻条痕	淡茶色	密	良	暗黄褐色砂 (よこれ)	Y字口縁
	11		淡茶褐色	密	良	暗茶褐色砂質土	波状口縁
	12		淡茶白色	密	やや良	暗黄褐色砂 (よこれ)	口縁部
	13		暗茶褐色	密	良	暗黄褐色砂 (よこれ)	刻目口縁
	14	貝殻条痕	暗茶褐色	若干砂粒含む	良	暗茶褐色砂質土	
	15	貝殻条痕	暗茶褐色	若干砂粒含む	良	暗茶褐色砂質土	
	16	貝殻条痕	暗茶褐色	若干砂粒含む	良	暗茶褐色砂質土	
	17	貝殻条痕	茶褐色	若干砂粒含む	良	暗茶褐色砂質土	
	18	貝殻条痕	暗茶褐色	若干砂粒含む	良	暗茶褐色砂質土	
	19	貝殻条痕	暗茶褐色	若干砂粒含む	良	暗茶褐色砂質土	
	20	貝殻条痕	暗茶褐色	若干砂粒含む	良	暗茶褐色砂質土	
	21	貝殻条痕	暗茶褐色	若干砂粒含む	良	暗茶褐色砂質土	
	22	貝殻条痕	暗茶褐色	若干砂粒含む	良	暗茶褐色砂質土	
	23		淡褐色	密	良	暗茶褐色砂質土	把手状装飾? 刻目
	24	貝殻条痕	暗茶褐色	密	良	暗茶褐色砂質土	内面貝殻条痕
	25		茶褐色	若干砂粒含む	良	暗茶褐色砂質土	把手状? 円孔痕
第31図	26	鹿消縄文	淡茶色	密	良	トレンチ内 暗茶褐色土	口縁部
	27	鹿消縄文	淡褐色	密	良	トレンチ内 暗茶褐色土	

第31図	26	磨消縄文	淡褐色	密	良	D-3	暗茶褐色土	
	27	磨消縄文	茶褐色	密	良		暗茶褐色土	
	28		淡赤茶色	雲母含む	良		暗茶褐色土	阿高式系
	29	貝殻条痕	淡褐色	密	良		暗茶褐色土	刻目
	30	貝殻条痕	淡褐色	密	良		暗茶褐色土	刻目波状口縁
	31	貝殻条痕	淡褐色	密	良		暗茶褐色土	口縁部
	32	磨消縄文	淡褐色	密	良		貝層内中層	口縁部 刻目
	33	磨消縄文	淡褐色	密	良		貝層内中層	
	34	磨消縄文	淡褐色	密	良		貝層内中層	
	35	貝殻条痕	茶褐色	密	良		貝層内中層	条痕の上に縄文 38と同一個体?
	36	貝殻条痕	茶褐色	密	良		貝層内中層	条痕の上に縄文
	37	磨消縄文	淡褐色	密	良		貝層内	
	38	磨消縄文	淡褐色	密	良		貝層内	
	39	磨消縄文	淡褐色	密	良		貝層内	口縁部 山型隆起 内面ヘラミガキ
	40	磨消縄文	淡茶色	密	良		貝層内	
	41	磨消縄文	淡褐色	密	良		貝層内	
	42	磨消縄文	淡茶褐色	密	良		貝層内	口縁部
	43	磨消縄文	淡茶褐色	密	良		貝層内	口縁部 隆起
	44	磨消縄文	淡茶色	密	良		貝層内	口縁部 中津式
	45	磨消縄文	淡茶褐色	密	良		貝層内	口縁部 隆起
	46	磨消縄文	淡茶褐色	若干砂粒含む	良		貝層内	糸目直? 沈線文
	47		淡茶色	密	良		貝層内	口縁部 山型隆起 沈線文
	48	磨消縄文	淡茶褐色	密	良		貝層内	口縁部
	49	磨消縄文	淡茶褐色	密	良		貝層内	
	50	磨消縄文	茶褐色	密	良		貝層内	
	51	磨消縄文	淡茶褐色	わずかに砂粒含む	良		貝層内	刺突文 菱蔭部?
	52		淡茶褐色	密	良		貝層内	口縁部 刻目 刺突文
	53		淡茶褐色	密	良		貝層内	口縁部 刻目
	54		淡茶褐色	密	良		貝層内	口縁部 刻目
	55		淡茶褐色	密	良		貝層内	口縁部 外面ヘラケズリ
	56		淡茶褐色	密	良		貝層内	刻目波状口縁
第32図	57	貝殻条痕	茶褐色	密	良	D-3	貝層内	口縁部
	58	貝殻条痕	茶褐色	密	良		貝層内	口縁部
	59	貝殻条痕	淡茶褐色	若干砂粒含む	良		貝層内	口縁部
	60	貝殻条痕	茶褐色	密	良		貝層内	口縁部
	61	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		貝層内	波状口縁
	62		淡茶色	密	良		貝層内	口縁部 外面ヘラケズリ
	63	貝殻条痕	茶褐色	密	良		貝層内	刻目口縁
	64	貝殻条痕	茶褐色	密	良		貝層内	口縁部
	65	貝殻条痕	明茶色	若干砂粒含む	良		貝層内	口縁部
	66		淡茶色	密	良		貝層内	刻目口縁 内外ナデ
	67	貝殻条痕	淡茶色	密	良		貝層内	刻目口縁
	68		淡茶色	密	良		貝層内	外面ヘラケズリ?
	69		淡赤褐色	雲母含む	良		貝層内	阿高式系?
	70	貝殻条痕	淡茶色	密	良		貝層内中層	条痕の上に縄文
	71	貝殻条痕	淡茶色	密	良		貝層内中層	
	72	貝殻条痕	淡茶色	密	良		貝層内中層	
	73	磨消縄文	茶褐色	微量の雲母含む	良		下層砂	
	74	磨消縄文	赤茶褐色	密	良		下層砂	口縁部
	75	磨消縄文	赤茶褐色	密	良		下層砂	口縁部 山型隆起?
	76		暗褐色	密	やや良		下層砂	刻目口縁 内外ナデ
第33図	77	貝殻条痕	淡茶色	密	良	D-4	下層砂	
	78	貝殻条痕	茶褐色	密	良		下層砂	
	79	貝殻条痕	茶褐色	密	良		下層砂	
	80	貝殻条痕	茶褐色	密	良		下層砂	
	81	貝殻条痕	茶褐色	密	良		下層砂	
	82		淡赤褐色	若干雲母含む	良		下層砂	
	83	貝殻条痕	茶褐色	密	やや良		下層砂	阿高式系?
	1	磨消縄文	茶白色	密	やや良	D-4	貝層直上	
	2	磨消縄文	茶白色	密	良		貝層直上	
	3	磨消縄文	茶白色	密	良		貝層直上	
	4	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		貝層直上	口縁部へくびれ
	5		淡茶褐色	密	良		貝層直上	口縁部 山型隆起 沈線文
	6		淡茶褐色	密	良		貝層直上	刻目波状口縁
	7	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		貝層直上	刻目口縁
	8	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		貝層直上	刻目口縁
	9		淡茶褐色	密	良		暗茶褐色砂質土	
	10	貝殻条痕	茶白色	密	良		貝層直上	
	11	貝殻条痕	茶褐色	密	良		貝層直上	
	12	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		貝層直上	
	13		淡茶褐色	若干砂粒含む	良		暗茶褐色砂	底部
	14		淡茶褐色	密	良		暗茶褐色砂	底部
	15	貝殻条痕	暗褐色	密	良		暗茶褐色砂	
	16	磨消縄文	淡茶褐色	密	良		暗茶褐色砂	口縁部 刻目
	17	貝殻条痕	茶白色	密	良		暗茶褐色砂	口縁部 刻目
	18	沈線文	赤褐色	雲母あまり入らず	やや良		暗茶褐色砂	口縁部 阿高式系?
第33図	19	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良	D-5	不明	
	20	貝殻条痕	淡赤褐色	密	良		不明	
	21	貝殻条痕	淡茶褐色	若干砂粒含む	良		不明	
	22	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		不明	
	23	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		不明	
	24	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		不明	
	25	貝殻条痕	淡茶褐色	密	良		不明	

第34図	26	貝殻断面	淡茶褐色	密	良	D-5	不明	
	1	貝殻断面	淡茶褐色	密	良	B-3	貝層上面	口縁部 凹線文
	2	貝殻断面	淡茶褐色	密	良		貝層上面	
	3	貝殻断面	淡茶褐色	密	良		貝層上面	
	4	貝殻断面	淡茶褐色	密	良		貝層上面	
	5	貝殻断面	淡茶褐色	密	良		貝層上面	
	6		茶褐色	密	良	B-4	淡黄褐色砂質土	口縁部 刻目
	7		淡茶褐色	密	良		淡黄褐色砂質土	刻目口縁部 刻目
	8	縄文	淡茶褐色	密	良		淡黄褐色砂質土	刻目口縁部 刻目 縄文
	9	刻目突起	淡茶白色	密	良		明黄褐色砂 (よこれ)	筒形突起?
	10	磨消縄文	淡茶褐色	密	良		貝層内の落ち込み	口縁部
	11	磨消縄文	淡茶褐色	密	良		貝層内の落ち込み	刻目口縁部
	12	貝殻断面	淡茶褐色	密	良		貝層内の落ち込み	口縁部
	13	貝殻断面	淡茶褐色	微量の砂粒含む	良		淡黄褐色砂質土	口縁部
	14		淡茶褐色	密	良		明黄褐色砂 (よこれ)	口縁部 外面ナデ 内面貝殻断面
	15		淡茶褐色	密	良		明黄褐色砂 (よこれ)	刻目口縁部 外面ナデ?
第35図	16	貝殻断面	淡茶褐色	密	良	C-5	明黄褐色砂 (よこれ)	口縁部
	17		淡茶褐色	密	良		明黄褐色砂 (よこれ)	口縁部
	18		淡茶褐色	密	良		貝層内の落ち込み	口縁部 突起 内面貝殻断面
	19		淡茶褐色	密	良		暗黄褐色砂質土	突起部? 粘土紐ねじり合せ
	20		淡茶白色	密	良		明黄褐色砂 (よこれ)	刻目口縁部 内外面ナデ
	21		淡茶白色	密	良	C-6	淡黄褐色砂	筒形突起? 縄文 沈線文
	22	貝殻断面	淡茶褐色	密	良		淡黄白色砂	筒形突起 刻目 ヘラミガキ
	23	貝殻断面	淡茶褐色	密	良		淡黄褐色砂	口縁部
	24	貝殻断面	淡茶褐色	密	良		淡黄褐色砂	27と接合
	25	貝殻断面	淡茶褐色	密	良		淡黄褐色砂	
第36図	26	貝殻断面	淡茶褐色	密	良	E-3	淡黄褐色砂	24と接合
	27	貝殻断面	淡茶褐色	密	良		淡黄褐色砂	口縁部
	28	貝殻断面	淡茶褐色	密	良		淡黄褐色砂	沈線
	29		淡茶褐色	密	良		貝層直上	口縁部
	1	貝殻断面	淡茶褐色	密	良	E-5	貝層直上	
	2	貝殻断面	淡茶褐色	密	良		貝層直上	
	3	磨消縄文	淡茶褐色	密	良		暗茶褐色砂質土 (砂層上)	口縁部
	4	磨消縄文	淡茶褐色	密	良		暗茶褐色砂質土 (砂層上)	刻目波状口縁 凹点文
	5		淡茶褐色	密	良		暗茶褐色砂質土 (砂層上)	押点文
第37図	6		淡茶褐色	密	良	包含層	暗茶褐色砂質土 (砂層上)	口縁部 凹線文
	7		淡茶褐色	密	良		表土II	口縁部
	1	磨消縄文	茶褐色	密	良		明黄褐色砂上面	
	2	磨消縄文	茶褐色	密	良		明黄褐色砂上面	
	3	磨消縄文	暗茶褐色	密	良		調査区壁面	
第38図	4	磨消縄文	赤褐色	密	良	包含層	表土II	口縁部 凹点文
	5		茶褐色	若干砂粒含む	良		表土II	
	6	磨消縄文	赤褐色	密	良		不明	口縁部 刺突文
	7		茶褐色	密	良		不明	口縁部 山型突起
	8	貝殻断面	暗茶褐色	若干砂粒含む	良		明黄褐色砂上面	外面ナデ 内面貝殻断面
第39図	9		赤褐色	密	良	包含層	表土II	凹点文
	10		茶褐色	密	やや良		明黄褐色砂上面	凹点文
	11	貝殻断面	茶褐色	密	やや良		表土II	口縁部
	12	沈線文?	淡茶褐色	密	良		表土II	阿高式系
	13		淡茶褐色	微量に雲母含む	良		表土II	口縁部 阿高式系?
第40図	1		茶褐色	若干砂粒含む	やや良	C-2	不明	用途不明土製品
	2	磨消縄文	茶褐色	密	良	C-3	貝層上面	紡錘車
	3		淡茶褐色	密	良	B-1	暗黄褐色砂	把手?
	4	貝殻断面	茶褐色	密	良	不明	不明	紡錘車
	5		茶褐色	密	やや良	包含層	表土II	紡錘車

新町遺跡出土縄文石器観察表

黒曜石…OB 安山岩…AN ()内は現存数値

挿図	遺物No.	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	比率(長/幅)	材質	調査番号	出土層位	備考
第38図	1	30.5	13.0	4.0	0.9	2.35	OB	4	IV02暗黄褐色砂	磨削面 挟有
	2	31.5	17.5	3.5	1.0	1.80	OB	4	IV02暗黄褐色砂	磨削面 挟有
	3	28.0	16.2	4.1	0.8	1.73	OB	5	中央部貝層内	磨削面 挟有
	4	27.5	13.5	2.5	0.6	2.04	OB	5	表土下暗茶褐色土	磨削面
	5	26.0	16.5	3.5	0.7	1.52	OB	5	C-3	磨削面 挟有
	6	(26.1)	16.5	3.0	(0.9)		AN	5	中央トレンチ暗茶褐色土	磨削面 挟有 先端欠損
	7	(19.5)	(11.8)	3.0	(0.4)		OB	5	拡張区II	磨削面 基部欠損
	8	(24.5)	(10.0)	2.5	(0.5)		OB	4	IV02暗黄褐色砂	磨削面 挟有 先端・片脚欠損
	9	24.0	10.8	2.5	0.3	2.22	OB	4	IV02暗黄褐色砂	磨削面 挟有
	10	22.0	11.0	2.5	0.2	2.00	OB	5	表土下暗茶褐色土	磨削面 挟有
	11	22.3	(11.0)	3.0	(0.3)		OB	4	IV02暗茶褐色砂土	磨削面 挟有
	12	(23.0)	14.7	4.2	(0.6)		OB	4	IV02土坑4	磨削面 挟有

第39図	13	(22.5)	(15.0)	4.0	(0.6)		OB	5	表土	鋤齒跡 先端・脚一部欠損
	14	(20.0)	(9.3)	3.2	(0.3)		OB	4	IV02東半部	鋤齒跡 挟有 半失
	15	(16.0)	(10.5)	3.0	(0.4)		OB	5	表土	鋤齒跡 先端・片脚欠損
	16	24.2	16.7	5.8	0.8	1.45	OB	5	中央部貝層内	鋤齒跡 挟有
	17	18.5	17.0	3.8	0.5		OB	5	小型鋤齒跡	挟有
	18	(19.2)	17.2	4.0	(0.7)		OB	5	拡張区II暗茶褐色土	鋤齒跡 挟有
	19	(17.5)	16.5	3.0	(0.4)		OB	5	表土	鋤齒跡 先端欠損
	20	22.0	18.5	3.0	0.6	1.19	OB	5	中央部暗茶褐色砂土	鋤齒跡 挟有
	21	(22.0)	15.0	4.0	(0.9)		OB	5	拡張区	鋤齒跡 先端欠損
	22	23.0	(13.0)	3.5	(0.5)		OB	5	中央部貝層内	鋤齒跡 先端・片脚欠損
第40図	23	(16.5)	(14.0)	2.4	(0.4)		OB	5	中央部貝層内	鋤齒跡 挟有 先端・片脚欠損
	24	(17.0)	(12.5)	3.0	(0.3)		OB	5	IV02暗茶褐色砂	小型鋤齒跡 先端・片脚欠損
	25	16.0	(13.5)	2.0	(0.1)		OB	5	暗茶褐色土	小型鋤齒跡 挟有
	26	22.5	17.0	3.2	0.7	1.32	OB	5	中央部貝層内	鋤齒跡 挟有
	27	19.8	14.0	2.0	0.4	1.41	OB	5	IV02暗茶褐色砂	鋤齒跡 若干挟有
	28	(17.5)	(10.5)	4.0	(0.4)		AN	4	IV02土坑2	鋤齒跡 両脚欠損
	29	18.5	9.5	3.0	0.2	1.95	OB	5	表土	鋤齒跡
	30	21.0	17.0	4.3	0.9	1.24	OB	5	淡茶褐色砂	鋤 挟有
	31	(19.8)	15.0	3.8	(0.6)		OB	4	IV02暗茶褐色砂土	鋤 挟有
	32	(17.0)	15.0	2.0	(0.4)		OB	5	中央トレンチ暗茶褐色土	小型鋤齒跡 挟有 先端欠損
第41図	33	19.0	14.0	7.0	1.2	1.36	AN	4	IV02拡張区II表土	鋤 挟有
	34	19.8	(14.9)	3.7	(0.4)		OB	5	中央部	鋤 挟有 裏面剥片
	35	20.1	17.5	4.5	1.9	1.15	OB	5	暗茶褐色砂土	鋤? 未製品? 挟有
	36	(20.5)	(18.5)	(5.3)	(1.0)		OB	5	北辺暗茶褐色土	鋤 挟有
	37	25.0	(16.5)	3.0	(0.6)		OB	5	暗茶褐色土	鋤 挟有 片脚欠損
	38	17.0	13.0	3.0	0.4	1.31	OB	5	北辺暗茶褐色土	小型鋤齒跡 挟有
	39	20.0	13.0	4.5	0.5	1.54	OB	5	出土地点不明	鋤 挟有
	40	19.5	(11.0)	2.0	(0.2)		OB	4	IV02土坑2	鋤 挟有
	41	(19.5)	(13.0)	2.0	(0.5)		OB	4	IV02暗黄褐色砂	鋤 挟有 先端・両脚欠損
	42	23.0	(12.5)	4.5	(0.6)		OB	5	縄文土器溜り	鋤 挟有
第42図	43	24.0	(13.5)	3.0	(0.7)		OB	5	暗茶褐色土	鋤 基部欠損
	44	24.5	14.0	5.5	1.0	1.75	OB	5	C-3	鋤
	45	23.5	16.0	4.0	0.7	1.47	OB	4	IV02暗黄褐色砂	鋤 挟有
	46	20.5	10.0	3.3	0.3	2.05	OB	4	IV02暗黄褐色砂	鋤
	47	(18.0)	13.0	3.1	(0.6)		OB	4	IV02西 石2	鋤 若干挟有 裏面剥片
	48	(14.5)	10.0	2.0	(0.3)		OB	4	IV02暗黄褐色砂	小型鋤 先端欠損
	49	20.0	12.0	2.0	0.3	1.67	OB	5	C-3	鋤 挟有
	50	24.0	13.0	3.5	1.2	1.85	OB	5	IV02暗茶褐色砂	鋤
	51	19.4	(14.5)	4.0	(0.7)		OB	4	IV02拡張区II表土	鋤 基部・片脚欠損
	52	(18.0)	12.5	3.0	(0.3)		AN	4	IV02 石3	小型鋤 挟有
第43図	53	(13.0)	(8.9)	3.0	(0.3)		OB	4	IV02暗茶褐色砂土	鋤 挟有 先端・基部欠損
	54	25.5	15.5	3.0	1.0	1.65	OB	5	D-4 暗茶褐色砂土	鋤
	55	28.0	15.4	4.0	1.3	1.82	OB	5	C-6 淡黄褐色砂	鋤
	56	(24.5)	15.1	4.0	(0.5)		OB	5	暗茶褐色砂土	鋤 先端欠損
	57	22.0	14.0	4.0	1.0	1.57	OB	5	中央部貝層内	鋤
	58	20.0	14.0	2.5	0.4	1.43	OB	5	D-4貝層直上	鋤
	59	23.5	14.5	4.0	0.9	1.62	OB	5	暗茶褐色砂土	鋤
	60	20.0	12.5	3.5	0.6	1.60	OB	4	IV02暗黄褐色砂	鋤
	61	(21.5)	18.0	4.0	(0.9)		OB	5	出土地点不明	鋤
	62	22.5	(15.2)	3.1	(0.8)		OB	5	拡張区II暗茶褐色土	鋤 基部欠損
第44図	63	(19.4)	17.5	4.0	(1.5)		OB	5	暗茶褐色土	鋤 先端欠損
	64	(23.1)	15.0	4.1	(1.0)		OB	5	出土地点不明	削器? 鋤?
	65	17.3	18.0	4.0	0.7	0.96	OB	5	C-3	鋤
	66	(17.3)	(14.0)	3.5	(0.6)		OB	5	D-4貝層直上	鋤 先端・基部・片脚欠損
	67	19.5	10.0	4.0	0.5	1.95	OB	5	出土地点不明	小型鋤
	68	31.0	16.5	5.0	2.1	1.88	AN	5	出土地点不明	鋤
	69	(21.0)	15.9	4.5	(1.4)		AN	5	中央部貝層内	鋤 先端欠損
	70	33.0	23.5	4.2	2.7	1.40	OB	4	暗黄褐色砂	鋤
	71	33.2	(18.0)	4.2	(1.7)		AN	5	出土地点不明	鋤
	72	(35.8)	15.9	5.5	(2.6)		AN	5	中央部	鋤
第45図	73	22.0	15.0	2.0	0.5	1.47	OB	5	表土	剥片鋤 挟有
	74	20.1	10.5	2.1	0.2	1.91	OB	4	IV02大土坑1	剥片鋤
	75	17.3	11.5	2.5	0.3	1.50	OB	4	IV02拡張区II表土	剥片鋤
	76	17.2	(12.5)	2.0	(0.2)		OB	5	表土下暗茶褐色土	剥片鋤? 剥一部欠損
	77	(17.0)	(11.0)	(3.0)	(0.4)		OB	5	表土下暗茶褐色土	剥片鋤 先端部のみ
	78	(15.0)	13.5	3.0	(0.4)		OB	5	1号人骨埋内	剥片鋤 挟有 先端欠損
	79	19.0	14.0	2.5	0.7	1.36	OB	4	IV02排土	剥片鋤歯跡 挟有
	80	26.0	15.5	5.5	1.7	1.68	OB	5	C-4 淡黄褐色砂	掻器?
	81	23.0	16.5	3.1	0.8	1.39	OB	5	D-3	掻器? 未製品?
	82	(22.0)	16.0	3.8	(1.7)		OB	4	IV02暗灰茶色土	鋤 先端欠損
第46図	83	16.5	2.3	2.7	0.4		OB	5	出土地点不明	掻器?
	84				1.8		OB	4	IV02暗灰茶色土	掻器? 剥器?
	85	(21.0)	18.0	4.0	(1.4)		OB	4	IV02暗灰茶色土	掻器? 剥器? 先端欠損
	86	(21.5)	22.0	5.8	(2.2)		OB	4	IV02拡張区II表土	掻器? 剥器? 先端欠損
	87	21.2	47.0	7.0	5.5		OB	5	中央部	掻器
	88	28.0	9.0	3.0	0.8		OB	4	IV02排土	石鏝
	89	(32.5)	(16.5)	(6.2)	(2.5)		AN	4	IV02暗茶褐色砂土	石 先端部のみ
	90	(42.1)	(14.5)	(8.1)	(3.1)		AN	5	拡張区II暗茶褐色土	石 先端部のみ
	91	(46.0)	27.9	15.2	(14.7)		OB	4	IV02暗灰茶色土	石 先端部欠損
	92	14.8	25.5	3.0	0.8		OB	5	明黄褐色砂	石 未製品?
第47図	93	25.5	18.0	4.5	1.9		OB	5	中央部貝層内上層	石鏝
	94	23.0	18.2	5.0	1.6		OB	5	中央部貝層内上層	石鏝
	95	24.0	14.7	3.0	0.9		OB	5	中央部貝層内	石鏝
	96	41.0	16.1	5.8	2.5		OB	5	中央部暗茶褐色砂土	石鏝
	97	38.0	17.0	5.0	2.7		OB	4	IV02暗黄褐色砂	石鏝

Ⅲ. 結語

この第5次調査は、当初から第4次調査の成果であった縄文時代の貝塚の確認を目的としていた。その結果、貝塚内から土壙墓や縄文人骨等が検出されたことは予想以上の成果であった。この報告に掲載できなかった事項も含め、まとめを述べる。

1. 貝塚について

貝塚は旧砂丘の落ち込みを利用している。貝の分布を見てみると、砂丘の谷間は北から南東方向に緩やかな弧を描いている。貝の堆積が厚いところは北側の方で、南東側は堆積が薄くなる状況を示す。第4次調査のIV-01トレンチでは縄文遺構はあるが貝の堆積は認められないことから、この谷間が途中で終わるか、あるいは東西のどちらかに曲がる可能性がある。

貝の堆積で最も厚い箇所でも30cmから40cmであることから、上部が削平されている可能性はある。しかし、貝の捨て方に特徴があり、同種のものを同じ所に捨てる傾向が見られる。

また、比較的小さな貝のブロックがいくつも見受けられる。これは1回の食事が出る殻を土器等に入れて、そのまま捨てたように見える。推察の域を出ないが、これを考える事は今後の課題であろう。

いずれにしてもこのような捨て方が目立つので、今回調査した箇所は比較的短時間でできた貝塚であることが考えられる。

2. 土器と貝塚の時期について

出土した縄文土器は多数あり、その大半は貝層内からの出土であった。層位の確認とともに土器の取り上げをしなければならないところ、あいにくの雨と湧水によりトレンチの崩壊が続いた事は惜しいことである。

出土土器を概観すると、目立つのは磨消縄文と貝殻条痕のものである。磨消縄文土器はその文様から中津式が多いようである。これに続く福田KⅡ式も見受けられるが、点数としては少ない。

阿高式系土器は意外に多く、ほとんどの主要グリッドから出土している。しかし、太い沈線や文様からむしろ南福寺式に近いものとした方がいいようである。また、口縁部に凹点文を持つ同種のものは、後期土器の特徴を持つものとして認識されていて、これらの土器は中津式に共伴するものとして捉えてよい。

後期中葉にあたる鐘崎式や北久根山式とも思われる土器もあるが、これは数点である。

貝塚そのものの残りは悪いが、貝層上面から底部までこれらの土器が捨てられていて、形成された時期は縄文時代後期初頭と思われる。

3. 土墳墓について

今回の調査で3基の土墳墓が検出されたが、精査したのは1基であとは位置確認のみである。精査した土墳墓1は、貝輪装着の縄文人骨が埋葬されていて、貴重な資料となった。

また、副葬されていた土器底部に木の葉の圧痕があったことは非常に珍しい例である。今後の資料の増加を待ちたい。

4. その他の遺物について

この報告には資料の整理が間に合わず、割愛した遺物が多数ある。特に自然遺物系は縄文時代の文化を考えるうえで欠かせないものではあるが、これは別の機会に譲りたいと思う。

巻末ながら特に記しておきたいものに糞石がある。C-3区とD-3区から数点出土している。この存在に気が付いたのは、調査区が水没した時に水面に浮かんでいたのを見つけた時点で、以後留意しながら調査をすすめると貝層内に埋没しているのが見つかった。

分析はしていないので詳細は不明であるが、糞石は縄文時代の環境を復元するのに最も多くの情報を持っているものなので、重要な資料といえる。

また、動物遺存体も多数あり、魚介類では貝の他に多数の魚類の骨やウニの棘等が認められる。哺乳類では数頭のイノシシと思われる頭骨や、種は不明だが肋骨や各部位が多数出土している。クジラの椎体骨の一部もあり、これは土器製作の台として使用されることで知られる。

この貝塚からも土器底部に椎体骨の圧痕があるものが多数あり、やはり土器製作時の道具として利用した可能性は高い。

最後に、貝塚本体をなす貝および各種貝製品については、内湾に生息するものが多く、当時の新町一帯の環境を物語っていると言えよう。

今回の調査での出土遺物は、すべて同町所在の天神山貝塚の出土品と共通する。遺物は縄文時代後期初頭のものが大多数で、これも天神山貝塚と時期を同じにするものである。

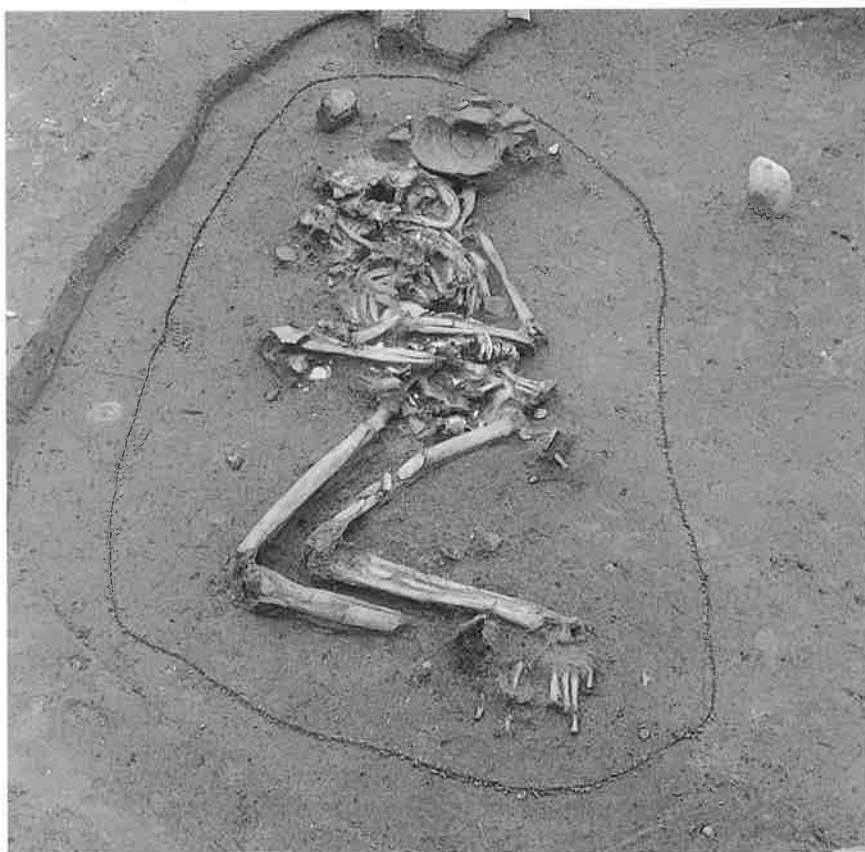
志摩町だけでなく、糸島郡内でも縄文貝塚の調査は珍しく、それだけに貴重な遺跡である。

また、縄文人骨の出土は縄文人の形質人類学的問題のみならず、同じ地域から出土している新町遺跡弥生早期人骨とどういう関わりがあるかを考える上で非常に興味深いものである。

この貝塚の調査の成果により、付近に縄文時代の遺構が広がる可能性も高くなり、将来の調査に期待し、まとめに変える。

図 版

註 遺物写真中の前番号は本文中挿図番号、後番号は挿図中の遺物番号を表す。
また、図版 8 b と図版 9 a のみ挿図番号を略した。



a. 1号縄文人骨検出状況（東から）



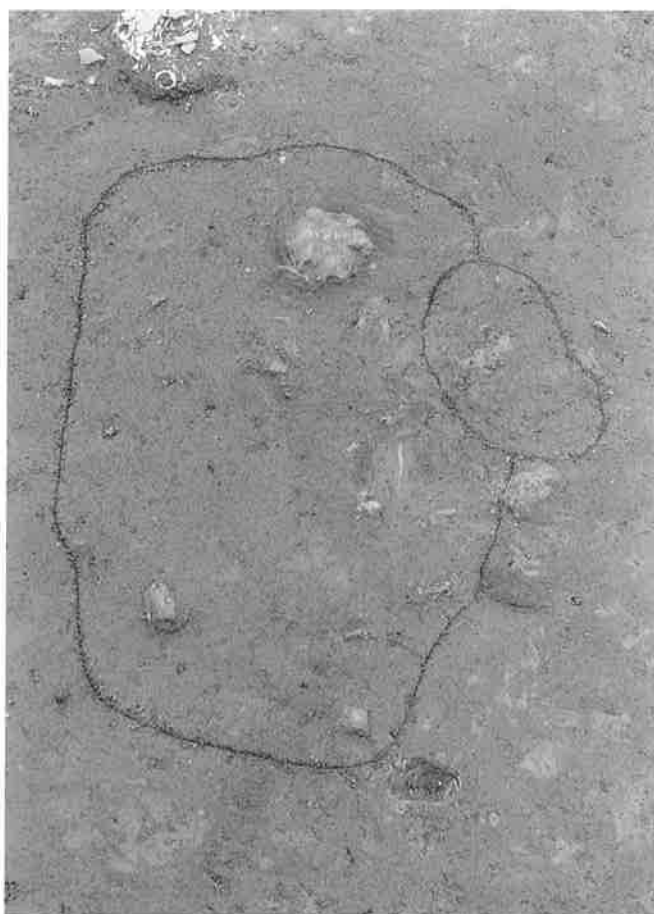
b. 1号縄文人骨検出状況（北から）



a. 1号縄文人骨貝輪装着状況（北東から）



b. 1号縄文人骨除去後の貝輪（北から）



a. 土墳墓 2 検出状況
(東から)



b. 土墳墓 3 検出状況 (北から)



a. 貝層上面検出状況（北西から）



b. C-3区、D-3区貝推積状況（北東から）



c. C-3区土掘断面（南から）



d. C-2区貝推積状況（南西から）



e. C-1区東側調査状況（西から）



f. C-1区西側調査状況（南から）



a. 縄文人骨副葬土器



b. 縄文人骨副葬土器底部木葉痕



18-1

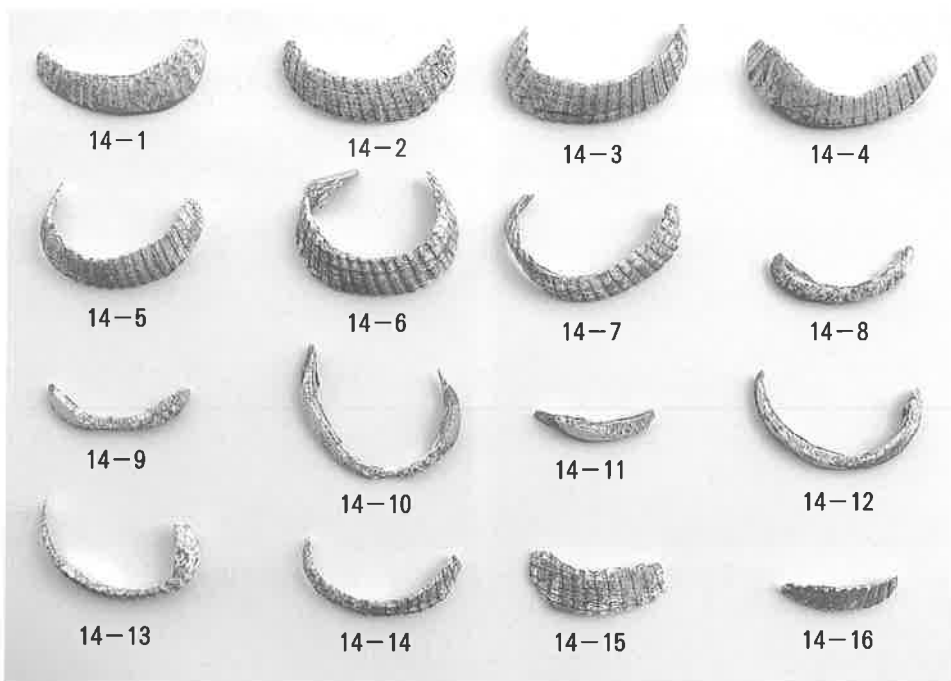


18-2

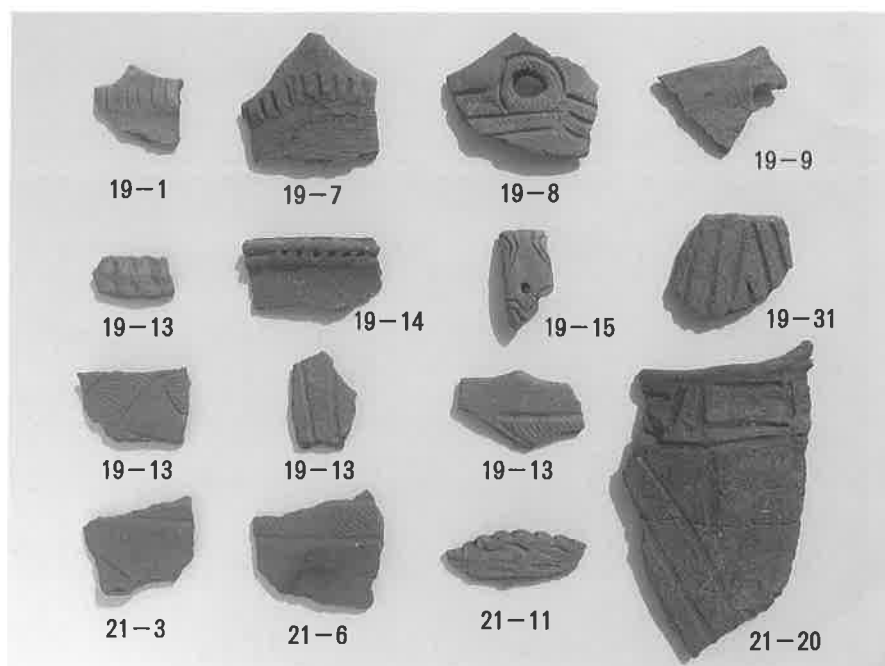


18-3

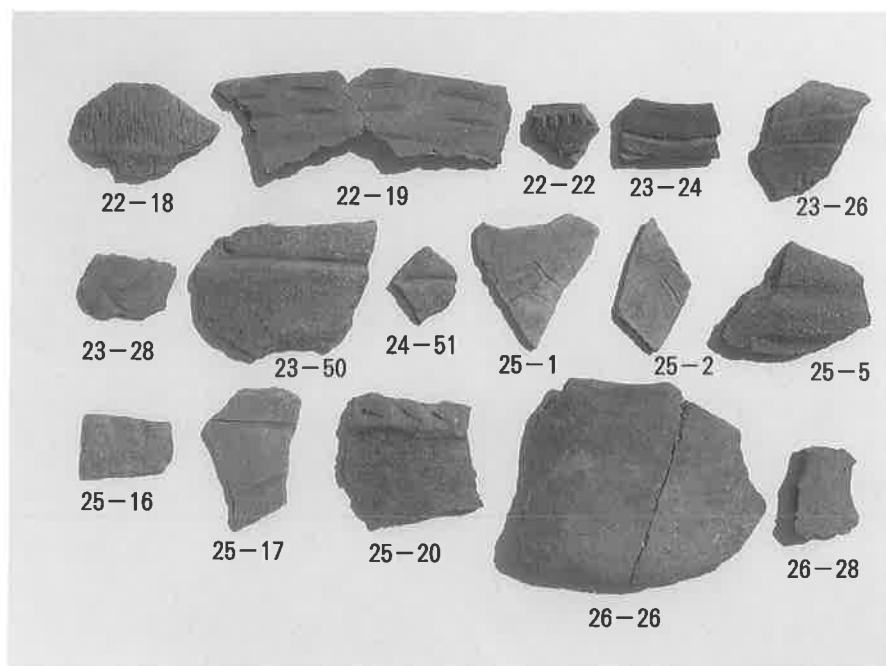
c. IV-02トレンチ中世人骨副葬土器



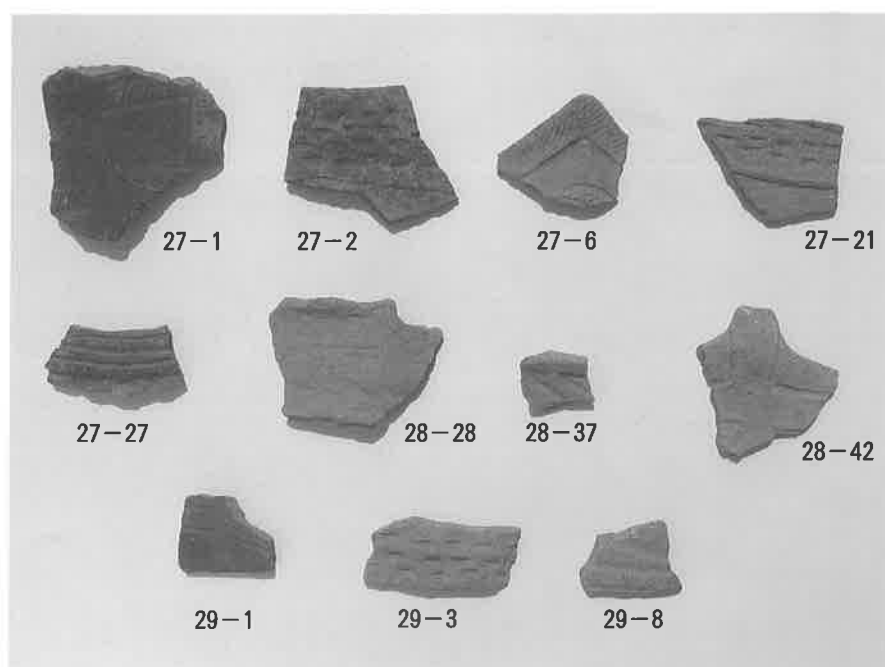
d. 縄文人骨装着貝製腕輪



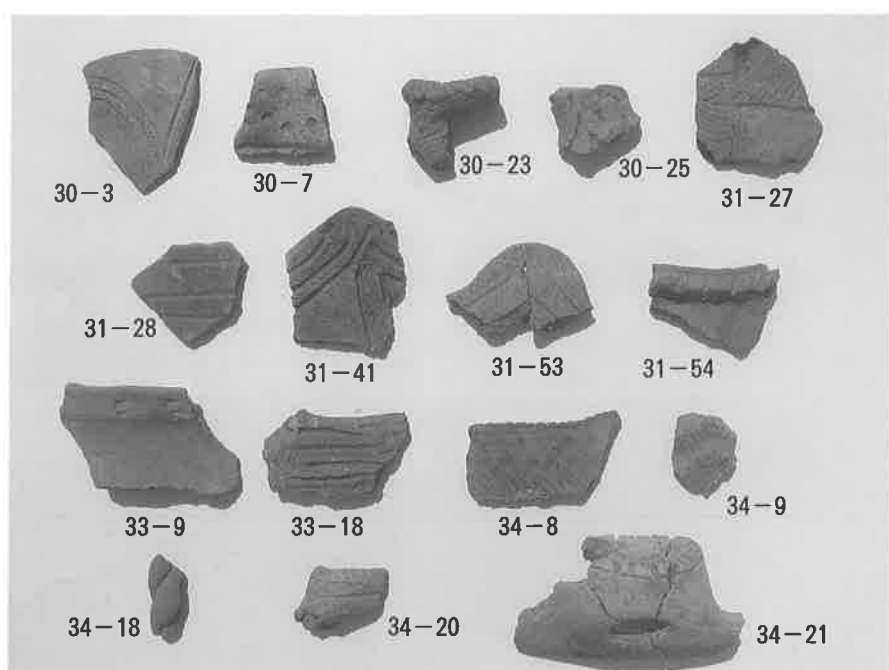
a. B-0区、B-1区、C-0区、C-1区出土土器



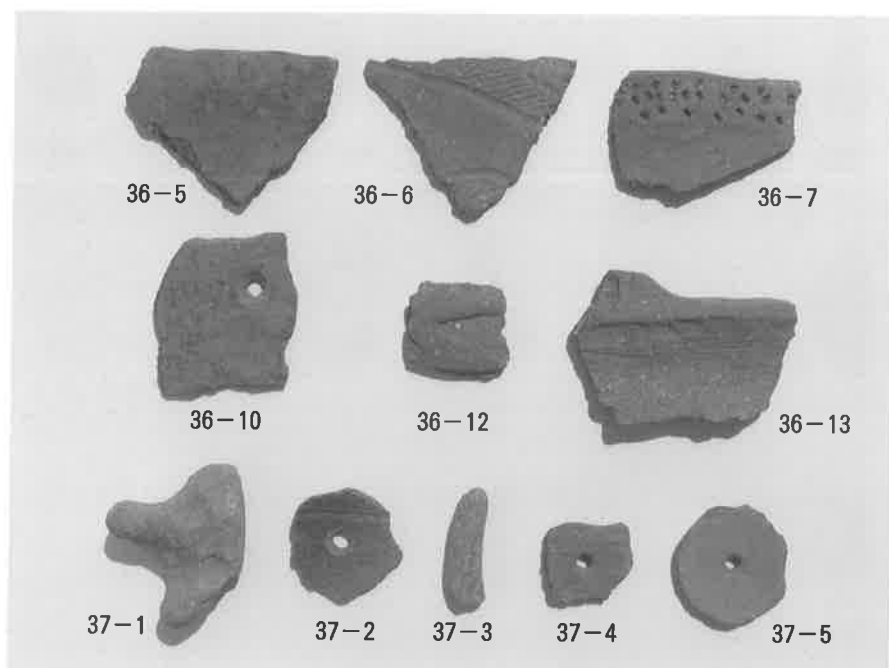
b. B-2区、C-3区出土土器



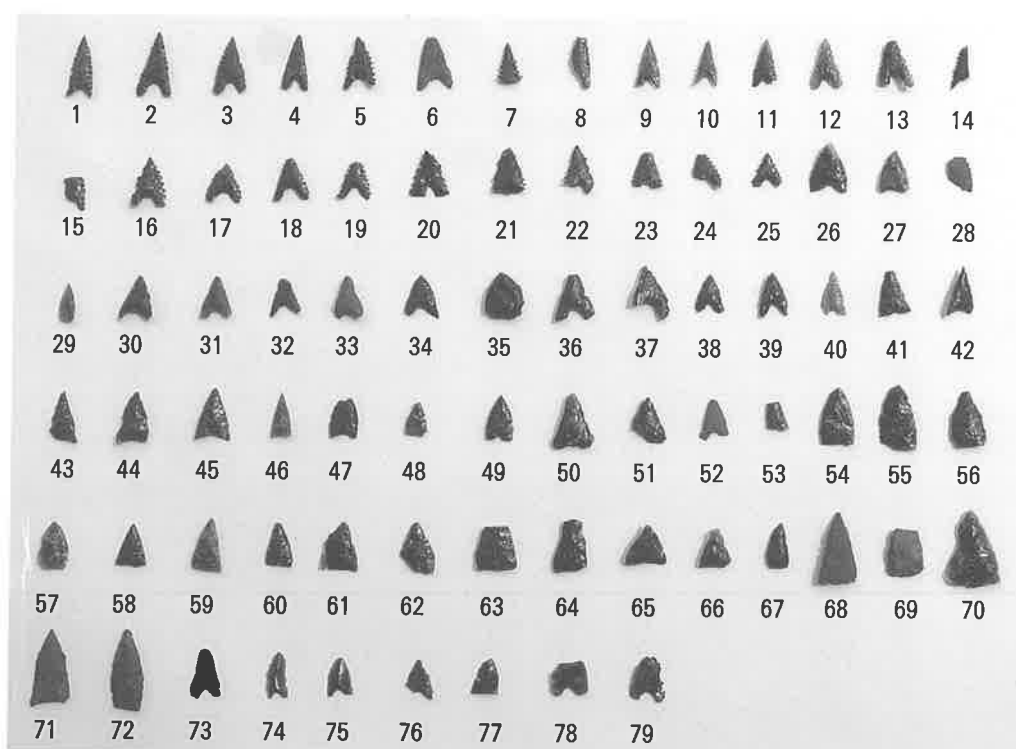
a. C-4区、D-1区、D-2区出土土器



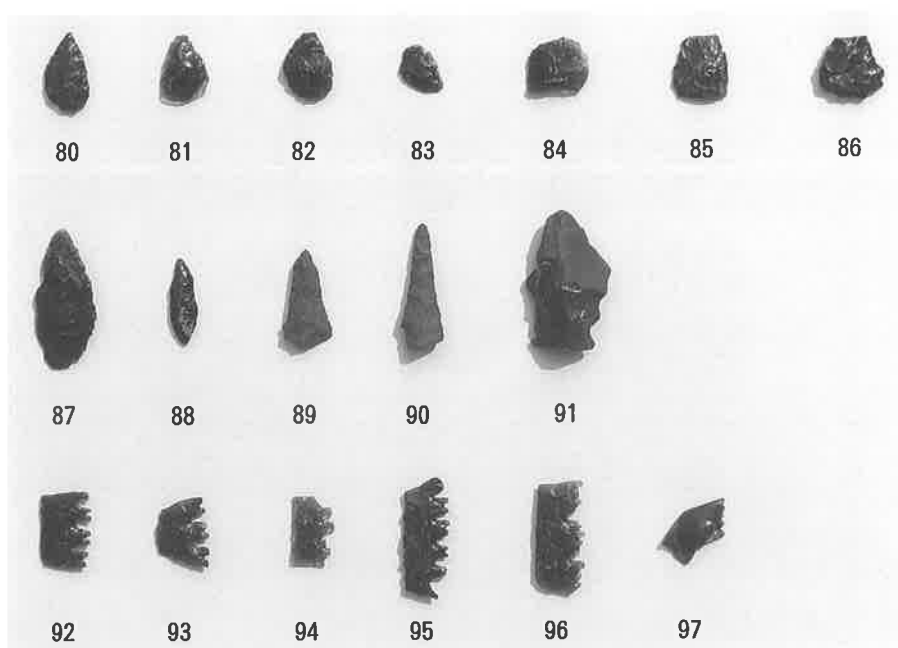
b. D-3区、D-4区、D-5区、B-3区、B-4区、C-5区、C-6区出土土器



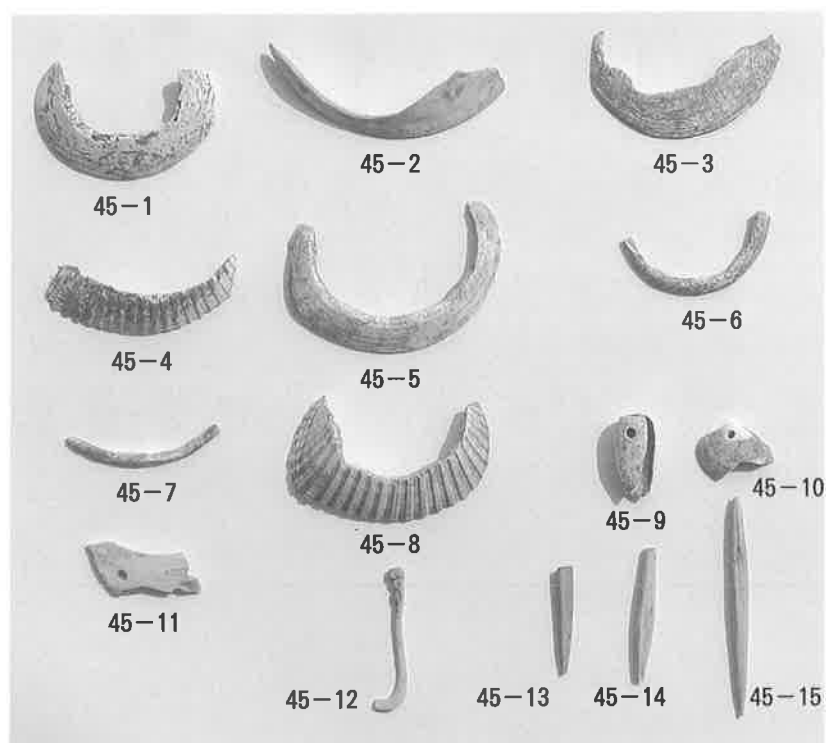
a. 包含層出土土器・土製品



b. 打製石鏃・剥片鏃



a. 搔器・石鋸・石鋸



b. 貝製品・骨角器

新町遺跡

V

志摩町文化財調査報告書 第16集

平成 4 年 3 月 31 日

発 行 志 摩 町 教 育 委 員 会

糸島郡志摩町大字初30

印 刷 有限会社 松古堂印刷

